

茨城県教育財団文化財調査報告 I

松葉遺跡

—竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 I —

茨城県教育財団
筑波大学歴史人類学系

昭和 54 年 3 月

財團法人

茨城県教育財団

松葉遺跡 正誤表

頁		行		誤	正
目版	目 次	PL 3 第11号住居址	出土状態	PL 3 第11号住居址	出土状態
*	*	PL 51 第3・4号塚	調査	PL 51 第3・4号塚	
1	上から 5	……地域内での……		……地域内での……	
3	3 ~ 4	……100個の入調査	×	……100個の小調査	×
4	10	第5章において		第4章において	
16	7	ローム粒子・ <u>粒子を少量含む</u>		ローム粒子・ <u>焼土粒子を少量含む</u>	
20	3	8. Hue 7.5YR		8. Hue 5YR	
21	3	2. Hue 7.5YR		2. Hue 5YR	
22	2	1. Hue 7.5YR		1. Hue 7.5YR	×
23	下から 2	第8号住居址	および……	第8号住居址の東および……	
*	1	北側に		南側に	
25	上から 9	3. Hue 7.5YR	%	3. Hue 7.5YR	%
26	2	1. Hue 7.5YR	%	1. Hue 7.5YR	%
41	11	6. Hue 7.5YR	%	6. Hue 7.5YR	%
*				第29回 縦尺は%	
61	7	2b Hue 7.5YR	%	2b Hue 7.5YR	%
*	8	2c Hue 7.5YR	%	2c Hue 7.5YR	%
62	3	7a Hue 7.5YR	%	7a Hue 7.5YR	%
64	9	比高は1.2mほどで		比高は1.7mほどで	
65	3	ロームブロックを含む暗褐色土		ロームブロックを含む褐色土	
*	5	4…ロームブロックを含む暗褐色土		4…ロームブロックを含む黒褐色土	
*	6	4a…ローム粒子を含む暗褐色土		4a…ローム粒子を含む黒褐色土	
66	四 頁	8		6	
73	4	砂粒・石英等が含み……		砂粒・石英等を含み……	
79	9	……斜位の刷毛	整形後……	……斜位の刷毛	整形後……
101	6	内外面とも石面転のロクロ		内外面とも右回転のロクロ	
107	9	一部になで痕がみられ	一が……	一部になで痕がみられる	一が……
109	11	道路中央部の西側に……		道路中央部の西側に……	
113	11	若柴に通じる道路が……		若柴に通じる道路が……	
114	3	杉原氏は南関東の……		杉原氏は南関東の……	
*	ドから 3	方形回溝墓の調査	……	方形周溝墓の調査	……
上から 8	そのうち7期が……			そのうち数基が……	
*	17	沖積地に西南する……		沖積地に西面する……	
*	ドから 11	方形回溝墓と……		方形周溝墓と……	
116	12	鹿島郡鹿島町木海台遺跡	が……	鹿島郡鹿島町木海台道路群が……	
122	8	田中學		田口學	

210.231
R 98
(NIS)

序

財団法人茨城県教育財団では、昭和52年度から埋蔵文化財発掘調査事業を実施しておりますが、本書は宅地開発会社からの委託により、昭和52年度に実施した松葉遺跡の調査結果を集録したものです。

茨城県の文化を究明するにあたって資するものがあろうと考えます。その意味からも、本書がより多くの方々に御活用いただけるよう希望いたします。

なお、調査にあたりまして、茨城県教育委員会、竜ヶ崎市教育委員会をはじめ関係機関の御協力・御指導をいただき、ここに厚くお礼申し上げます。

昭和 54 年 3 月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 竹内 藤男

寄贈	
歴史・人類学系	
平成	
年	
月	
日	

96605108

例　　言

1. 本書は、宅地開発公団と財團法人茨城県教育財団との委託契約に基づいて、昭和52年度に実施した竜ヶ崎市若柴町松葉所在松葉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、財團法人茨城県教育財団竜ヶ崎事業所主任調査員高根信和、調査員瓦吹堅が担当し、宅地開発公団竜ヶ崎事業所・茨城県教育委員会・竜ヶ崎市教育委員会等の諸機関をはじめ地元協力員の御協力を得た。
3. 出土遺物等の整理は、瓦吹堅が実施し、日立市郷土博物館・東海村教育委員会・勝田市教育委員会・鹿島町教育委員会の諸機関の御指導を得た。
4. 本書は瓦吹堅が執筆し、その内容については発掘調査担当者間等で協議を重ねた結果である。
5. 本書第2章の（ ）内の番号は、遺跡位置図（第3図）の遺跡番号であり、竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査対象地（昭和52年4月現在）はR番号とし、昭和53年4月以降の調査対象地はR23～R29である。
6. 前述の御指導・御協力を賜わった諸機関に対し、文末ではあるが感謝の意を表したい。

目 次

序

財 团 法 人 茨 城 県 教 育 財 团

例 言

理 事 長 竹 内 藤 男

目 次

挿図目次

図版目次

第1章 調査にいたる経過	1
1 竜ヶ崎ニュータウンの建設	1
2 調査組織	2
3 調査区画と調査法	2
(1) 調査区画と名称	2
(2) 調査法	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第3章 調査の経過	11
第4章 遺構・遺物	16
遺構	16
1 住居址	16
2 土壌	40
3 溝	60
4 塚	63
遺物	72
1 住居址出土の遺物	72
2 土壌出土の遺物	97
3 溝出土の遺物	100
4 塚出土の遺物	100
5 その他の遺物	101
(1) 先土器時代の遺物	101

(2) 縄文時代の遺物	102
(3) 古墳時代以降の遺物	103
第5章 終章	109
住居址群について	109
土塹群について	110
溝について	111
塚について	111
その他の遺構・遺物について	113
茨城県における丘陵期集落の調査動向と松葉遺跡	114

挿図目次

第1図 大調査区名称図	3
第2図 小調査区名称図	3
第3図 位置図	6
第4図 松葉遺跡全体図	9~10
第5図 遺構配置図(1)	12
第6図 遺構配置図(2)	13
第7図 遺構配置図(3)	14
第8図 第1号住居址実測図	16
第9図 第1号住居址貯蔵穴	18
第10図 第2号住居址実測図	19
第11図 第2号住居址貯蔵穴	21
第12図 第3・4号住居址実測図	22
第13図 第3号住居址貯蔵穴	23
第14図 第4号住居址貯蔵穴	24
第15図 第5号住居址実測図	25
第16図 第5号住居址貯蔵穴	26
第17図 第6号住居址実測図	27
第18図 第6号住居址貯蔵穴	28
第19図 第7号住居址実測図	29
第20図 第7号住居址貯蔵穴	30
第21図 第8号住居址実測図	31
第22図 第8号住居址貯蔵穴	32
第23図 第9号住居址実測図	33
第24図 第9号住居址貯蔵穴	35
第25図 第10号住居址実測図	37
第26図 第10号住居址貯蔵穴	38
第27図 第11号住居址実測図	39
第28図 第11号住居址貯蔵穴	40
第29図 土壌実測図(1)	41
第30図 土壌実測図(2)	44

第31図	土壤実測図（3）	50
第32図	土壤実測図（4）	53
第33図	土壤実測図（5）	54
第34図	土壤実測図（6）	58
第35図	第1号溝実測図および遺構配置図（4）	61
第36図	第2号溝実測図	62
第37図	第1号塚平面図	64
第38図	第1号塚断面図	65
第39図	第2号塚実測図	66
第40図	第3号塚平面図	67
第41図	第3号塚断面図	68
第42図	第4号塚平面図	69
第43図	第4号塚断面図	70
第44図	第4号塚出土状態	71
第45図	第1号住居址出土遺物	73
第46図	第2号住居址出土遺物	75
第47図	第3号住居址出土遺物	77
第48図	第4号住居址出土遺物	78
第49図	第5号住居址出土遺物	79
第50図	第6号住居址出土遺物	81
第51図	第7・8・9号住居址出土遺物	85
第52図	第9号住居址出土土製品	86
第53図	第10号住居址出土遺物	88
第54図	第11号住居址出土遺物（1）	91
第55図	第11号住居址出土遺物（2）	94
第56図	土壤出土遺物（1）	96
第57図	土壤出土遺物（2）	98
第58図	溝出土の遺物	100
第59図	第4号塚出土遺物	101
第60図	各調査区出土遺物（1）	102
第61図	各調査区出土遺物（2）	103
第62図	各調査区出土遺物（3）	104

第63図 各調査区出土遺物（4）	105
第64図 遺構および調査区出土土玉	106
第65図 住居址主軸方向表	110
第66図 土壌主軸方向表	111
第67図 茨城県内五箇期遺跡地図	118

図版目次

PL 1	松葉遺跡全景	
PL 2	松葉遺跡	
PL 3	第11号住居址出土状態	
PL 4	第11号住居址出土土器	
PL 5	松葉遺跡（林地区）	123
PL 6	松葉遺跡遺景	123
PL 7	松葉遺跡遺景	124
PL 8	松葉遺跡遺景	124
PL 9	松葉遺跡全景	125
PL 10	松葉遺跡全景	125
PL 11	第1号住居址	126
PL 12	第1号住居址遺物出土状態	126
PL 13	第2号住居址遺物出土状態	127
PL 14	第2号住居址	127
PL 15	第3号住居址遺物出土状態	128
PL 16	第3号住居址	128
PL 17	第4号住居址	129
PL 18	第5号住居址	129
PL 19	第6号住居址	130
PL 20	第7号住居址	130
PL 21	第8号住居址	131
PL 22	第8号住居址遺物出土状態	131
PP 23	第9号住居址および墓壙群	132
PP 24	第9号住居址遺物出土状態	132
PP 25	第10号住居址遺物出土状態	133
PP 26	第10号住居址	133
PP 27	第11号住居遺物出土状態	134
PP 28	第11号住居址遺物出土状態（部分）	134
PP 29	第11号住居址遺物出土状態	135
PP 30	第11号住居址	135

PL 31 第1号土壤	136
PL 32 第2号土壤	136
PL 33 第4号土壤	137
PL 34 第10号土壤	137
PL 35 第12号土壤	138
PL 36 第13号土壤	138
PL 37 第16号土壤	139
PL 38 第42号土壤	139
PL 39 第1号溝調査風景	140
PL 40 第1号溝	140
PL 41 第1号溝断面（1）	141
PL 42 第1号溝断面（2）	141
PL 43 第2号溝	142
PL 44 第2号溝断面	142
PL 45 第1号塚	143
PL 46 第1号塚調査風景	143
PL 47 第1号塚断面	144
PL 48 第2号塚	144
PL 49 第3号塚	145
PL 50 第4号塚	145
PL 51 第3・4号塚調査	146
PL 52 第3号塚	146
PL 53 第4号塚	147
PL 54 第4号塚遺物出土状態	147
PL 55 調査区出土先土器時代遺物	148
PL 56 第1号住居址出土遺物1～3（縮尺不同）	148
PL 57 第2(1)・3(2)・6号住居址(3～7)出土遺物（縮尺不同）	149
PL 58 第8(1)・9号住居址(2～3)出土遺物（縮尺不同）	150
PL 59 第10号住居址(1・2)出土遺物（縮尺不同）	151
PL 60 第10(1・2)・11号住居址(3・4)出土遺物（縮尺不同）	152
PL 61 第11号住居址(1～6)出土遺物（縮尺不同）	153
PL 62 第11号住居址(1～3)出土遺物および調査区出土砥石(4)（縮尺不同）	154

PL 63 各住居址出土石器	155
PL 64 第8(1)・9(2)・10号土壙(3)出土貨幣	156
PL 65 第11(1・2)・13号土壙出土遺物	157
PL 66 第14号土壙出土貨幣	158
PL 67 調査区出土繩文式土器	158
PL 68 第4号塚出土土師質土器(1～7)	159
PL 69 刷毛白絞形痕各種(1～3)	160



PL 1 松葉遺跡全景



PL 2 松葉遺跡



PL 3 第11号住居址出土土器出土状态



PL 4 第11号住居址出土土器

第1章 調査にいたる経過

1 竜ヶ崎ニュータウンの建設

竜ヶ崎ニュータウンは既成の竜ヶ崎市街地等とニュータウン地区を有機的に結合し、さらに周辺地域との調和ある開発をめざし、自然の保全に留意した潤いのある生活環境を創出する目的で、県南地域の中心である竜ヶ崎市の北部台地上に建設するものである。さらに、首都圏における膨大な住宅用地の需要に対し、良好な居住環境を備えた住宅用地の大量供給と健全な市街地の形成を図り、地域内での就業の機会の創出などによる居住者の地元定着をも図っている。いいかえれば、ニュータウンの建設によって、都市の機能を適切に分担した都市の創出を目的としている。

この竜ヶ崎ニュータウン建設の計画は、昭和46年1月に「竜ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され、事業名は「北竜台特定土地区画整理事業」および「龍ヶ岡特定土地区画整理事業」と称されている。

土地区画整理事業の実施される地区は、宅地開発公団所有の土地および一般土地所有者の土地等で、北竜台で小柴新田町・柏田町の全域と若柴町・福荷新田町・駒馬町・南中島町・別所町の一部で326.5ha、龍ヶ岡で貝原塚町・羽原町・八代町・長峰町の各一部の344.9haの計671.5haに及んでいる。

事業面積が671.5haにも及ぶニュータウン内は、首都圏および周辺地域との大きなつながりを有し、ニュータウン建設計画概要（注1）によれば、住宅地区のほか小学校8校・中学校4校・高等学校2校が教育施設として配置され、さらに公益施設・商業施設・誘致施設等の配置地区も計画されている。さらに、公園・緑地等も文化財保存地域等として配置される。

ニュータウン建設終了後の人口増加は75,000人ほどで、昭和52年度の統計による現市民の約42,000人はるかに越えた人口の増加がみこまれている。

竜ヶ崎市北部台地は利根川およびその支流によって形成された平野の中にあり、標高約10~30mほどの稲敷台地の南端部にあたり、台地には複雑な支谷が樹枝状に入りこんでいる。地質は成田層といわれる砂層を基盤とし、台地は凝灰質粘土層および関東ローム層が覆っており、谷部は軟弱な粘土および腐蝕土の堆積がみられる。

開発地域の現状は、北竜台において山林原野が約70%を占め、畠および水田等の耕地は24%である。龍ヶ岡において山林原野は約50%で、畠・水田等の耕地は40%以上を占めている。

注1 「北竜台特定土地区画整理事業 龍ヶ岡特定土地区画整理事業 事業計画概要書」宅地開発公団 昭和52年

2 調査組織

茨城県教育委員会は、県内各地の開発事業の進展に伴う埋蔵文化財発掘調査の需要の増加により、茨城県教育委員会のほかに埋蔵文化財発掘調査事業の実施機関を設置することを検討した結果、昭和52年4月から、財團法人茨城県教育財團に業務を実施させることを決定し、これに対応することとなった。

これにより、竜ヶ崎ニュータウン内の埋蔵文化財包蔵地等の発掘調査については財團法人茨城県教育財團の本部に調査課を新設して実施することになり、昭和52年4月1日から昭和53年3月31日迄の「北竜台及び龍ヶ崎土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の「業務委託契約」が宅地開発公団茨城開発局長と締結された。

これらの事業を進めるため、竜ヶ崎市古城3130番地に竜ヶ崎事業所を設置し、発掘調査に4名の職員を配置し、各調査員は作業員の募集・調査区の設定等調査の諸準備を分担し、昭和52年7月、竜ヶ崎ニュータウンの埋蔵文化財の発掘調査に関して鍼入式を行い、事実上の調査が開始された。

52年度発掘調査遺跡は、北竜台地区松葉遺跡（R 21）のほか龍ヶ崎地区外八代遺跡（R 5）の発掘調査を実施し、松葉遺跡の発掘調査に関しては主任調査員高根信和・調査員瓦吹堅が担当し、調査の補助を桜井二郎が担当した。また、多数の地元協力員の協力を得て実施した。

出土品等の整理作業は、昭和53年4月1日から調査員瓦吹堅が実施した。

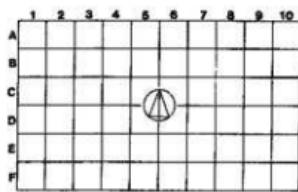
発掘調査および報告書作成段階には茨城県教育委員会をはじめ多方面からの御指導と御協力を得ることができた。

3 調査区画と調査法

（1）調査区画と名称（第1・2図）

北竜台地区における松葉遺跡の調査対象面積は約45,000m²と広大なもので、ほとんどが雑木林であった。茨城県教育委員会が実施した分布調査により、松葉古墳（注1）の存在と、林地内の畠地より出土する古墳時代の土器等によって埋蔵文化財包蔵地として調査対象遺跡となったものである。

発掘調査に際しての地区設定は、調査対象区域内の任意点（宅地開発公団基準杭No 291）を基



第1図 大調査区名称図

「j」までの大文字のアルファベット、西から東へ「1」・「2」……「9」・「0」の数字で表わす。このように分割された小調査の個有名称は、「Alal」・「Blal」のように表記される。

注! 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地名表』

昭和50年3月

茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』

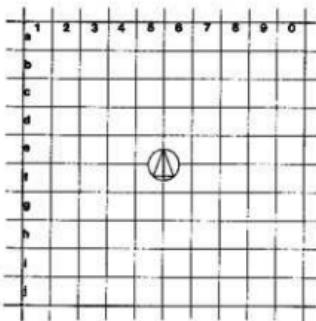
いずれも1557松葉古墳と記載されているが、

調査の結果、4基の墓群であった。

準として磁北線に沿って40m四方の大調査区を設定し、さらにその大調査区を4m四方の小調査区に分割する。40m四方の大調査区内に100個の人調査区が分割されるわけである。

大調査区の名称は、北から南へ大文字のアルファベットで「A」・「B」・「C」……、西から東へ数字で「1」・「2」・「3」……と表わす。

小調査区は、北から南へ「a」・「b」……「i」・



第2図 小調査区名称図

(2) 調査法

調査区画と名称については前述したが、松葉遺跡に設定された大調査区は30ほどで、かぎられた時間と予算でどのような調査法を実施するかが最大の検討課題であった。課内の検討の結果大略して3つの段階を追って調査を進めることにした。

第1段階は試掘に相当するもので、大調査区のうち同じ位置の小調査区の調査を対象区域内に実施する。

第2段階は第1段階の調査によって遺構が確認された小調査区の周辺部拡張と、小調査区の発掘区密度をあげる。

第3段階は、第2段階で全面形態が検出された遺構についての調査を実施することと、さらに小調査区の発掘区の密度をあげて調査し、遺構の集中する地域の表土全体の除去作業を実施する。

ことのような段階を追って調査を実施したが、第2段階の調査は第3段階においてもくりかえさ

れている。

これらの調査と並行して塚群の調査も実施された。

遺跡全体は山林のため篠・根株が多く、表土除去作業にも多くの時間を費した。層位については表土層・暗褐色土層・ローム層が基本層序であり、表土層・暗褐色土層とも約20cmほどの厚さを有している。

基本的には分層発掘を実施し、上層断面図作成時には『標準土色帳』（農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用い、色相・明度／彩度の記号で表わし、その内容について記入した。

遺構の調査については、竪穴住居址の場合、原則的に四分法で実施し、土壤等については二分法で実施した。それら遺構の内容については、第5章において記述する。

塚の調査は遺跡全体を分割した小調査区を基準としてトレーナーを設定し、最終的には塚全体を堆土する方法で実施した。

溝についても各小調査区ごとに追求し、小調査区の基準線を土層観察用のベルトとして残し、土層断面図作成後取り除いて全体を把握する方法で調査を実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

竜ヶ崎市は茨城県の南部に位置し、市内には利根川とその支流によって形成された沖積地が多く、現在水田として耕作されている。竜ヶ崎市街地のほとんどは、水田とほぼ同じ標高4mほどの沖積地上にある。市街地の北部には、標高10～30mほどの稲敷台地の南端部の低台地があり、南部には猿島丘陵の先端をなす標高21mほどの奥山台地が横たわっている。さらに、利根川を越えた南には千葉県木下周辺の台地がある。木下側台地と竜ヶ崎市街地北部の台地の間には、利根川等の河川によって形成された幅10kmにも及ぶ沖積地が開けている。その沖積地の中間に奥山台地が独立丘陵の状態で横たわって沖積地を二分している。前述のようにこの沖積地は、利根川・鬼怒川・小貝川の各水系が市内で合流し、幅10kmにも及ぶ沖積地を形成したといえる。

松葉遺跡は前述の北竜台地区の西部に位置し、若柴町字松葉1,788番地他の標高20mほどの平坦な台地上に所在している。東に伸びる稲敷台地の南端部は、いずれも北西部から南東部へと小支谷が形成されている。松葉遺跡の所在する若柴の台地の幅は400～500mと広く、坊山地区が台地の先端部である。この台地の南および北には、比較的大きな谷があり、南の谷に面して集落が形成されている。

調査対象区域は林遺跡の一部も含まれた45,000m²ほどの面積を有している。台地の南縁辺部はややゆるやかな傾斜を示し、沖積地水田面との比高は約10mほどである。この台地にも多くの小支谷が複雑にみられ、遺跡の南台地縁辺部にも北に向かう幅約80mで奥行100mほどの支谷がみられる。

現状は西の林地区が畠地のほかすべて雜木林で、遺跡の中央部には若柴から大羽谷津に通じる道路が東西に通っている。

2 歴史的環境

竜ヶ崎ニュータウン内の埋蔵文化財調査対象遺跡は、昭和52年4月現在で龍ヶ岡地区15遺跡、北竜台地区7遺跡である。しかし、発掘調査中の分布調査等により、北竜台地区における赤松遺跡(5)・沖餅遺跡(6)・坊山A遺跡(7)・坊山B遺跡(8)・奈良岡古墳群(9)・中根台遺跡(10)・廻り地B遺跡(11)と龍ヶ岡地区の向井原遺跡群(15)等が新発見されている。これらの新遺跡は工事用道路建設等の工事によって発見されたもので、現状は山林がほとんどで



第3図 位 置 図

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
R 1	長峰城跡	R 18	廻り地 A 遺跡	13	西花輪貝塚群
R 2	長峰古墳群	R 19	平台遺跡	14	貝原塚城跡
R 3	十三塚塚群	R 20	成沢遺跡	15	向井原遺跡群
R 4	尾坪台遺物	R 21	松葉遺跡(塚群含)昭和52年度調査	16	馬込稻荷遺跡
R 5	外八代遺跡昭和52・53年度調査	R 22	庚申塚遺跡	17	西平遺跡
R 6	屋代城跡	1	若柴城跡	18	登城山館跡
R 7	稻荷塚古墳群	2	宿畠遺跡	19	半田遺跡
R 8	南三島遺跡	3	林遺跡	20	要害城館跡
R 9	ダンゴ塚	4	稻荷古墳	21	養生峰貝塚
R 10	町田塚群	5	赤松遺跡(R 24)昭和53年度調査	22	竜ヶ崎城跡
R 11	かがみ塚	6	沖野遺跡(R 23)昭和53年度調査	23	愛宕山古墳
R 12	高井城下城跡	7	坊山 A 遺跡	24	駒馬城跡
R 13	前清水遺跡	8	坊山 B 遺跡	25	竜ヶ崎一高遺跡
R 14	塚下遺跡	9	奈戸岡古墳群	26	奈戸岡祭祀遺跡
R 15	町田遺跡	10	中根台遺跡	27	打越A遺跡(R 25)
R 16	行部内遺跡(貝塚含)	11	廻り地B遺跡(R 29)	28	打越C遺跡(R 26)
R 17	大羽谷津遺跡	12	堂の下貝塚	29	ウツブタ遺跡(R 27)
				30	中根台塚群(R 28)

ある。現状から遺跡の発見は不可能で、今後工事等による遺跡の発見は多いと考えられる。

昭和52年度内に県教育委員会による北竜台地区の新遺跡の分布調査が実施され、沖餅遺跡・赤松遺跡等7ヶ所が新対象遺跡として昭和53年度から加わり、沖餅遺跡・赤松遺跡等の調査が実施された。

松葉遺跡の周辺に遺跡に多く、南側の駒馬側の台地上には平台遺跡（R 19）・成沢遺跡（R 20）があり、かなり広範囲に縄文式土器・土師式土器の分布が認められる集落遺跡である。成沢遺跡は北側の沖積地に向かってゆるやかな傾斜を示す標高15～18mほどの低台地で、昭和43年に県立竜ヶ崎第二高等学校が中心となって古墳時代前期の住居址1基の調査が実施されている。そのほかに、縄文時代の遺物の散布も認められ、平台遺跡もほぼ同時期の集落遺跡である。

同じ台地上の駒馬町の南部には県指定史跡の駒馬城跡がある。駒馬城跡は南北朝期に高井城（14）と共に宮方として奮戦し、屋代城（R 6）は武家方であった。

さらに南の台地先端部には愛宕山古墳（23）があり、公園建設中に馬形埴輪・人物埴輪等の形象埴輪と円筒埴輪が出土している。

若柴町の宿内には若柴城跡（1）・宿畠遺跡（2）がある。宿畠遺跡は古墳時代前期の集落跡で、昭和52年11月に芋穴の穿掘の際に台付斐形土器等の完形品が出土した。その土器出土地点は深さ1mほど黒い土がみえ、木炭・焼土が多く出土したことである。

若柴城跡は岡見氏の居城といわれ、牛久城主由良氏と密接な関係にあり、宿はずれには由良氏建立の金竜寺がある。若柴町は17世紀の前半に水戸街道の若柴の宿であった。

若柴の台地の北側には大羽谷津の台地があり、この台地上にも多くの遺跡が点在している。昭和53年度に調査実施した沖餅遺跡の北側には大羽谷津遺跡（R 17）・廻り地A遺跡（R 18）があり、縄文時代後期の土器を主体に出土する集落跡で、本来同一の遺跡として把握される。その周辺の小丘には、新発見の調査対象遺跡として打越A遺跡（R 25）・打越C遺跡（R 26）・ウツブタ遺跡（R 27）・中根台塚群（R 28）・廻り地B遺跡（R 29）が点在している。

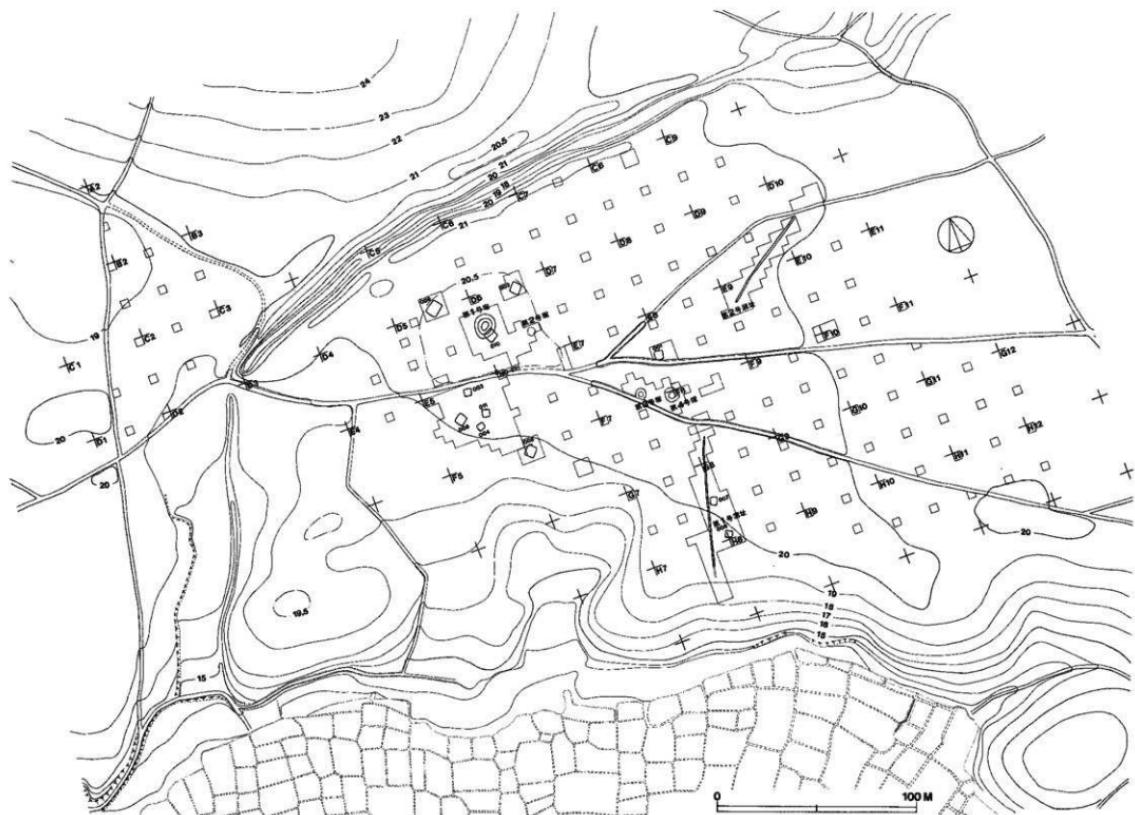
別所町には行部内遺跡（R 16）があり、貝塚を含む範囲が現状保存される予定である。その行部内遺跡の北側には縄文時代前期に編年される堂の下貝塚（12）がある。

以上のように北竜台地区において、かなり多くの遺跡が各時代にわたって点在し、龍ヶ岡地区においても同様である。

竜ヶ崎ニュータウン内遺跡および周辺の遺跡

(昭和54年3月31日現在)

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	基準	遺跡名	所在地	種類	時代	基準
R 1	長崎城跡	長崎町龜ヶ井他	城郭跡	中世以降	5	赤松遺跡	若槻町赤松(R24)	集落跡	鶴文・古墳	
R 2	長崎古墳群	長崎町沼田	古墳群	古墳	6	沖野遺跡	若槻町沖野(R23)	集落跡	鶴文・古墳	
R 3	一三塚原跡	貝塚郡明月十二塚	塚原	中世以降	7	坊山A遺跡	小堀町坊山	集落跡	鶴文・古墳	
R 4	尾平河遺跡	八代町尾平台	遺跡	古墳	8	坊山B遺跡	小堀町坊山	集落跡	鶴文・古墳	
R 5	外八代遺跡	八代町新田敷台	集落跡・地軸跡	鶴文・中世以降	9	余戸町古墳群	朝霧町余戸岡	古墳群	古墳	
R 6	尾代城跡	八代町城ノ内	城郭跡・集落跡	鶴文・中世以降	10	中根古墳跡	朝霧町中根台	集落跡・古墳	鶴文・古墳	
R 7	船原町古墳群	八代町窓	古墳群	古墳	11	廻り地B遺跡	朝霧町廻り地(R29)	集落跡	鶴文	
R 8	南二三古墳跡	北郷町山田島	集落跡	鶴文・古墳	12	堂ノ下聚落	別所町堂ノ下	貝塚群	鶴文	
R 9	ダンゴ塚	貝塚郡阿賀堂	塚原	中世以降	13	國花輪聚落	上幕原町国花輪	貝塚群	鶴文	
R 10	町山遺跡	貝塚郡町山田	塚原	中世以降	14	以庭原聚落	貝塚郡町下原原	城郭跡	中世以降	
R 11	かがみ塚	貝塚郡後谷	塚原	中世以降	15	前井家遺跡群	貝塚郡前井原	集落跡	先・鶴文・古墳	
R 12	高井城下城跡	貝塚郡引田城跡	城郭跡・防塁跡	中世以降	16	馬込郡荷造跡	荷造郡東平	集落跡	鶴文	
R 13	前清水遺跡	貝塚郡町前水	集落跡・貝塚・礎跡	鶴文・古墳	17	西川遺跡	荷造郡西平	集落跡	鶴文	
R 14	塙下遺跡	貝塚郡町塙下	塚原・耕作跡	中世以降	18	登坂山城跡	下田町登坂	城郭跡	中世以降	
R 15	町山遺跡	貝塚郡町山田	塚原・耕作跡	鶴文	19	半田町東	半田町東	集落跡	古墳	
R 16	行部町行部内	別所町行部内	集落跡・貝塚	鶴文	20	要古山城跡	中山町要古	城郭跡	古墳	
R 17	大羽山遺跡	若柴町大羽谷津	塚原	古墳	21	蟹生隣11保	傳音町蟹生隣	貝塚	鶴文	
R 18	廻り地A遺跡	廻り地廻り地	塚原・耕作跡	鶴文	22	龟ヶ崎城跡	古城	城郭跡	中世以降	
R 19	平台北遺跡	廻り地平台北	塚原・耕作跡	鶴文・古墳	23	愛宕山古墳	愛宕山古墳	古墳	古墳	
R 20	成泥遺跡	廻り地成泥	塚原	古墳	24	廻り地城跡	廻り地山丘上	城郭跡	中世以降	
R 21	松葉遺跡	若柴町松葉	集落跡・塚原	古墳・中世以降	25	龜ヶ崎一高遺跡	龜ヶ崎第一高等学校	集落跡	古墳	
R 22	汎和原遺跡	若柴町汎和原	集落跡・中塚原	鶴文・古墳	26	奈利利開拓遺跡	朝霧町奈利利	城郭跡	古墳	
1	若柴地跡	石梨町	塚原	中世以降	27	打越八遺跡	別所町打越38-2地(R25)	集落跡	鶴文	
2	宿烟遺跡	石梨町宿烟	集落跡	古墳	28	打越C遺跡	別所町打越414地(R26)	集落跡	鶴文・古墳	
3	林遺跡	石梨町林	集落跡	古墳	29	ウツタ遺跡	別所町ウツタ428-1地(R27)	集落跡	鶴文	
4	船荷古墳	船荷新田町	古墳	古墳	30	中根古墳群	朝霧町中根台(R28)	塚原	中世以降	



第4図 松葉道跡全体図

第3章 調査の経過

昭和52年4月に調査課が新設され、7月に実質的な発掘調査が開始されるまで主に調査方法の検討および調査器材の選択などを行い、後半は竜ヶ崎事業所の設置や発掘調査地域の雑木林伐採などの作業と作業員募集を行った。

7月22日に竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査の鍵入式が宅地開発会社をはじめとして茨城県教育委員会・竜ヶ崎市教育委員会及び地元協力員等の参加を得て、松葉遺跡第1号塚前で挙行した。これによって実質的な発掘調査が開始されたわけである。以下発掘調査の経過について、段階的に記述する。

7月下旬～8月中旬

7月25日より現地作業を開始し、調査区域内の地区設定および除草作業等を実施する。地区設定は前述のように宅地開発会社基準杭No291を基準として大部分がなされているので、さらに小調査区の設定を行う。

8月上旬から調査地域西部の林地内の調査地区A 2・B 1～B 3・C 1～C 3・D 1を中心とし調査を実施した。当地区の第1段階の調査の結果、ほとんど遺物の出土がみられない。さらに西部地区から東側地区に移動し、小調査区の設定および除草作業と並行して第1段階の調査をすすめた。

8月下旬～9月上旬

8月中旬から雨天日が多く、発掘作業は中止されることが多く、調査にかなりの影響を及ぼした。

第1段階の調査の進行により遺物・遺構の分布は南部の台地縁辺部E 5・E 6区に多く検出される。遺物・遺構の分布状況についてもそれほど濃厚ではなく、遺物についても集中して出土しても10数片の土師式土器で、1～2片の土師式土器を出土する小調査区がほとんどである。

西部の林地区については遺物・遺構が第1段階の調査で検出されないため、調査を終了した。

小調査区の調査と並行して実施した小調査区設定および除草作業もほとんど全地域が終了する。

9月下旬

調査は東部地区および南部地区に移り、D 9およびG 7区において溝状遺構の一部が検出される。G 7区の溝状遺構は第1号溝として追求し、D 9区のものは第2号溝とする。いずれも上幅1m内外の小規模のものである。

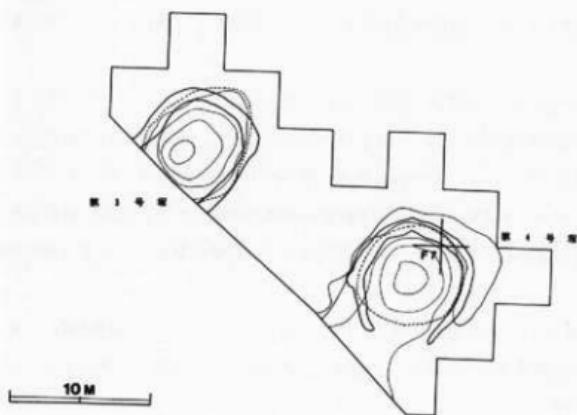
10月上旬～10月下旬

10月上旬において全地域の第1段階の調査をほぼ終了し、第2段階の調査を並行して行う。第



第 1 号 住 宅

D7 D8
E7 E8



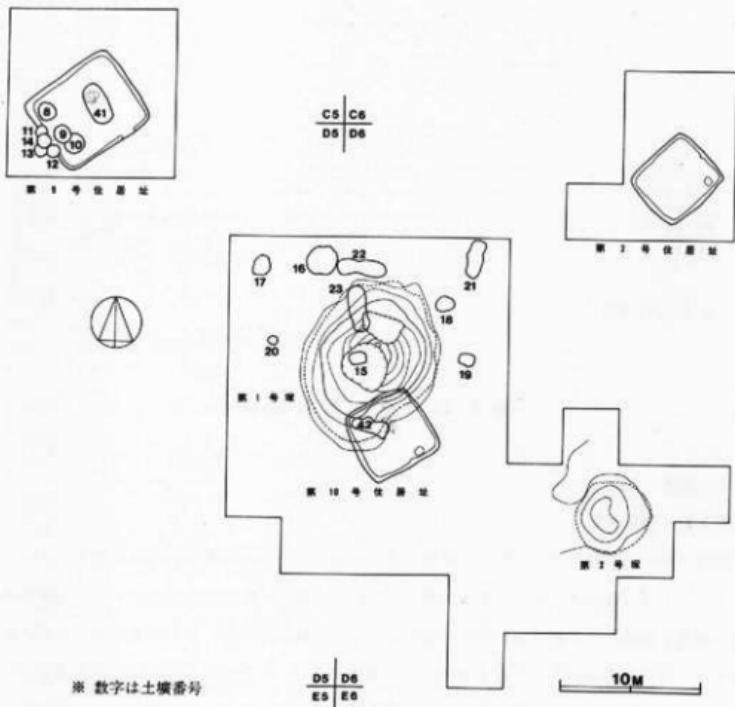
第 5 図 造 構 配 置 図 (1)

2段階の調査は遺跡中央部・北西部・南部および南西部地区に実施され、10月下旬には第1号住居址から第7号住居址までの7基の住居址と溝および若干の土壙が検出された。

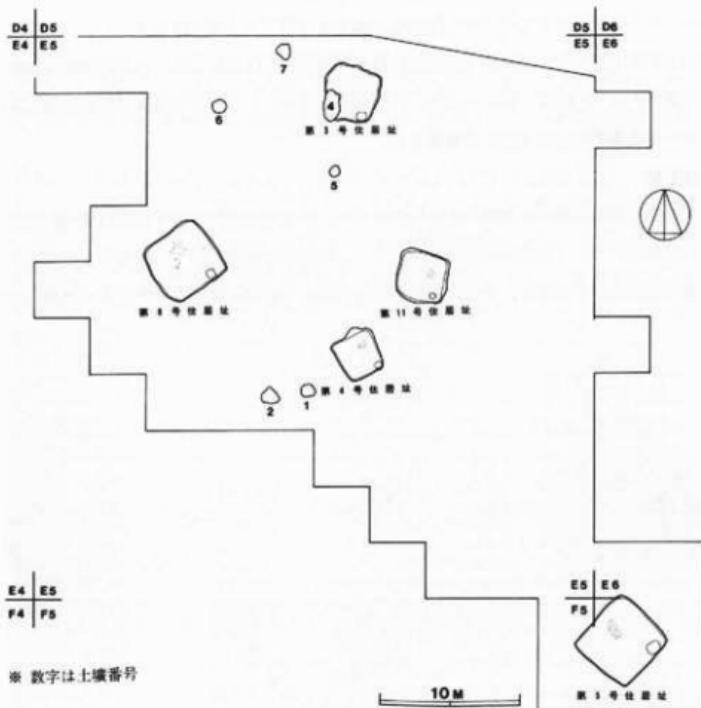
調査がすすむにつれて遺構の平面形は明確に把握され、住居址はほとんど方形の平面形を示し、第1号溝はF 8・G 8・G 7区にわたり、ほぼ北々東方向に走り、第2号溝はE 9・D 9・D 10区にまたがって北東方向に走ることが判明した。

11月上旬

10月に第2段階の調査を実施した住居址のうち、第1号住居址・第2号住居址・第5号住居址・第7号住居址について遺構内の調査を開始する。住居址の調査に伴って作業員との相互の現地研修を重ねて調査をすすめる。住居址等の調査と並行して遺跡中央部を東西に走る道路沿の第3・



第6図 遺構配図(2)



第7図 遺構配置図(3)

4号塚の調査を開始する。

10月上旬～10月下旬

住居址が集中して検出されたE 5区全面の表土を排土し、新たな遺構の検出に努める。

E 8・G 7区に確認されている第1号溝およびE 9・D 9・D 10区に確認されている第2号溝の追求調査を継続して実施する。第1号溝および第2号塚は中央部において連結するものと考えられたが、追求調査の結果はそれぞれ独立した遺構であることが判明した。いずれの溝も上幅1m内外で深さは30cmほどの浅い小規模のものであり、溝内からはほとんど遺物の出土が認められない。

第3・4号塚の調査は、いずれも塚裾部に同溝状の落込みが確認され、第4号塚の盛土中から

土師質土器（かわらけ）が7枚出土した。7枚のうち6枚の土師質土器は集中して置き並べられた状態で出土している。第3・4号塚の調査に並行して第1・2号塚の調査を開始する。

12月上旬～12月下旬

昭和52年内調査の終結のため、各造構の実測および写真撮影等の作業を実施する。

第1・2号溝はその全体の調査を終了し、土層断面図作製等の作業を実施し、第1号塚の調査の段階で、塚の南裾下に第10号住居址が検出された。

12月21日～昭和53年1月4日

年末年始のため現地作業を中断する。

1月上旬

現地作業再開のための諸準備を実施する。

1月中旬～1月下旬

年末年始の休暇期間に現地も霜等のため荒れ、作業再開と同じに清掃作業を実施する。昨年に引き続きE5区の精査を行い、第8・11号住居址が確認され、D5区に検出されている第9号住居址は近世の墓塚と複合していることが判明した。

第1号塚は土層断面作製後に堆土し、第10号住居址内の調査を開始する。第1・2号溝については平面図作製作業を開始する。

2月上旬～2月下旬

第9号住居址と複合している土壤群7基の調査を実施し、人骨のほか貨幣・烟管等が出土した。これらの土壤群を含めた土壤の調査をほぼ終了し、第3・9号住居址等の調査を実施する。第9号住居址内からは多くの焼土と炭化材が検出され、火災に遭遇したものと判明した。

下旬にはほぼ全造構の調査が終了し、実測等の記録を残すだけとなり、航空写真撮影を実施する。

2月28日に調査器材等の整備を行い、昭和52年度松葉遺跡における作業員による作業を終了する。

3月上旬～下旬

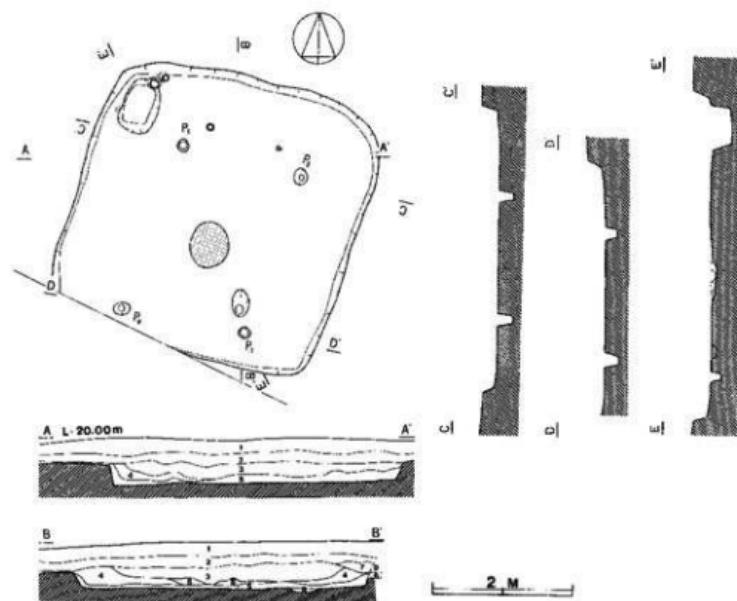
調査員・調査補助員により、残された記録調査を実施し、近世墓塚群の人骨等を収納する。

中旬からは室内作業に移り、図面等の整理等を実施し、これにより昭和52年度の松葉遺跡の発掘調査は完了した。

第4章 遺構・遺物

1 遺構

1 住居址



第8図 第1号住居址実測図

第1号住居址土層解説

1. Hue 7.5YR 4/6 褐色土(表土層)
2. Hue 7.5YR 5/6 褐色土
3. Hue 7.5YR 3/6 ローム粒子を含む褐色土
4. Hue 7.5YR 3/6 ローム粒子を含む深褐色土
5. Hue 7.5YR 3/6 ローム粒子・粒子を少く含む黒褐色土
6. Hue 7.5YR 3/6 褐色土(ローム)
7. Hue 7.5YR 3/6 ローム粒子を多く含む明褐色土
8. Hue 7.5YR 3/6 ローム粒子・褐色土を含む黒褐色土
9. Hue 7.5YR 3/6 褐色土(ローム)

住居址遺構は、南台地縁辺部から北に入りこんだ上幅約80m・奥行100mほどの小支谷を中心確認され、ほぼその支谷をかこむ状態を呈している。支谷の谷頭部の奥に9基が集中してみられ、支谷の東側にほかの住居址がみられた。これら11基の住居址群には住居址と住居址の複合はみられず、同一時期あるいはそれに近い時期に展開された集落であると考えられ、住居址内には火災のあとと思われる焼土塊・木炭などが検出されるものが多い。

第1号住居址（第8図）

本住居址は址E7e o・E7f o・E8c l・E8f lに確認され、調査地区のほぼ中央部で第3号塚・第4号塚の北側に位置している。

主軸方向はN-17°-Eで、長径4.0m・短径3.96mほどの隅丸方形の平面形を呈し、南西コーナー部と南壁の一部は道路のため調査を実施することができなかった。P2の付近には小範囲であるが焼土が床面上に検出され、厚さは3cmほどである。

遺構は表土下第Ⅲ層面に検出され、ほとんどの壁は外反して立ちあがり、壁高は20～25cmほどである。床はロームであり、ほぼ平坦をなし、硬質の床面を呈している。

炉址は床の中央部よりやや南側に位置し、長径64cm・短径56cmほどの楕円形の平面形を呈し、皿状に8cmほど掘られている。内部には焼上がりが充満し、炉床は硬く焼けている。

ピットは6個ほど検出され、主柱穴としてはP1～P4が考えられ、各々対角線上に位置している。直径はそれほど大きいものではなく、深さは17～20cmほどである。

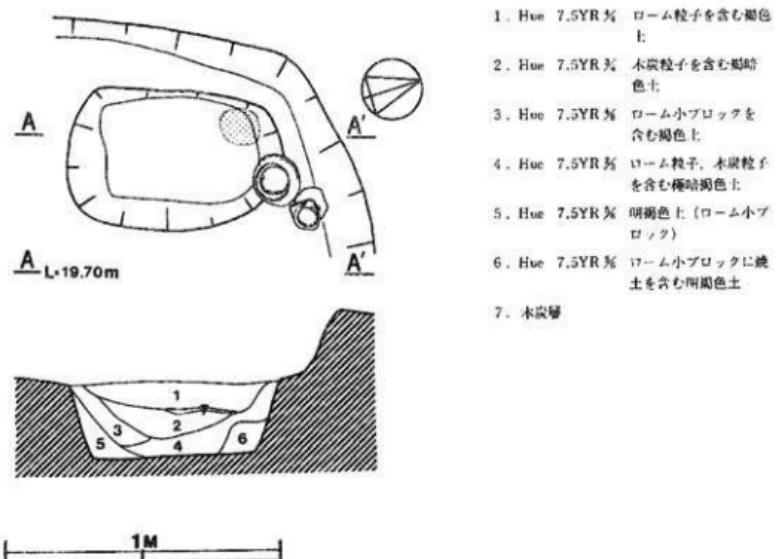
ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	19	17	18	主柱穴
P 2	28	19	20	*
P 3	17	16.5	17	*
P 4	21	17	20	*
P 5	10.5	10	24	
P 6	40	25	8	

貯藏穴（第9図）は北西コーナー部にあり、長径78cm・短径52cmほどの隅丸方形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは25cmほどで、壁は垂直に立ちあがっている。覆土中には木炭粒子を含む土層がみられ、覆土Ⅰ層下に木炭粒子層の堆積がみられる。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、やや硬質の黒色土が20～25cmほどの厚さに堆積し、最下層はローム粒子および焼土粒子を少量含む黒褐色土がみられる。

遺物は貯藏穴の北側床面に壺形土器（第45図1）、壺形土器（第45図3）が出土し、P2の北

第1号住居址貯蔵穴土層解説



第9図 第1号住居址貯蔵穴

西部に器台形土器（第45図4）が出土している。

遺構内から焼土・木炭等の検出量は少ないが、貯蔵穴内の木炭粒子層等から火災にあったものであると考えられる。

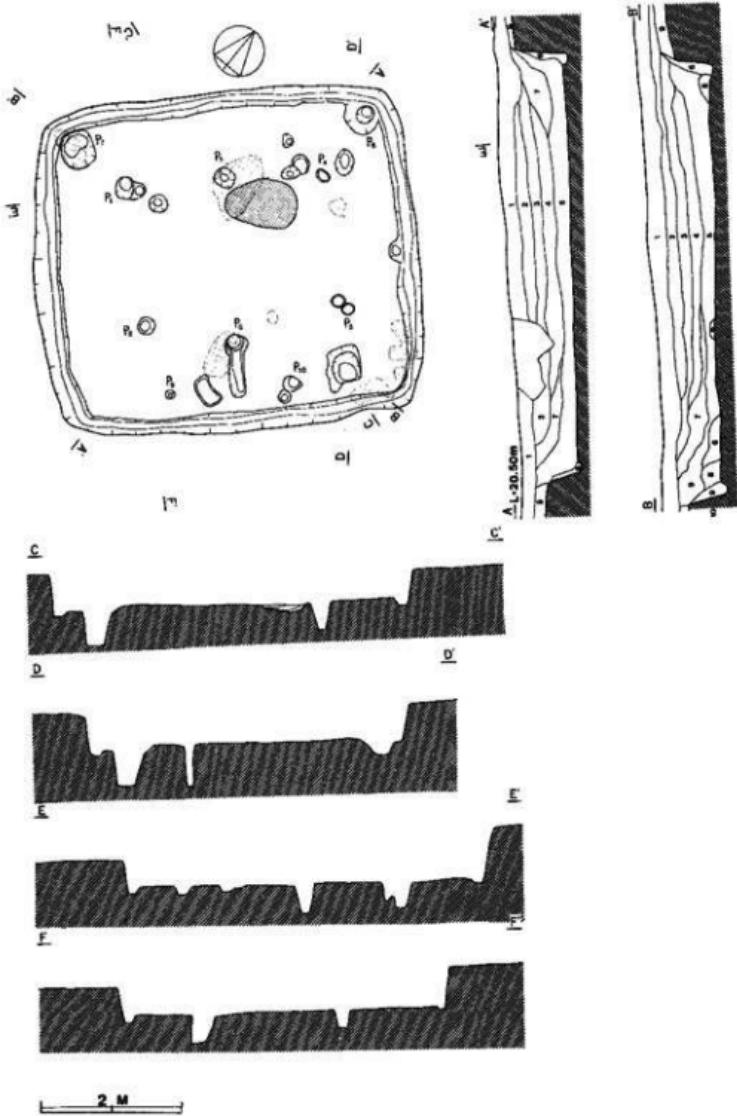
第2号住居址（第10図）

本住居址はD6 a 6・D6 a 7・D6 b 6・D6 b 7に確認され、第10号住居址の20mほど東北部にあり、第9号住居址の35mほど東部に位置している。

主軸方向はN-45.5°-Eで、長径5.5m・短径4.83mほどの隅丸方形の平面形を呈し、炉址周辺・西コーナー部・東コーナー部および東南壁近くに焼土が床面上に検出されている。

遺構は表土下第Ⅱ層から掘りこまれ、南西壁以外の各壁は垂直ぎみに立ちあがり、壁高は50~60cmほどであり、壁下には溝が周回している。壁溝は20~25cmほどの幅を有し、深さは5~10cmほどである。

ピットは17個ほど確認されたが、主柱穴としてはP 1~P 4が考えられ、P 5・P 6は主柱穴と密接な関係を示すものであると考えられる。また、北コーナー部および西コーナー部に検出さ



第10図 第2号住居址実測図

第2号住居址土層解説

- | | |
|--|---------------------------------|
| 1. Hue 7.5YR 4/2 棕色土 (表土層) | 6. Hue 7.5YR 4/2 ローム粒子を多く含む褐色土 |
| 2. Hue 7.5YR 4/2 暗褐色土 | 7. Hue 7.5YR 4/2 ローム粒子を含む暗褐色土 |
| 3. Hue 7.5YR 4/2 ローム粒子を含む暗褐色土 | 8. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を多量含む暗赤褐色土 |
| 4. Hue 7.5YR 4/2 ローム粒子を少量含む黒褐色土 | 9. Hue 7.5YR 4/2 褐色土 (ローム漸移層) |
| 5. Hue 7.5YR 4/2 ローム粒子・焼土粒子・木炭粒子を含む褐色土 | 10. Hue 7.5YR 4/2 明褐色土 (ローム) |

れているピットも上屋の構造との関係が考えられる。南東壁部にみられるP9・P10は出入口部の施設のあとであろうか。

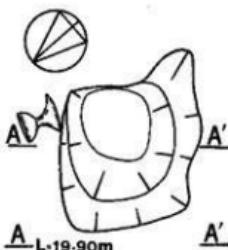
ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	31	25	40	主柱穴 複合
P 2	25	23	29	◆
P 3	19	17	59	◆
P 4	20	14	26	◆
P 5	31	27	41	◆
P 6	23	22	40	複合
P 7	53	47	21	
P 8	27	23	24	
P 9	14	13	21	
P 10	27	21	23	複合

貯藏穴（第11図）は東コーナー部にあり、2段掘りこみ状をなし、長径51cm・短径50cmほどの不整形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは45cmほどである。壁は垂直ぎみに開いて立ちあがり、底面は平坦である。覆土Ⅱ層には暗赤褐色を呈した焼土層の堆積がみられる。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、覆土上層は暗褐色土および黒褐色土が堆積し、最下層は焼土粒子および木炭粒子を含む褐色土の堆積がみられる。また、各壁周辺には焼土粒子を多く含む暗赤褐色土層が中央部に向かって傾斜を示して堆積している。

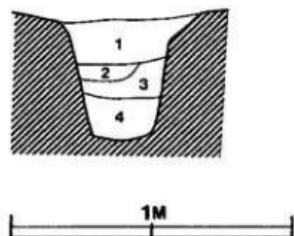
遺物は東コーナー部の床面に集中してみられ、壁よりには變形土器（第46図1～3）が出土し、貯藏穴縁部には高環形土器（第46図4）が出土している。

遺構内の壁周辺およびコーナー部には焼土塊が検出され、床面上には木炭が部分的に検出され、火災にあったものと考えられる。



第2号住居址貯蔵穴土層解説

1. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子・木炭粒子を含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 3/4 噴赤褐色土（焼土層）
3. Hue 7.5YR 3/4 黒褐色土
4. Hue 7.5YR 3/4 黒褐色土



第11図 第2号住居址貯蔵穴

第3号住居址（第12図）

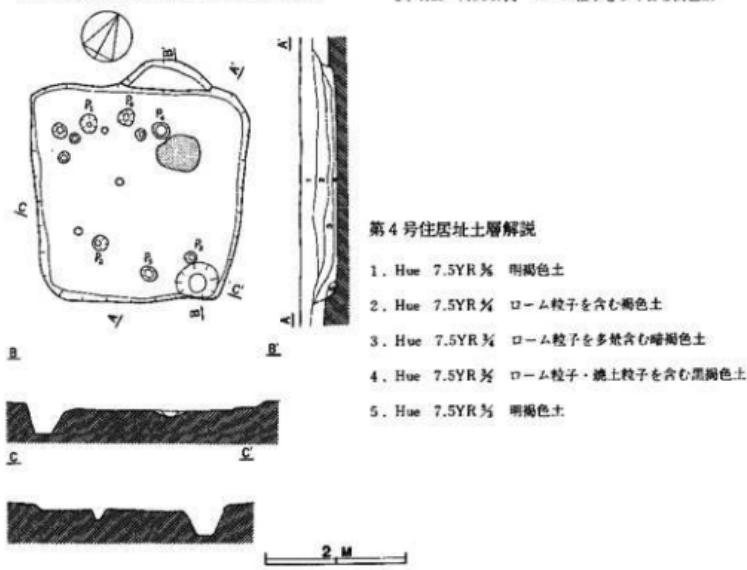
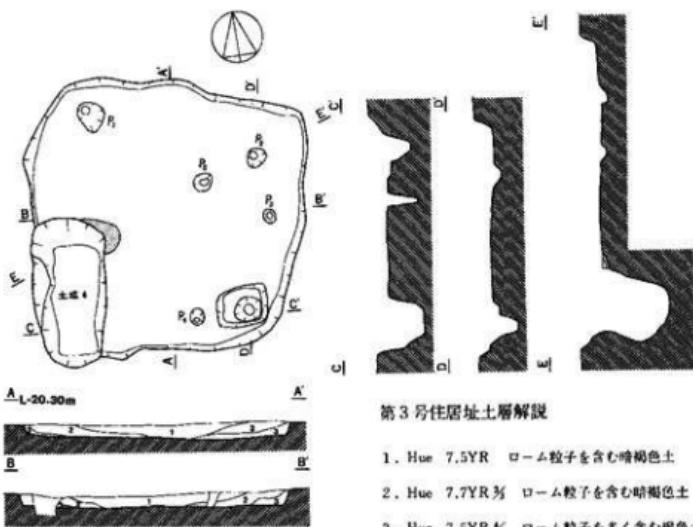
本住居址はE 6a6・E 6a7・E 6b6・E 6b7に確認され、調査地区の西側地区に検出され、第8号住居址・第11号住居址の北側に位置している。

主軸方向はN-11.5°-Eで、長径 3.9m・短径 3.83m ほどの不整隅丸方形の平面形を呈し、南西コーナー部に第4号土壤が複合している。各壁の中央部はやや張りだしている。

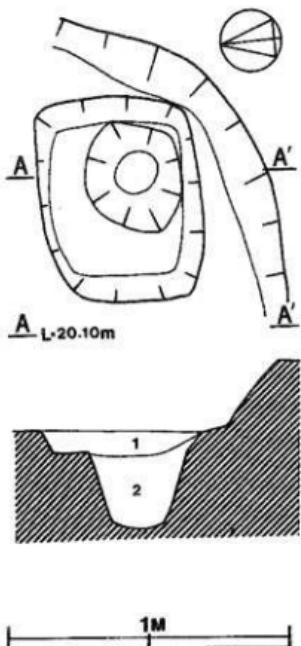
遺構検出面から床までの深さは12～20cmほどで、壁はやや垂直ぎみに聞いて立ちあがり、壁下に壁溝は認められない。

床はロームであり、ほぼ平坦をなしているが北側床面がやや深く、それほど硬い床ではない。炉址は中央部の西壁よりに位置し、全体の規模は第4号土壤によって切られているため不明であるが、長径50cm以上の楕円形の平面形を呈していたと考えられる。ほかの炉址と同様に皿状に掘られ、炉床はそれほど焼けていない。内部には焼土粒子を含む褐色土が充満している。

ピットは5個ほど検出されているが、柱穴と考えられるものは不明で、上屋の構造は不明である。ほとんどのピットが20cm以内の深さを有し、P 4は43cmの深さを有している。



第12図 第3・4号住居址実測図



第13図 第3号住居址貯蔵穴

第3号住居址土層解説

1. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子を含む極暗褐色土
2. Hue 7.5YR 3/4 暗褐色土

貯蔵穴（第13図）は南東コーナー部にあり、長径73cm・短径58cmの長方形の平面形を呈し、2段の掘りこみを有している。床面から底面までの深さは35cmほどで、段部の底面までの深さは8cmほどである。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、覆土第1層は暗褐色土で、壁周辺部の覆土にはローム粒子を多く含む褐色土の堆積がみられる。

遺物は中央部および東壁部付近に破片でみられ、床面より若干浮いた状態で出土している。復元の結果、變形土器の破片が多く、図化できないもののが多かった。

床の状態および遺物のあり方など調査の所見から居住期間がそれほど長いものではなく、遺物も投棄されたものと考えられた。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	44	40	18	
P 2	29	25.5	14	
P 3	23	17	13	
P 4	24	20	43	
P 5	30	25	12	

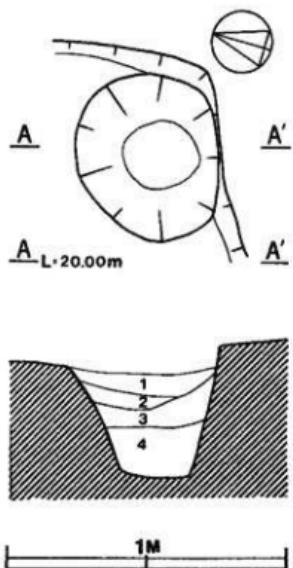
棄されたものと考えられた。

第4号住居址（第12図）

本住居址はE 5f 6・D 5f 7・E 5g 6に確認され、調査地区の西部に検出された。第8号住居址および第11号住居址の北側に位置している。

第4号住居址貯藏穴土層解説

1. Hue 7.5YR 4/6 黒褐色土
2. Hue 7.5YR 4/6 ローム粒子を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 4/6 ローム粒子を少許含む暗褐色土
4. Hue 7.5YR 4/6 ローム小ブロックを含む暗褐色土



第14図 第4号住居址貯藏穴

主軸方向はN-30°-Wで、長径3.1m・短径2.93mほどの隅丸方形の平面形を呈し、北壁部径が長く、一部大きく張りだしている。

遺構は表土下第II層に不明確ながら検出された。確認面では不明確な点が多く、さらに掘り下げて内部を調査した。壁高は10cm内外で壁はゆるやかな傾斜を示して立ちがっている。床はロームであり、平坦をなしているが硬いものではない。

炉址は中央部より北コーナー部よりあり、長径63cm・短径53cmの楕円形の平面形を呈し、皿状

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	27	23	32	
P 2	22.5	21	15	
P 3	17	16	25	
P 4	26	23	11	
P 5	25	20	25	
P 6	24	22	8	

に8cmほど掘られ、炉床はやや硬く焼けている。内部には焼土が充満している。

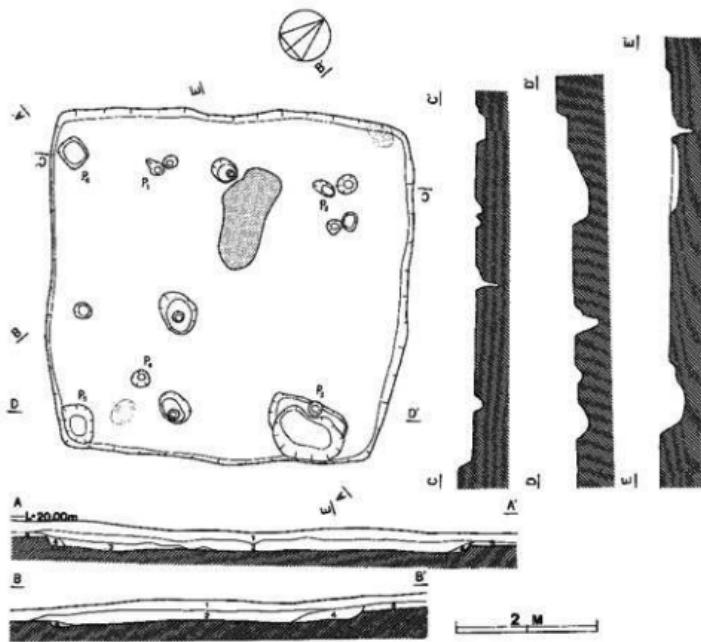
ピットは床面に13個ほど検出されているが、柱穴として明確に把握されたものではなく、四柱の上屋構造を有するものではないかも知れない。位置的にはP 1・P 2が主軸線と同一の方向を示している。

貯藏穴（第14図）は南東コーナー部にあり、長径60cm・短径50cmほどの楕円形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは40cmほどで、壁はほとんどが外方に開いて立ちあがっている。

住居址内覆土は自然堆積の状態を呈し、覆土第Ⅰ・Ⅱ層は褐色土および暗褐色土が堆積し、最下層には黒褐色土層がみられる。

遺物は少なく、器形を把握できるものもほとんどみられず、覆土中からの出土が多い。

第5号住居址（第15図）

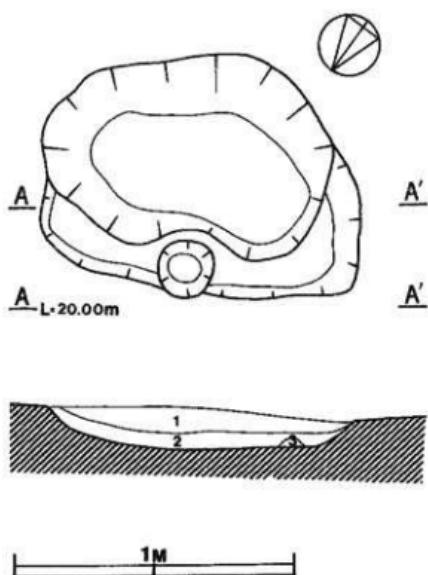


第15図 第5号住居址実測図

第5号住居址土層解説

1. Hue 7.5YR 5% 暗褐色土（灰土層）
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子・塊土粒子・木炭粒子を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 5% ローム粒子・塊土粒子を含む極暗褐色土
4. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土
5. Hue 7.5YR 5% 褐色土（ローム層移層）

第5号住居址貯蔵穴上層解説



第16図 第5号住居址貯蔵穴

ムであり、ほぼ平坦をなしているが、やや南側に傾斜を示している。床の中央部およびが址の周辺部は硬くしまっているが、壁周辺部はやや軟質である。

炉址は中央部の北西壁よりにあり、長径1.47m・短径0.7mほどの不整の楕円形を呈している。床面を舟底状に15cmほど掘りこみ、炉床はロームが硬く焼け、内部には焼土が充満している。

ピットは床面に14個ほど検出されているが主柱穴はP 1～P 4で、そのほかは直接造構との関係は認められない。ほとんどが20cm内の深さのものである。

1. Hue 7.5YR 5/4 暗褐色土
2. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子を多量含む極暗褐色土
3. Hue 7.5YR 5/6 棕色土(ロームブロック)

本住居址はF 5 a 0・F 6 a 1・F 5 b 0・F 6 b 1・F 6 a 2・F 6 b 2にわたって確認され、第4号住居址の約40mほど南に位置している。

上軸方向はN-43°-Eで、長径5.1m・短径4.95mほどの隅丸方形の平面形を呈し、北コーナー部に焼土塊が壁に接してみられる。

造構は表土下第Ⅱ層面で検出され、ほとんどの壁は大きく開いて立ちあがり、壁高は10cm内外である。床はロー

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	30	20	18.5	主柱穴
P 2	34	18	18.5	◆
P 3	21	20	19.5	◆ 貯蔵穴に接する
P 4	25	24	19	◆
P 5	64	28	19.5	
P 6	41	30	14.5	

貯蔵穴（第16図）は東コーナー部にあり、長径1.13m・短径0.83mの不整梢円形の平面形を呈し、2段の掘りこみを有している。貯蔵穴として機能を有するものは下段のもので、長径1.03m・短径0.7mほどの梢円形の平面形を呈しているが、P3に換した部分は張りだしを呈している。床面から底面までの深さは15cmほどで壁はゆるやかに立ちあがっている。

住居址内覆土は自然堆積の状態を呈し、焼土粒子を含む極暗褐色土が壁部から流れこんでいる。遺物のほとんどは破片であり、貯蔵穴の周辺から出土し、器形を把握できるものは少ない。

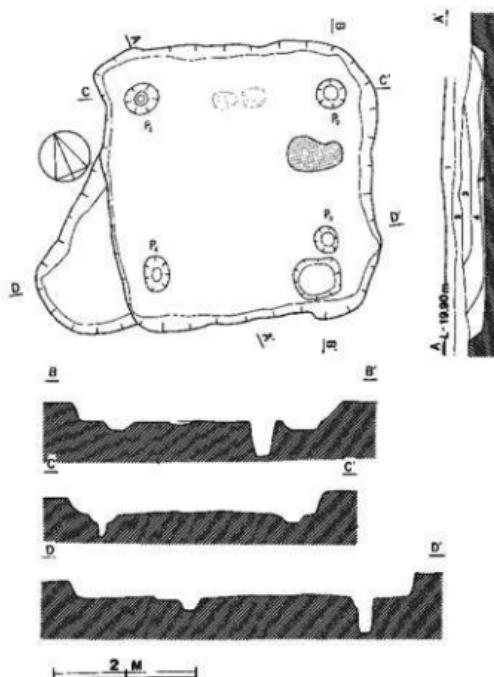
北コーナー部の焼土塊のあり方および覆土の焼土粒子から火災にあったものと考えられる。

第6号住居址（第17図）

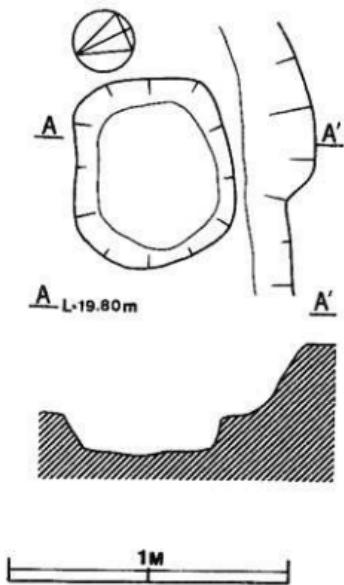
本住居址はG7i0・G7j0・G8i1・G8j1に確認され、調査地区の南の傾斜面に近く、第1号溝址の東側に位置している。

第6号住居址土層解説

1. Hue 7.5YR 3/4 暗褐色土（表土層）
2. Hue 7.5YR 4/4 黒褐色土
3. Hue 7.5YR 3/4 極暗褐色土
4. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子を含む
暗褐色土
5. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子・焼土
粒子を含む暗褐色
土



第17図 第6号住居址実測図



第18図 第6号住居址貯蔵穴
いる。

主軸方向はN-20°Eで、長径3.9m・短径3.7mほどの隅丸方形の平面形を呈し、西壁の中央部より南西コーナー部にかけて1.2mほど大きく張りだしており、後世の擾乱部である。北壁よりの中央部には焼土がみられる。遺構検出面から床までの深さは25~30cmほどで、壁は西壁が垂直ぎみに立ちあがり、ほかはやや傾斜を示して立ちあがっている。床はロームであり、ほぼ平坦をなし、中央部はやや硬質の床面を呈しているが、壁周辺部はそれほど硬いものではない。

炉址は東壁よりのP2・P3間に位置し、長径75cm・短径50cmほどの楕円形の平面形を呈し、皿状に10cmほど掘りこみ、内部には焼土が充満している。炉床はそれほど硬くは焼けていない。

ピットはP1~P4が検出され、いずれも主柱穴である。P1の掘りこみは段を有して

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	50	43	33	主柱穴
P 2	43	41.5	10	タ
P 3	40	33	48	タ
P 4	50	36	18	タ

貯蔵穴（第18図）は南東コーナー部にあり、長径68cm・短径57cmほどの隅丸方形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは20cm内外で、壁は傾斜を示して立ちあがっている。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、覆土第Ⅱ層には暗褐色土がみられ、最下層は焼土粒子を少量含んでいる暗褐色土層の堆積がみられる。

遺物は北壁部および貯蔵穴周辺部からほとんどが出土している。

本住居址も焼土のあり方および覆土中の焼土粒子等から火災にあったものと考えられる。

第7号住居址（第19図）

本住居址はG 7 e 0・G 7 f 0・G 8 e 1・G 8 f 1に確認され、調査地区の南部で、第6号住居址の北側に位置し、第1号溝址の東側に接している。

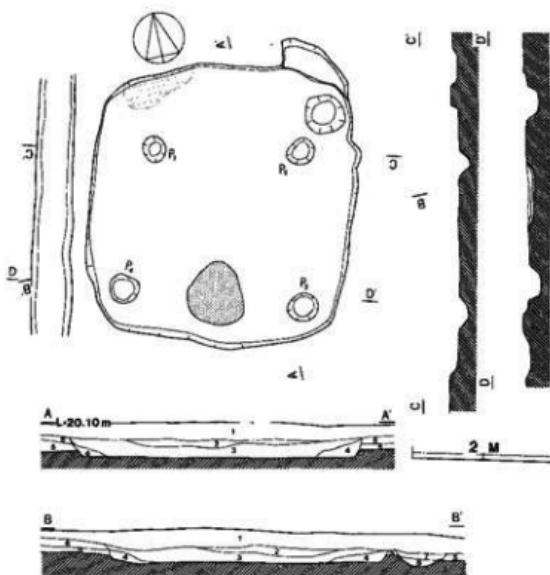
主軸方向はN-19.5°-Eで、長径4.0m・短径3.75mほどの隅丸方形の平面形を呈し、北東コーナー部が一部張りだしている。北西コーナー部には焼土が多く検出されている。

遺構は表土下第II層から掘りこみが確認され、壁高は5～10cmほどの浅いものである。ほとんどの壁がほぼ垂直ぎみに立ちあがりを呈している。床はロームであり、ほぼ平坦で、中央部がやや硬質の床面をなしている。

炉址は南壁よりのP 3・P 4間に位置し、長径90cm・短径77cmの椭円形の平面形を呈し、皿状に10cmほど掘りこまれている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。

ピットはP 1～P 4が確認され、いずれも主柱穴である。北側のP 1・P 2はやや壁よりはなれ、P 3・P 4は南壁によっている。

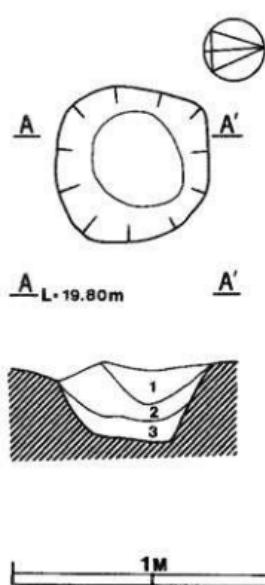
第7号住居址土層解説



1. Hue 7.5YR 5% 褐色土(表土層)
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を少種含む褐褐色土
3. Hue 7.5YR 5% ローム粒子多量、燒土粒子を含む暗褐色土
4. Hue 7.5YR 5% ローム粒子多量、燒土粒子を含む褐色土
5. Hue 7.5YR 5% 褐色土(ローム漸移層)
6. Hue 7.5YR 5% 暗褐色土
7. Hue 7.5YR 5% 黒色土
8. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む暗褐色土

第19図 第7号住居址実測図

第7号住居址貯蔵穴土層解説



第20図 第7号住居址貯蔵穴

1. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子・ローム小ブロックを含む極暗褐色土
3. Hue 7.5YR 3/4 ローム粒子を含む黒褐色土

貯蔵穴（第20図）は北東コーナー部にあり、長径55cm・短径53cmほどの円形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは25cmで、壁はやや傾斜を示して立ちあがっている。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、覆土第Ⅰ層は黒褐色土、覆土第Ⅱ層は焼土を含む暗褐色土層で、壁周辺にみられる層にも焼土粒子が検出されている。

遺物は小破片が多く、まとまった出土はみられず、覆土中に多くが出土している。

本住居址は北西コーナー部の焼土および覆土中の焼土粒子から火災にあったものであると考えられる。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	38	33	18	主柱穴
P 2	41	38	15	"
P 3	45	41	18	"
P 4	43	42	15	"

第8号住居址（第21図）

本住居址はE 5 d 3・E 5 d 4・E 5 e 3・E 5 e 4に確認され、調査地区西部の第3号住居址・第4号住居址・第11号住居址の西側に位置している。

主軸方向はN-57°-Eで、長径4.87m・短径4.65mほどの隅丸方形の平面形を呈し、西壁部が張っている。

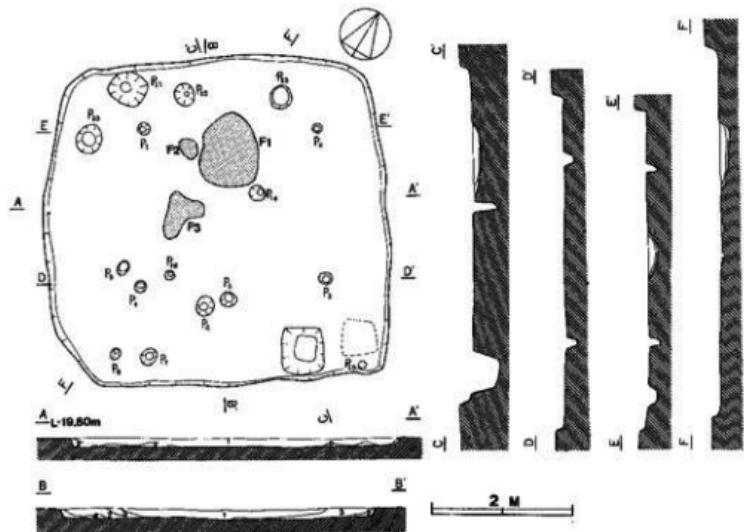
遺構検出面から床までの深さは15cmほどでほとんどの壁は垂直ぎみに立ちあがっている。

床はロームであり、ほぼ平坦をなしている。炉址周辺部および貯蔵穴周辺部は硬質であるが、

壁周辺部はそれほど硬質ではない。

炉址は中央部および北壁よりに大小3ヶ所が検出されているが、1号炉址(F1)、2号炉址(F2)は1ヶ所になりうるものである。F1は長径1.06m・短径0.82mほどの橢円形の平面形を呈し、皿状に15cmほど掘りこまれ、炉床は硬く、内部には焼土が充満している。F2はF1の西に接し、長径30cm・短径25cmほどの範囲にみられ、ほとんど掘りこみを有さない。3号炉址(F3)はほぼ中央部にあり、長径65cm・短径50cmほどの不整形の平面形を有し、掘りこみも5cm内の浅いものである。

ピットは16個が検出され、主柱穴はP1～P4で深さは20cm以内であり、そのほかのピットは遺構との関係は不明である。



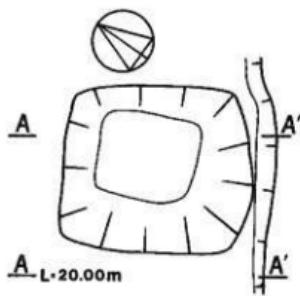
第21図 第8号住居址実測図

第8号住居址土層解説

1. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 3/ ローム粒子を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を多量含む褐色土
4. Hue 7.5YR 3/ 燃土粒子・木炭粒子を含む暗褐色土

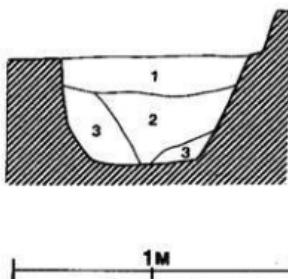
ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	18	17	18	主柱穴	P 9	21	35	35	
P 2	14	12.5	20	*	P 10	43	45	14	
P 3	19	17	16	*	P 11	52	30	19	
P 4	17	16	19	*	P 12	34	30	18	
P 5	25	21	39		P 13	34	20	11	
P 6	28	24	39		P 14	24	21	37	
P 7	25	20	29		P 15	11	11	22	
P 8	16	14	9		P 16	14	13	24	

貯藏穴（第22図）は南東コーナー部にあり、長径66cm・短径60cmほどの長方形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは40cmほどで、底はほぼ平坦をなしている。壁ないずれも斜めに立ちあがっている。



住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、覆土第I層は黒褐色土がみられ、壁側から褐色土・暗褐色土層が流れこんで堆積している。

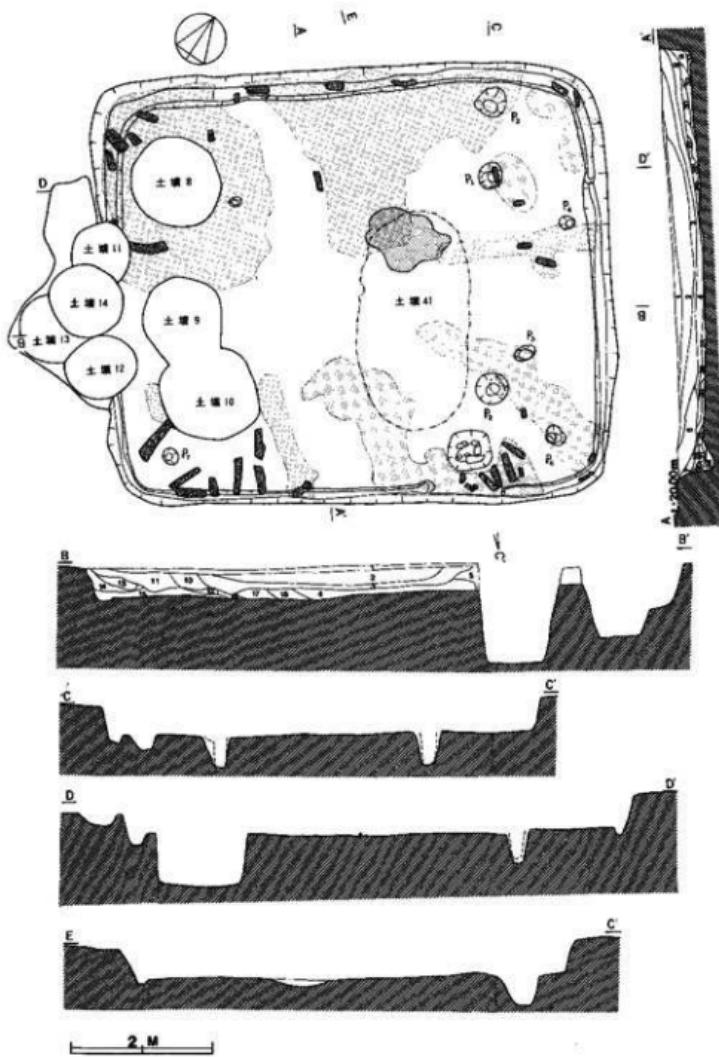
遺物はそれほど多くはなく、貯藏穴の東側から高環形土器（第51図5）、南壁中央部の床面から砥石（第51図6）が出土している。そのほかは、北壁および東壁周辺から破片が出土している。



第8号住居址貯藏穴土層穴土層解説

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む明褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む黒褐色土
3. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土

第22図 第8号住居址貯藏穴



第23図 第9号住居址実測図

第9号住居址土層解説

- | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1. Hue 7.5YR 4/2 植物褐色土 | 18. Hue 2.5YR 4/2 焼土粒子を含む赤褐色土 |
| 2. Hue 7.5YR 4/2 黒褐色土 | 19. Hue 2.5YR 4/2 に赤褐色土（焼土） |
| 3. Hue 7.5YR 4/2 暗褐色土 | 20. Hue 2.5YR 4/2 暗赤褐色土（焼土） |
| 4. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子・木炭粒子を含む暗褐色土 | 21. Hue 2.5YR 4/2 暗赤褐色土（焼土） |
| 5. Hue 7.5YR 4/2 褐色土 | 22. Hue 2.5YR 4/2 暗赤褐色土（焼土） |
| 6. Hue 7.5YR 4/2 木炭粒子を含む褐色土 | 23. Hue 7.5YR 4/2 褐色土 |
| 7. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子・木炭粒子を含む暗褐色土 | 24. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を少量含む褐色土 |
| 8. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子・木炭粒子を含む褐色土 | 25. Hue 2.5YR 4/2 赤褐色土（焼土） |
| 9. Hue 7.5YR 4/2 褐色土 | 26. Hue 2.5YR 4/2 赤褐色土（焼土） |
| 10. Hue 7.5YR 4/2 暗褐色土 | 27. Hue 2.5YR 4/2 赤褐色土（焼土） |
| 11. Hue 7.5YR 4/2 暗褐色土 | 28. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を少量含む暗褐色土 |
| 12. Hue 5 YR 4/2 暗赤褐色土（焼土） | 29. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を少量含む褐色土 |
| 13. Hue 2.5YR 4/2 明赤褐色土（焼土） | 30. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を多量含む褐色土 |
| 14. Hue 2.5YR 4/2 暗赤褐色土（焼土） | 31. Hue 2.5YR 4/2 赤褐色土（焼土） |
| 15. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を含む褐色土 | 32. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を少量含む暗褐色土 |
| 16. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を含む褐色土 | 33. Hue 7.5YR 4/2 焼土粒子を多量含む褐色土 |
| 17. Hue 2.5YR 4/2 焼土粒子を含む暗赤褐色土 | 34. Hue 2.5YR 4/2 焼土粒子を多量含む暗赤褐色土 |

第9号住居址（第23図）

本住居址はC 5 j 5・C 5 j 6・C 5 j 7・C 5 i 6・D 5 a 5・D 5 a 6・D 5 a 7にわたって確認され、調査地区の北西部にあたり、第1号塚の北西側で第2号住居址の西35mほどに位置している。

主軸方向はN-55°-Eで、長径7.3m・短径6.2mほどの隅丸長方形の平面形を呈し、南西壁部には第8号土壙～第14号土壙が複合している。ほとんどの壁周辺部には焼土が多く検出され、南東壁側には中央部に向かうような状態で垂木材と思われる木炭が多く出土している。

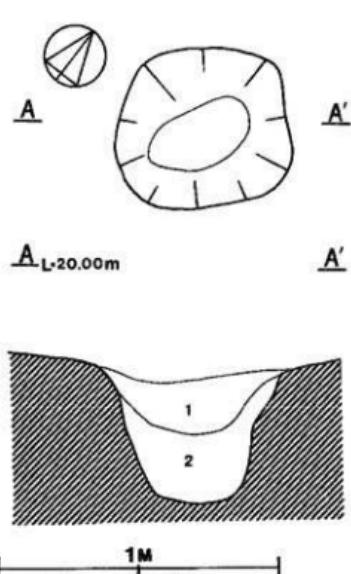
遺構検出面から床までの深さは45～50cmほどで、壁下には壁溝が認められる。壁はやや外方に開いて立ちあがりを示している。

壁溝は貯蔵穴部で一部切断され、そのほかは全周している。南東部および北東部の壁溝幅は20～50cmほどで、深さは5～15cmである。北西部および西コーナー部の壁溝幅は30cm～50cmほどでやや広く、10～15cmほどの深さを有している。

床はロームであり、ほぼ平坦をなしているが中央部に向かってゆるやかな傾斜を示している。炉址周辺部および中央部は硬い床面をなし、床面下には第41号土壙があり、その部分は貼床をなしている。

炉址は中央部の北よりにあり、長径1.25m・短径0.83mほどの不整規円形の平面形を呈し、床

第9号住居址貯蔵穴土層解説



第24図 第9号住居址貯蔵穴

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	39	33.5	43	主柱穴	P 5	30	21	15	
P 2	45	44	47	*	P 6	30	27	11	副柱穴
P 3	42	40	23		P 7	23	22.5	13	*
P 4	21	20	9		P 8	19	14	14	

貯蔵穴（第24図）は東コーナー部よりにあり、長径60cm・短径55cmほどの橢円形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは50cmほどで、底面は皿状を呈し、壁はややゆるやかに立ちあがっている。覆土上面には板状の炭化材が検出され、覆土中には焼土粒子および木炭粒子が検出されている。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、覆土第Ⅱ層は黒褐色土が中央部に堆積し、下層には焼土粒子・木炭粒子を含む層がみられ、壁周辺部には焼土の堆積が多くみられる。

遺物は北西部の壁溝部から環形土器（第51図7）が出土し、そのほかは貯蔵穴周辺に検出され、貯蔵穴上層部に動物形土製品（第52図）が出土している。全体的に遺物出土量は少なく、動物形

1. Hue 7.5YR 4/6 焼土粒子・木炭粒子・炭化材を含む
黒褐色土

2. Hue 5 YR 5/6 焼土・炭化材を含む黒褐色土

面を皿状に10cmほど掘りこみ、炉床は硬く焼けている。

ピットは8個ほどが検出され、主柱穴はP 1・P 2であり、南西部は第8号土壤および第10号土壤によって切られているため検出することはできなかった。P 1・P 2には柱痕が確認でき、底面まで及んでいる。P 6・P 7は東コーナーおよび南コーナー部に検出され、いずれも対角線上に位置し、上屋との関係が考えられる。

土製品の出土は異質である。

第9号住居址は明確に火災のあとを示す住居址で、垂木等は南東壁部に多く、中央に向かって倒れたような状態で検出され、北西方向に倒れたものと考えられる。北西壁部には木炭が少なく焼土が多く検出されている。

第10号住居址（第25図）

本住居址はD 6 e 1・D 6 e 2・D 6 f 1・D f 2・D 6 g 1・D 6 g 2にわたって確認され、調査地区の西部で、第1号塚の南麓下に位置している。

主軸方向はN-26.5°-Wで、直径5.5mほどの隅丸方形の平面形を呈し、中央部から西コーナー部にかけて第42号土壙が床面を切りこんでいる。

遺構検出面かや床までの深さは35～50cmほどで、壁はそれぞれ傾いて立ちあがっており、壁下には壁溝が周回している。壁溝は北コーナー部で幅15cmとやや狭く、ほかは20～30cmほどの幅を有し、深さは5～10cmほどである。北コーナー部および南コーナー部には径15cm内外の壁柱穴が壁溝内にみられ、深さは15～20cmを平均としている。

床はロームであり、ほぼ平坦をなし、炉址周辺部が硬くしまっている。

炉址は中央部北よりにあり、一部第42号土壙に切られている。長径1.32m・短径0.75mほどの双円形状の平面形を呈し、床面を10cmほど皿状に掘りこんでいる。炉床は硬く焼け、内部には覆土が充満している。

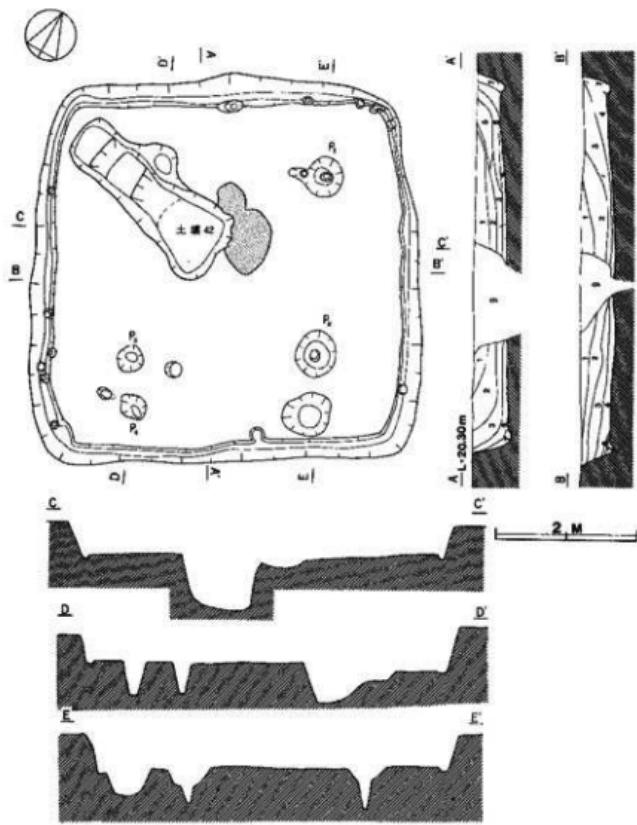
ピットは壁柱穴以外に7個ほど柱穴され、主柱穴はP 1～P 3で、4個中の3個が判明したが、残り1個は第42号土壙の複合により不明である。

貯藏穴（第26図）は東コーナー部にあり、長径69cm・短径60cmほどの橢円形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは35cmほどである。底面は皿状をなし、壁は垂直ぎみに立ちあがっている。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示しており、覆土最下層は焼土粒子を含む極暗褐色土の堆積がみられる。

遺物は東コーナー部付近に集中してみられ、斐形土器等が出土している。また、貯藏穴内から

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	79	58	58	主柱穴
P 2	65	60	55	◆
P 3	40	38	45	◆
P 4	43	35	55	



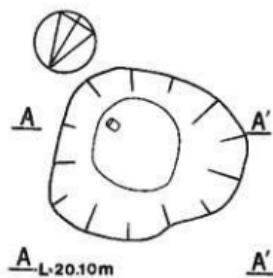
第25図 第10号住居址実測図

第10号住居址土層解説

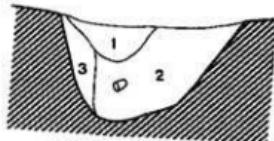
- | | | | |
|-----------------|------------------------------|-----------------|-----------------------|
| 1. Hue 7.5YR 3% | ローム粒子を含む黒褐色土 | 6. Hue 7.5YR 3% | ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土 |
| 2. Hue 7.5YR 3% | ローム粒子を多量含む暗褐色土 | 7. Hue 7.5YR 3% | 褐色土(ロームブロック) |
| 3. Hue 7.5YR 3% | ローム粒子多量・ローム小ブロック
少量含む暗褐色土 | 8. Hue 7.5YR 3% | 黒褐色土 |
| 4. Hue 7.5YR 3% | ローム粒子・焼土粒子を含む極暗褐
褐色土 | 9. Hue 7.5YR 3% | 褐色土(擾乱層)…第42号土壠 |
| 5. Hue 7.5YR 3% | ローム小ブロックを多量含む暗褐色
土 | | |

第10号住居址貯藏穴土層解説

1. Hue 7.5YR 5/6 ローム粒子を含む極暗褐色土
2. Hue 7.5YR 5/6 ローム粒子を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 5/6 ローム粒子を多量含む褐色土



は手捏ね土器（第53図8）が出土している。



第26図 第10号住居址貯藏穴

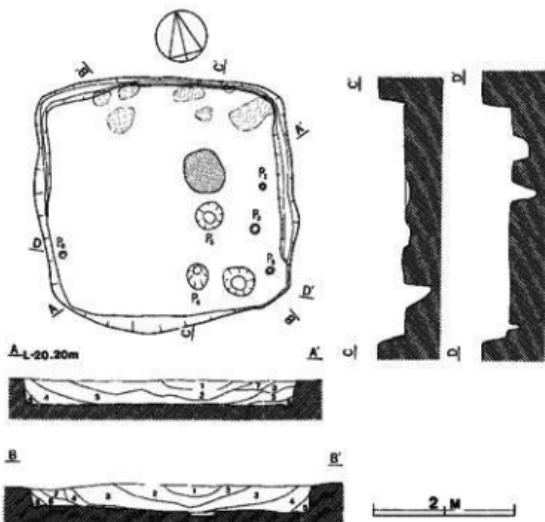
第11号住居址（第27図）

本住居址はE 5 d 7・E 5 d 8・E 5 c 7・E 5 c 8にわたって確認され、調査地区の西部で、第8号住居址・第4号住居址の東側に位置している。

主軸方向はN-13°-Eで、長径3.65m・短径3.6mほどの隅丸方形の平面形を呈し、南壁部が張りだしている。北壁および北東コーナー部には焼土が検出されている。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	10	9	6	
P 2	14	13.5	8	
P 3	13	9	8	
P 4	36	29	40	
P 5	41	39	10	
P 6	11	9.5	17	

造構検出面から床までの深さは25～40cmほどで、西壁の一部および南壁以外の壁下には壁溝が認められる。壁はほとんどが垂直ぎみに立ちあがっている。壁溝の幅は10～20cmほどで、深



第27図 第11号住居址実測図

第11号住居址土層解説

1. Hue 7.5YR 3/4 暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/6 ローム粒子を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 6/8 ローム小ブロックを含む褐色土
4. Hue 7.5YR 6/8 ローム粒子を含む褐色土
5. Hue 7.5YR 6/8 ローム粒子を含む暗褐色土
6. Hue 7.5YR 6/8 焼土粒子を含む暗褐色土
7. Hue 7.5YR 6/8 ローム粒子を含む褐色土

きは5cm内外の浅いものである。

床はロームであり、平坦をなしているがやや南にむかって傾斜を示している。炉址周辺部の床面は硬く、そのほかはそれほど硬いものではない。

炉址は中央部の北東よりにあり、長径65cm・短径55cmほどの楕円形の平面形を呈し、床面を8cmほど皿状に掘りこんでいる。炉床は硬く焼け、内部には焼上が充満している。

ピットは6個ほど検出されているが、主柱穴として把握されるものは不明である。P 4は40cmと深いが、ほかは20cmに満たないものである。

住居址外には本住居址に伴う施設は確認されて

いない。

貯藏穴（第28図）は南東コーナー部にあり、長径48cm・短径40cmほどの楕円形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは20cmほどである。底面は皿状をなし、壁は斜めに立ちあがっている。貯藏穴の上面には広口壺形土器（第54図7）が出土している。

住居址内覆土は自然堆積の状態を示し、覆土上層には暗褐色土・黒褐色土が堆積し、北壁側には焼土粒子を含む褐暗色土がみられる。下層にはローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。

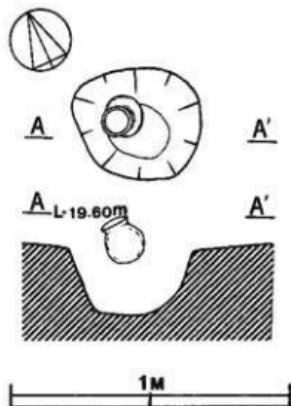
遺物はほとんどが土器で、住居址のほぼ全体に

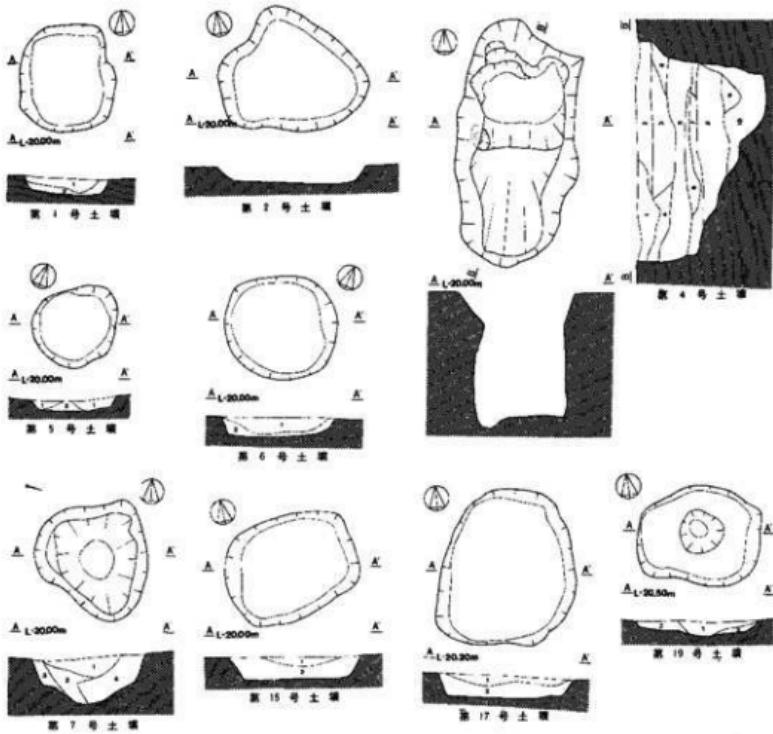
出土し、とくに炉址周辺部および貯藏穴周辺に多くみられる。器種は台付壺形土器・壺形土器・壺形土器・器台形土器等が出土している。

本住居址は北壁部の焼土のあり方等から火災にあったものであり、遺物の多く残存した状態からもそれが考えられる。土器類は床面から出土したものも、覆土中から出土したものもそれほど時期差は認められない。

2 土 壤

土壤は全体で41基の調査がなされたが、土壤の集中的に確認された地区はE 5・D 6・G 8区である。形態は不定形・円形・楕円形の平面形を呈するものが多く、明確な規則性等は不明なものが多い。C 5区に確認されたものは、明確に近世の墓塚とわかるものであり、7基が調査され





第29図 土壌実測図(I)

第1号土壤

1. Hue 7.5YR 5% 黒褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む暗褐色土

第4号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ロームブロック・ローム粒子を多量含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 5% 暗褐色土
3. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む暗褐色土
4. Hue 7.5YR 5% 柔らかい暗褐色土
5. Hue 7.5YR 5% ローム粒子・鐵土粒子を含む黒褐色土
6. Hue 7.5YR 5% 明褐色土(ロームブロック)
7. Hue 7.5YR 5% 黒褐色土
8. Hue 7.5YR 5% ローム粒子・鐵土粒子を含む暗褐色土
9. Hue 7.5YR 5% サラサラ状を呈する暗褐色土
10. Hue 7.5YR 5% 明褐色土(軟質ロームブロック)

第5号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 5% 褐色土(ローム小ブロック)

第6号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を少量含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む暗褐色土

第7号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を少量含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土
3. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土
4. Hue 7.5YR 5% ローム小ブロックを含む暗褐色土

第15号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を少量含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む暗褐色土

第17号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を少量含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土

第19号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を少量含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 5% 褐色土(ロームブロック)

た。その中にも複合がみられ、若干の時間差が認められる。

第1号土壌（第29図）

本址はE 5 g 5 の東に確認され、第2号土壌および第4号住居址に接している。主軸方向はN - 89° - E で、長径94cm・短径84cmの隅丸方形を呈する平面形を有し、南壁中央部の外刃が一部張りだしている。

造構検出面から床までの深さは14cm内外で壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームではほぼ平坦をなし、やや南に傾斜を示している。また、床はそれほど硬いものではない。

覆土はそれほど硬い土質のものではなく、自然流入的な堆積状況を示している。

第2号土壌（第29図）

本址は第1号土壌と同様にE 5 g 5 に確認されたもので、第1号土壌の西側に位置している。主軸方向はN - 62° - W で、長径12.8m・短径1.1m ほどの不定橢円形の平面形を呈している。

造構検出面からの深さは15cm内外で、壁はゆるやかに立ちあがっている。床はほぼ平坦をなし、それはほど硬いものではない。

第4号土壌（第29図）

本址はE 5 b 6 に確認され、第3号住居址の西部を掘りこんでいる。主軸方向はN - 2° - E で、長径2.2m・短径1.1m ほどの不定橢円形の平面形を呈している。

造構検出面からの深さは0.55 ~ 1.15m ほどで、南壁部が浅く北壁部が最も深い。北壁面部は凹凸がはげしく、西壁中央部は一部袋状を呈している。そのほかはほぼ垂直ぎみに立ちあがりを示している。

床はロームで南から北へ向かって傾斜を呈し、北壁下が最も深く、平坦をなす部分もあるが、ほとんどが南から北への傾斜を示している。

覆土はほとんどがロームブロックを含み、黒褐色土層等は柔らかく、ボロボロでしまりがない状態であり、人為的な埋めもどしと考えられる。

第5号土壌（第29図）

本址はE 5 c 6 に確認され、第4号土壌および第3号住居址の南に位置している。主軸方向はN - 24° - E である。長径79cm・短径70cm ほどの橢円形の平面形を呈している。

造構検出面からの深さは10cm内外で、壁は床からゆるやかに立ちあがっている。床はロームではほぼ平坦をなすが、中央にむかってゆるやかな傾斜を示し、それほど硬いものではない。

覆土中央部にローム小ブロックがみられ、壁付近には暗褐色土がみられる。

第6号土壤（第29図）

本址はE 5 b 4に確認され、第4号土壤・第3号住居址および第7号土壤の西側に位置している。主軸方向はN-64°-Eで、長径1.0m・短径0.92mの円形の平面形を呈している。

遺構検出面から床までの深さは10～15cmほどで、外に開いて立ちあがりを示し、北東壁はややゆるやかに立ちあがりを示している。床はロームでほぼ平坦をなし、それほど硬いものではない。

覆土は自然な流れ込みと考えられ、しまった土質を呈している。

第7号土壤（第29図）

本址はE 5 a 5に確認され、第4号土壤・第3号住居址の西、第6号土壤の北東に接して位置している。主軸方向はN-17°-Wで、長径1.09m・短径0.98mほどの不定形円形の平面形を呈し、西壁部がはりだし、掘りこみは段を有している。

遺構検出面から床までの深さは段部で25cm・最深部で42cmほどである。壁はややゆるやかに立ちあがりを示している。床はロームで段を有し、下段部の床はややスリバチ状を呈し、それほど硬いものではない。

覆土は自然の流れ込みを呈し、壁付近はローム粒子およびローム小ブロックを多く含む土層がみられる。

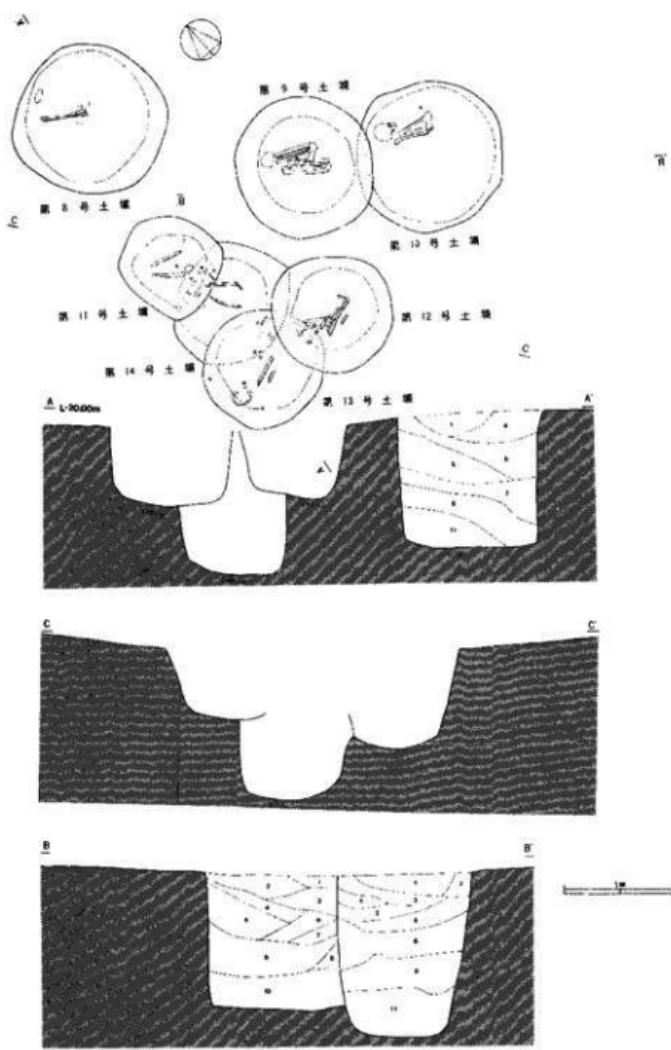
第8号土壤（第30図）

本址はC 5 j 5に確認され、第9号土壤～第14号土壤と集中して確認されたもので、第9号住居址の西コーナー部付近に複合して位置している。

長径1.4m・短径1.35mほどの円形の平面形を呈し、北壁部よりに人骨が検出されている。形状がわかるのは大腿骨のみで、ほかは骨粉化している。骨粉と接して「貨幣」が出土し、第9号住居址と複合している。

遺構検出面から床までの深さは1.2mほどで、壁は床からほぼ垂直ぎみに立ちあがっている。床はロームにあり、ほぼ平坦をなしているが壁ぎわから中央部にむかってゆるやかな傾斜を示し、それほど硬いものではない。

覆土は人為的に埋めもどしの状態を示し、最下層には人骨および「寛永通宝」が出土している。土質は下層部が最も柔らかい状態を呈している。



第 30 図 土 壤 実 測 図 (2)

第8～12号土壌土層解説

1. Hue 7.5YR 4/4 深褐色土(ロームブロック)
2. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を多量含む褐色土
3. Hue 7.5YR 4/4 極暗褐色土
4. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を含む褐色土
5. Hue 7.5YR 4/4 ロームブロックを少量含む深褐色土
6. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を含む褐色土
7. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を少量含む暗褐色土
8. Hue 7.5YR 4/4 極暗褐色土
9. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を含む暗褐色土
10. Hue 7.5YR 4/4 褐色土(ロームブロック)
11. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を多量含む暗褐色土

第9号土壌（第30図）

本址はD 5 a 5 およびD 5 a 6 にまたがって確認され、第10号土壌を切りこんでいる。また、第8号土壌・第11号土壌～第14号土壌に接し、さらに、第9号住居址を切りこんでいる。

長径1.27m・短径1.23mほどの円形の平面形を呈し、前述のように第10号土壌を切りこんでいる。底部の中央部に人骨がまとまって検出され、座った形状を示すものであり、「貨幣」が出土している。

遺構検出面から床までの深さは1.45mほどで、壁は床面からやや外方に聞く形で立ちあがっている。床はロームで中央部にゆるやかな傾斜を示し、それほど硬いものではない。

覆土は人為的に埋めもどされた土層の状態を呈し、最下層に入骨および「寛永通宝」が検出されている。

第10号土壌（第30図）

本址はD 5 a 6 に確認され、第9号土壌に切られ、第9号住居址を切りこんでいる。さらに、第8号土壌・第11号土壌～第14号土壌に接している。

直径1.35mほどの円形の平面形を呈し、前述のように第9号土壌に北西部の一部を切りこまれている。北側よりに入骨が検出され、付近より「貨幣」が出土している。

遺構検出面から床までの深さは1.2mほどで、壁は床面より垂直に立ちあっている。床はロームであり、ほぼ平坦をなし、それほど硬いものではない。

覆土は人為的な埋めもどしがなされ、最下層には入骨と「寛永通宝」が検出されている。

第11号土壙（第30図）

本址はD 5 a 5に確認され、第14号土壙を切りこみ、さらに第9号住居址の南西壁を切りこんでいる。

長径86cm・短径81cmほどの方形にちかい円形の平面形を呈し、中央部に人骨が検出され「寛永通宝」と「煙管」が出土している。

遺構検出面から床までの深さは60cmほどで、壁は底から外方に開いて立ちあがっている。床はロームおよび第14号土壙の覆土にあり、中央部がかすかにくぼみを有し、硬いものではない。

覆土は人為的に埋めもどされた状態を示し、最下層に人骨等が検出されている。

第12号土壙（第30図）

本址はD 5 a 5に確認され、第13号土壙・第14号土壙を切りこみ、第9号住居址の南西壁を切りこんでいる。

直径2.08mほどの円形の平面形を呈し、中央部に人骨が検出されている。

遺構検出面から床までの深さは80cmほどで、壁は床から外方に開いて立ちあがっている。床はロームおよび第14号土壙の覆土にあり、中央部がやくぼみを有し、硬いものではない。

覆土は人為的に埋めもどされた状態を示し、最下層に人骨等が検出された。

第13号土壙（第30図）

本址はD 5 a 5に確認され、第11号土壙・第12号土壙・第14号土壙に複合し、第9号住居址の南西壁を切っている。

長径1.08m・短径1.03mほどの円形の平面形を呈し、第14号土壙を切りこみ、第12号土壙に切りこまれている。土壙中央部には人骨が検出され「寛永通宝」が出土している。

遺構検出面から床までの深さは70cmほどで、壁は底からやや外方に開いて立ちあがっている。床はロームと第14号土壙の覆土にあり、中央部がやくぼみを呈し、それほど硬いものではない。

覆土は人為的に埋めもどされた状態を示し、最下層中から人骨等が検出されている。

第14号土壙（第30図）

本址はD 5 a 5に確認され、第11号土壙および第13号土壙に切られ、さらに第9号住居址を切りこんでいる。

長径1.1m・短径1.0m内外の円形状の平面形を呈し、北側は第11号土壙、南側は第13号土壙に切られ、さらに第12号土壙に切りこまれている。

遺構検出面から床までの深さは1.3mほどで、壁は外方に開いて立ちあがっている。床はローム

であり、中央部がややくぼみ、それほど硬いものではない。

覆土は人為的に埋めもどされた状態を呈し、最下層中には人骨等が検出された。

第15号土壌（第29図）

本址はD 6 c 1に確認され、第1号塚の中心部下にあり、第23号土壌の南で第10号住居址の北側に位置している。主軸方向はN-84°-Eで、長径1.18m・短径0.91mほどの楕円形の平面形を呈している。

遺構検出面から床までの深さは20cm内外で、壁は外方に開いてゆるやかに立ちあがっている。

床はロームでほぼ平坦をなし、それほど硬いものではない。

覆土は自然の流れ込みの状態を呈している。

第16号土壌（第31図）

本址はD 5 c 0に確認され、第17号土壌の東側にあり、第22号土壌に接して位置している。主軸方向はN-70°-Wであり、長径2.15m・短径1.93mほどの不定円形状の平面形を呈し、三段ほどの段を有し、下段は不定の楕円形を呈している。

遺構検出面から床までの深さは1.2mほどで、壁は東・南壁が垂直ぎみに立ちあがり、東壁は三段の立ちあがりを示している。北・西壁はゆるやかな立ちあがりを示している。床はハードロームで最下段のものがスリパチ状を呈し、それほど硬いものではない。

覆土はローム小ブロックを含むものが多く、人為的に埋めもどされた状態を示し、全体的に柔らかい土質の土層である。

第17号土壌（第29図）

本址はD 5 c 9に確認され、第16号土壌の西、第20号土壌の北側に位置している。主軸方向はN-20°-Eであり、長径1.41m・短径1.2mほどの隅丸方形状の平面形を呈し、東壁は丸みを帯びている。

遺構検出面から床までの深さは20cm内外で、ほぼ垂直ぎみに立ちあがっている。床はロームであり、ほぼ平坦をなし、東壁下の一部はかすかに段を有し、それほど硬いものではない。

第18号土壌（第31図）

本址はD 6 d 2とD 6 d 3にわたって確認され、第21号土壌の南に位置している。主軸方向はN-80°-Wであり、長径1.35m・短径1.06mほどの不定楕円形の平面形を呈し、西側に段を有している。

遺構検出面から床までの深さは最も深いところで26cm、浅いところで10cmほどである。ほとんどの壁が垂直ぎみに立ちあがっているが、西側下段の壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、ほとんど平坦をなしているが下段はスリバチ状を呈し、それほど硬いものではない。覆土は自然的な流れ込みの状態を呈している。

第19号土壤（第29図）

本址はD 6 e 3に確認され、第18号土壤の南、第10号住居址の北東部に位置している。主軸方向はN-78°-Wであり、長径1.1m・短径0.89mの不定橢円形の平面形を呈し、中央部に浅い落ちこみを有している。

遺構検出面から床までの深さは5～10cmほどで、中央部は13cmほどの深さを有している。東壁部はややゆるやかに立ちあがり、ほかの壁は垂直ぎみに立ちあがりを示している。床はロームであり、中央部の浅い落ち込みにむかってゆるやかな傾斜を呈し、それほど硬いものではない。

覆土は第1層が中央部の落ちこみの底面まで達し、それほど硬い土質のものではない。

第20号土壤（第31図）

本址はD 5 d 9に確認され、第17号土壤の南に位置している。主軸方向はN-88°-Wであり、長径75cm・短径58cmほどの橢円形の平面形を呈している。

遺構検出面から床までの深さは13～15cmほどで、東壁は垂直ぎみに立ちあがり、ほかはややゆるやかに立ちあがりを示している。床はロームであり、ほぼ平坦をなし、中央部にむかってやや傾斜を呈し、それほど硬いものではない。

第21号土壤（第31図）

本址はD 6 c 3に確認され、第18号土壤・第19号土壤の北側に位置している。主軸方向はN-15°-Eであり、長径2.83m・短径1.27mほどの不定の長楕円形の平面形を呈し、南よりに長径83cm・短径61cmほどの橢円形の平面形を呈するピット状の落ちこみがある。

遺構検出面から床までの深さは10～15cmほどで壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、ほぼ平坦をなしているが硬いものではない。

覆土はそれほど硬い土質のものではない。

第22号土壤（第32図）

本址はD 6 c 1からD 5 c 0にわたって確認され、第23号土壤の北側に接し、第16号土壤の東側に接して位置している。A・Bの2基が複合したもので、Aの主軸方向はN-83°-Wであり、

Bの主軸方向はN-86°-Wである。

Aは長径2.1m・短径1.07mほどの楕円形の平面形を呈し、Bの西側に複合している。Bは長径2.1m以上、短径1.28mほどの長楕円形の平面形を呈している。Bの東よりにはピットがみられる。

造構検出面から床までの深さはAで5~15cm、Bで5~10cmほどの浅いものである。Aは西壁部が垂直ぎみに立ちあがり、A・Bともほかはゆるやかな立ちあがりを示している。床はA・Bともロームであり、Aは中央部にむかって傾斜を示し、Bはほぼ平坦であり、いずれも硬いものではない。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
	84	36	8	

第23号土壌（第32図）

本址はD 6 d 1およびD 6 c 1に確認され、第22号土壌の南、第15号土壌の北側に位置している。主軸方向はN-8°-Wであり、長径3.31m・短径1.25mほどの長楕円形の平面形を呈し、南壁部は張りだしている。

造構検出面から床までの深さは15~20cmほどで、いずれの壁もゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、中央部にむかって傾斜を示し、それほど硬いものではない。

床および壁にP 1~P 3のピットがみられ。P 1は南壁部、P 2は大形で東壁部にあり、P 3は南壁部に位置している。いずれも造構に直接関係するものかどうかは不明であり、いずれも浅いものである。

覆土はいずれも軟質の土質を呈している。

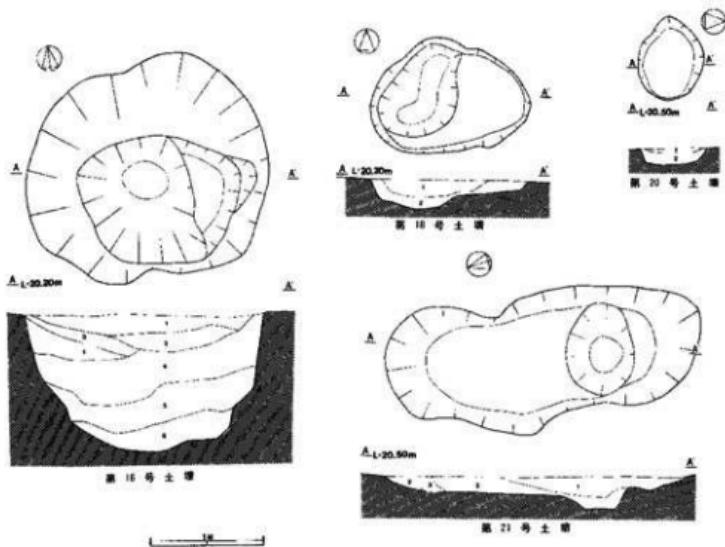
ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	34	22	5	
P 2	78	73	15	
P 3	20	16	17	

第24号土壌（第32図）

本址はG 8 i 1に確認され、第26号土壌・第27号土壌の南に接し、第6号住居址の北側に位置している。主軸方向はN-67°-Eであり、長径75cm・短径47cmほどの楕円形の平面形を呈し、二段の掘りこみを有している。

造構検出面から床までの深さは15cm内外で、いずれも壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、平坦であるがそれほど硬いものではない。

覆土は軟質の土質を呈している。



第31図 土壌実測図(3)

土層解説

第16号土壤

1. Hue 7.5YR 4/4 棕色土(ロームブロック)
2. Hue 7.5YR 4/4 ローム小ブロックを含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 4/4 ローム小ブロックを含む極暗褐色土
4. Hue 7.5YR 4/4 ローム小ブロックを含む暗褐色土
5. Hue 7.5YR 4/4 ロームブロックを少量含む黒褐色土
6. Hue 7.5YR 4/4 棕色土(ロームブロック)

第18号土壤

1. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を少量含む暗褐色土
 2. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を多量含む暗褐色土
- 第20号土壤
1. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を含む暗褐色土
 2. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を多量含む暗褐色土

第21号土壤

1. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子を多量含む褐色土
3. Hue 7.5YR 4/4 棕色土(ロームブロック)

第25号土壤（第32図）

本址はG 8 h 1・G 8 i 1にわたって確認され、第24号土壤の北、第26号土壤の北西部に位置している。主軸方向はN-54°Eであり、長径73cm・短径66cmほどの楕円形の平面形を呈している。

造構検出面から床までの深さは20cmほどで、壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、ほぼ平坦でそれほど硬いものではない。

覆土は軟質の状態を示す土質である。

第26号土壤（第32図）

本址はG 8 i 1・G 8 i 2・G 8 h 2にわたって確認され、第24号土壤・第25号土壤の東側に接して位置している。主軸方向はN-24°Eであり、長径1.74m・短径0.96mほどの長楕円形の平面形を呈している。中央部には小ピットがみられる。

造構検出面から床までの深さは20cm内外で、壁は西壁より東壁の方がゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、平坦をなしておりそれほど硬いものではない。

ピットは中央部にみられ、造構との関係は不明である。

覆土は軟質の土質である。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	13	11	10	

第27号土壤（第32図）

本址はG 8 i 2に確認され、第26号土壤の東、第28号土壤の南側に接して位置している。主軸方向はN-10°Wであり、長径2.0m・短径1.07mほどの不定楕円形の平面形を呈し、北東壁がやはりだしている。北側のAと南側のBの2個の土壤の複合で、造構内にはP 1～P 5のピットが検出されている。

造構検出面から床までの深さは、Aで12cm・Bで20cmほどである。いずれの壁もゆるやかな立ちあがりを示している。床はA・Bともロームであり、AはP 4のため床が傾斜を示しているが

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	44	28	10	
P 2	19	19	5	
P 3	46	30	10	
P 4	70	28	7	不定形
P 5	21	18	36	

Bは平坦をなし、いずれもそれほど硬いものではない。

遺構内にP 1～P 5のピットが検出されているが、P 5のほかはいずれも浅いもので規則性を有しているものではない。

覆土はAがBを切りこみ、いずれも軟質の土質である。

第28号土壤（第33図）

本址はG 8 h 2に確認され、第26号土壤・第27号土壤の北側に位置している。主軸方向はN-10°-Wであり、長径1.4m・短径0.76mほどの楕円形の平面形を呈し、A・Bの複合した土壤である。AはN-38°-Eの主軸方向で長径71cm・短径61cmの不定楕円形の平面形を呈し、BはN-41°-Eで長径81cm・短径70cmほどの楕円形の平面形を呈している。A内にはP 1・P 2のピットが検出されている。

遺構検出面から床までの深さはAで15cm・Bで22cmほどで、壁はいずれもゆるやかな立ちあがりを示している。床はロームであり、Aはピットにむかって傾斜を示し、Bは平坦をなし、いずれも硬いものではない。

ピットはA内に2個検出されているが、遺構との関係は不明である。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	16	12	10	
P 2	21	18	14	

第29号土壤（第33図）

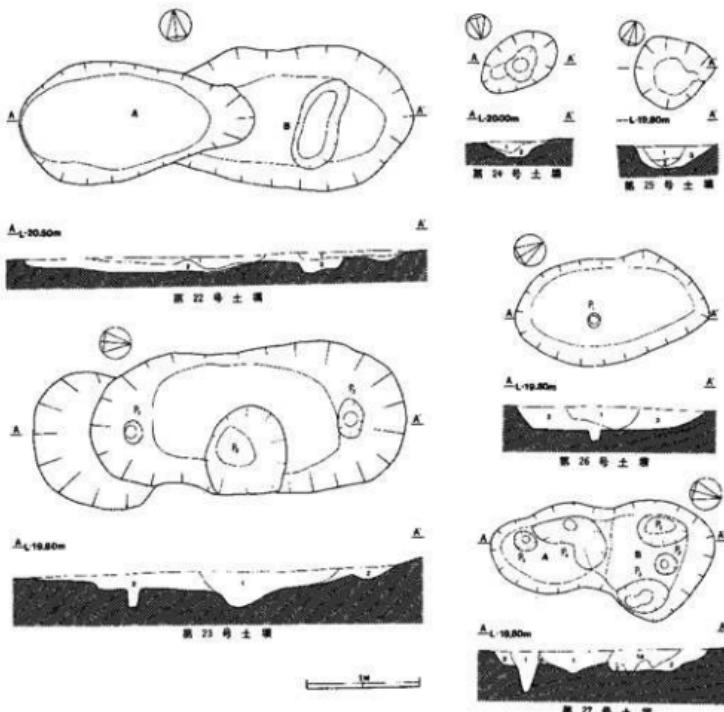
本址はG 8 h 1に確認され、第30号土壤の南に接している。主軸方向はN-60°-Eであり、長径82cm・短径64cmほどの楕円形の平面形を呈し、段を有している。

遺構検出面から床までの深さは27cmほどで、10cmほどで段をなし、壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、ほぼ平坦でありそれほど硬いものではない。

第30号土壤（第33図）

本址はG 8 g 1・G 8 g 2・G 8 h 1・G 8 h 2にわたって確認され、第29号土壤の北側に接して位置している。主軸方向はN-11°-Eであり、長径87cm・短径60cmほどの楕円形の平面形を呈している。

遺構検出面から床までの深さは20cmほどで、壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、中央部にむかって傾斜を示し、それほど硬いものではない。



第32図 土壌実測図(4)

土層解説

第22号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土

第23号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ロームブロックを含む褐暗褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む明褐色土

第24号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土

第25号土壤

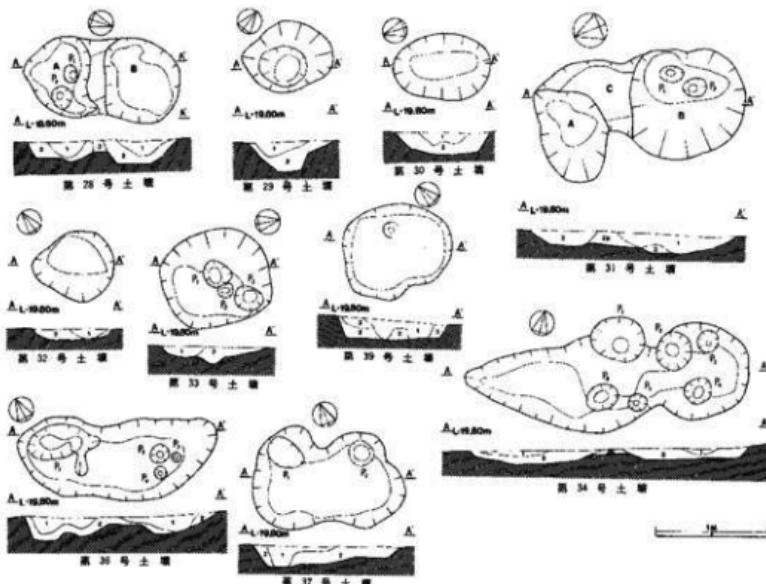
1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 5% 褐色土(ロームブロック)

第26号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ロームブロック・ローム粒子を多量含む褐色土

第27号土壤

1. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を少量含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む黒褐色土



第33図 土壌実測図(5)

土層解説

第28号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を多量含む褐色土
3. Hue 7.5YR 4/ 褐色土(ロームブロック)

第29号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ロームブロックを含む褐色土

第30号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ロームブロックを含む褐色土

第31号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ロームブロックを含む褐色土
3. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土

第32号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ 暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ロームブロックを含む褐色土

第33号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ 黒褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土

第34号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ 暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を多量含む褐色土
- 2a. " 褐色土(ロームブロック)

第36号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ 暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を多量含む褐色土

第37号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ 暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を多量含む褐色土

第39号土壤

1. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土
2. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 4/ ローム粒子を多量含む暗褐色土

第31号土壌（第33図）

本址はG 8 g 1・G 8 g 2にわたって確認され、第30号土壌の北側に接し、第32号土壌の南側に接して位置している。主軸方向はN-29°-Eであり、長径1.9m・短径0.93mの不定形の平面形を呈し、A・B・Cの土壌が複合したものである。AはN-67°-Eの主軸方向で長径93cm・短径61cmほどの楕円形の平面形をなし、BはN-29°-Eの主軸方向を有し、長径1.03m・短径0.98mほどの楕円形の平面形を呈し、Cは短径60cmほどである。Bの床面に2個のピットが検出されている。

遺構検出面から床までの深さはAで15cm、Bで17cm、Cで12cmほどの浅いものであるが、Bは西壁がゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、それほど平坦をなし、それほど硬いものではない。

Bの床にP 1・P 2が検出されているが、遺構との関係は不明である。

覆土はいずれも軟質で、C土壌の覆土をA・Bとも切りこんでいる。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	22	14	8	
P 2	20	17	12	

第32号土壌（第33図）

本址はG 8 g 2・G 8 g 1にかけて確認され、第31号土壌の北側に接し、第36号土壌の南側に接して位置している。主軸方向はN-66°-Wであり、長径73cm・短径63cmほどの楕円形の平面形を呈している。

遺構検出面から床までの深さは10cm内外で、南西壁はゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、ほぼ平坦をなしているがそれほど硬いものではない。

第33号土壌（第33図）

本址はG 8 g 2・G 8 h 2にわたって確認され、第29号土壌～第31号土壌の東側に位置している。主軸方向はN-12°-Wで、長径95cm・短径85cmほどの楕円形の平面形を呈し、内部に3個のピットが検出されている。

遺構検出面から床までの深さは10cm内外で、北西壁はゆるやかに立ちあがり、P 3が北東部に

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	27	22	9	
P 2	14	72	7	
P 3	26	20	16	

みられる。床はロームであり、ほぼ平坦をなして硬いものではない。P 1～P 2 は床面にみられ、規則性のあるものではない。

覆土はやや軟質の土質である。

第34号土壤（第33図）

本址はG 8 g 2 に確認され、第32号土壤の東側に接し、第33号土壤の北側に位置している。主軸方向はN-73°Eで、長径2.53m・短径0.86mほどの不定形の平面形を呈し、2基の土壤が複合したものである。西側のものは長楕円形の平面形を呈し、東側のものは円形の平面形を呈している。壁にはP 1～P 6 のピットがみられる。

遺構検出面から床までの深さは10～13cmほどで、それぞれ壁はゆるやかな立ちあがりを示している。床はロームであり、それぞれ平坦をなしているが硬いものではない。

ピットは中央より東側に集中して壁部にみられるものが多く、遺構との関係は不明である。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	48	40	27	
P 2	33	31	17	
P 3	20	18	9	
P 4	25	21	8	
P 5	18	15	10	
P 6	29	22	13	

第35号土壤（第34図）

本址はG 8 e 1・G 7 e 0 にわたって確認され、第31号土壤の西側に位置している。主軸方向はN-45°Wであり、A・B 2基の土壤の複合である。AはN-45°Wの主軸方向であり、長径1.4m・短径0.86mほどの楕円形の平面形を呈し、BはN-37°Wの主軸方向であり、長径2.1m以上・短径0.8mの長い不定形の平面形を呈し、南西部は部分的にはりだしている。床面にはP 1・P 2 のピットが検出されている。

遺構検出面から床までの深さはAで40cm、Bで10cm内外である。Aにおいて壁は外方に開いてゆるやかに立ちあがり、Bもゆるやかに立ちあがっている。床はいずれもロームであり、平坦で硬いものではない。

ピットはBの床にあり、遺構との関係は不明である。

覆土はBの覆土がAが切りこみ、ピット内は軟質の土質である。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	12	11	10	
P 2	24	13	17	

第36号土壤 (第33図)

本址はG 8 f 2・G 8 g 2にわたって確認され、第32号土壤と第37号土壤にはきまれて位置している。主軸方向はN-59°-Wであり、長径1.78m・短径0.73mほどの長楕円形の平面形を呈し、西および東側床面にピットが検出されている。

造構検出面から床までの深さは15cm内外で、ほとんどの壁がゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、ピットのため平坦ではなく、硬いものではない。

ピットは4個検出されているがP 1は不定形をなし、P 2～P 4は東側床面にみられ、規則性を有しているものではない。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	66	30	10	不定形
P 2	17	16	20	
P 3	9	8	9	
P 4	11	11	14	

第37号土壤 (第33図)

本址はG 8 f 2に確認され、第36号土壤の北側に接して位置している。主軸方向はN-60°-Wで、長径1.37m・短径0.91mの不定楕円形の平面形を呈し、北壁側にピットがみられる。

造構検出面から床までの深さは10～20cmほどで、壁はややゆるやかに立ちあがっている。床はロームであり、東から西に傾斜を示し、それほど硬いものではない。

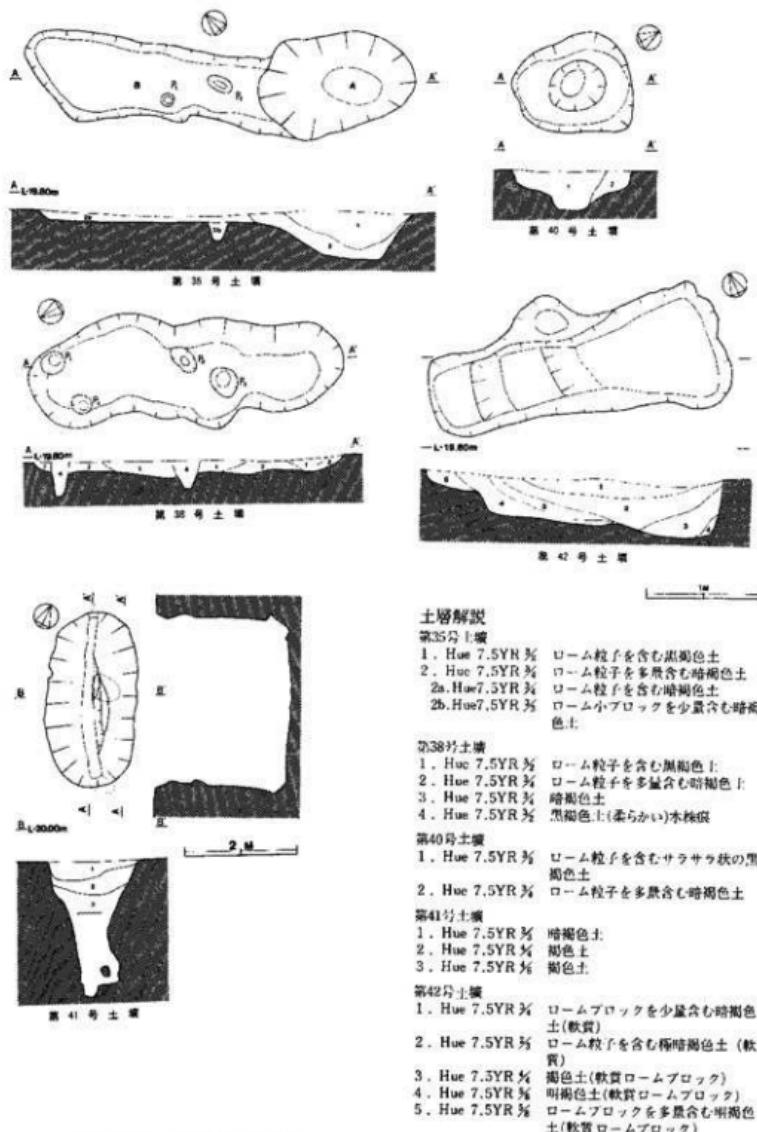
ピットは北西部および北東部にみられる。

覆土はそれほど硬い土質のものではない。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	35	24	5	
P 2	23	21	6	

第38号土壤 (第34図)

本址はG 8 f 2・G 8 e 2にわたって確認され、第39号土壤の東側、第40号土壤の北側に位置している。主軸方向はN-29°-Eであり、長径2.82m・短径0.98mほどの長楕円形の平面形を呈



第34図 土壌実測図(6)

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	22	21	18	木株痕
P 2	29	16	14	
P 3	29	23	10	木株痕
P 4	18	16	30	木株痕

し、部分的に壁のはりだしがみられる。床面および北壁部にピットが4個ほど検出されている。遺構検出面から床までの深さは10～15cmほどで、ほとんどの壁がゆるやかに立ちあがりを示している。床はロームであり、ほぼ平坦をなしているが硬いものではない。ピットは4個であり、ほとんどが木株痕と考えられ、軟質の土質を呈している。覆土は自然の流れ込みではなく、軟質の土質である。

第39号土壤（第33図）

本址はG 8 e 2に確認され、第38号土壤の西に接して位置している。主軸方向はN-48°-Wであり、底径97cm・短径84cmほどの楕円形の平面形を呈し、南西壁の一部がはりだしを有している。北東壁よりにピットが1個検出されている。

遺構検出面からの深さは12～20cmほどで、壁は垂直ぎみに立ちあがっている。床はロームであり、南東部から北西方向にゆるやかな傾斜を示し、それほど硬いものではない。

ピットは前述のように北東部よりに検出され、遺構との関係は不明である。

覆土はやや軟質で、自然の流れ込みの状態ではない。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備考
P 1	14	14	18	

第40号土壤（第34図）

本址はG 8 f 2に確認され、第38号土壤の南側および第37号土壤の北側に位置している。主軸方向はN-14°-Eであり、長径1.05m・短径0.88mほどの楕円形の平面形を呈しているが、隅丸方形形状に類似する形状を呈している。中央部の落ちこみは、長径52cm・短径43cmほどの楕円形の平面形を呈している。

遺構検出面から床までの深さは10～20cmほどで、中央部の落ちこみ底面までの深さは35cmほどである。床はロームであり、一段目の床は中央部の落ちこみに向かって傾斜を示し、中央部の落ちこみの床面は平坦をなしている。いずれの床もやや硬いものである。

覆土は軟質の状態を示している。

第41号土壙（第34図）

本址はC 5 j 6・D 5 a 6にわたって確認されたもので、第9号住居址の床面下に検出された。主軸方向はN-29°-Wであり、長径3.11m・短径1.61mほどの長楕円形の平面形を呈し、北東壁下段部が袋状に入りこみ、長軸の両端部の下段部もオーバーハングしている。床面は細長く、幅22cmほどである。

遺構検出面から床までの深さは2.4mほどで、壁は長軸部で内彎きに立ちあがり、短軸部ではやや外反して立ちあがっている。北東壁部の下段は袋状に内部に入りこんでいる。床はハードロームであり、長軸にほぼ平坦をなし、短軸部はやや中央に彎曲し、硬くしまっている。

覆土の下層は不明であるが、自然の流れ込みの状態を呈している。

第42号土壙（第34図）

本址はD 6 f 1に確認され、第10号住居址の覆土を切って西コーナー部に複合している。主軸方向はN-77°-Wであり、長径2.65m・短径0.75～1.1mほどの不整長方形の平面形を呈している。北壁部の一部がはりだし、東壁部径が西壁部径よりも大きい。

遺構検出面から床までの深さは最深部で45cm、最浅部で10cmほどであり、壁はそれぞれ垂直ぎみに立ちあがっている。床はロームであり、西から東へ段を有しながら傾斜している。

覆土は第10号住居址の覆土を切りさらに床面を切っており、いずれも軟弱な土質である。層の堆積の状態から人為的な埋め戻しが考えられ、下層はいずれもロームブロックを基盤とする層の堆積がみられる。

本址は第1号塚部にみられた盗掘坑の一部と考えられる。

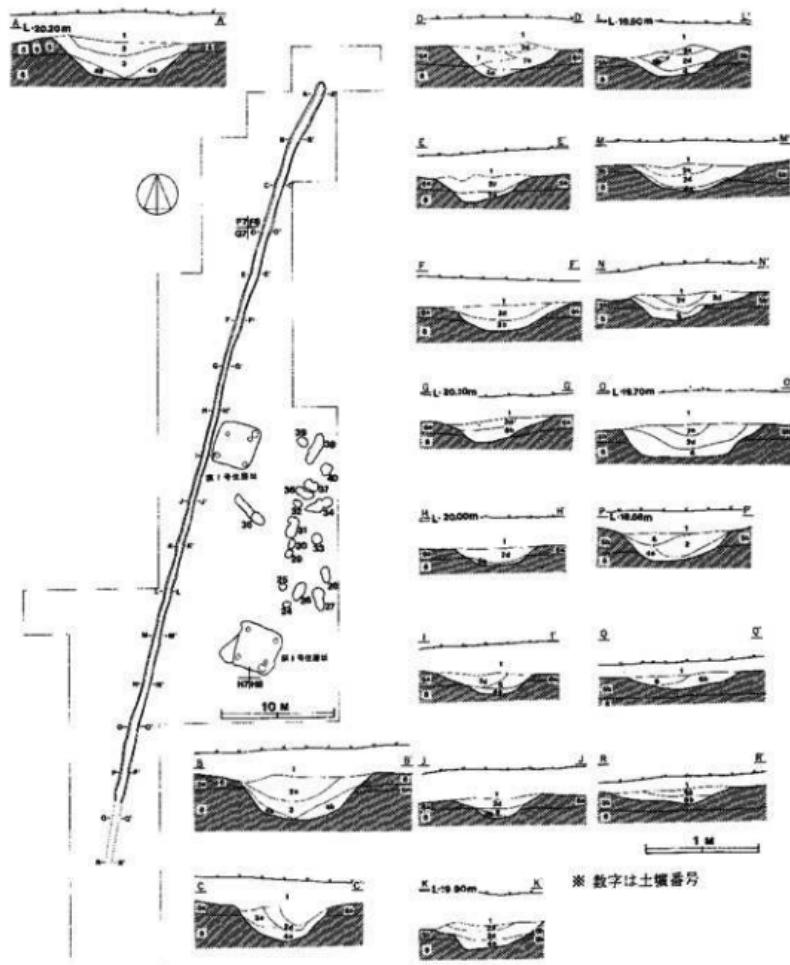
3 溝

溝は調査地域の中央部に2本が確認され、本遺跡の中央部を東西に通る道路をはさんで南側が第1号溝、北側が第2号溝である。

第1号溝（第35図）

本溝は大調査E 8・G 8・G 7・H 7で確認され、遺跡中央部から南々西にのび、台地縁辺の傾斜面で消える。

北部の溝の始まり部の主軸方向はN-29°-Eで、6mほどからN-15°-Eにかわり、それから南へはほとんど直線的にのびている。溝の中央部で第7号住居址の西に接し、さらに台地縁辺部にのびている。溝の上幅は0.7～1.0mほどで、遺構検出面からの深さは高低差の関係があるが15

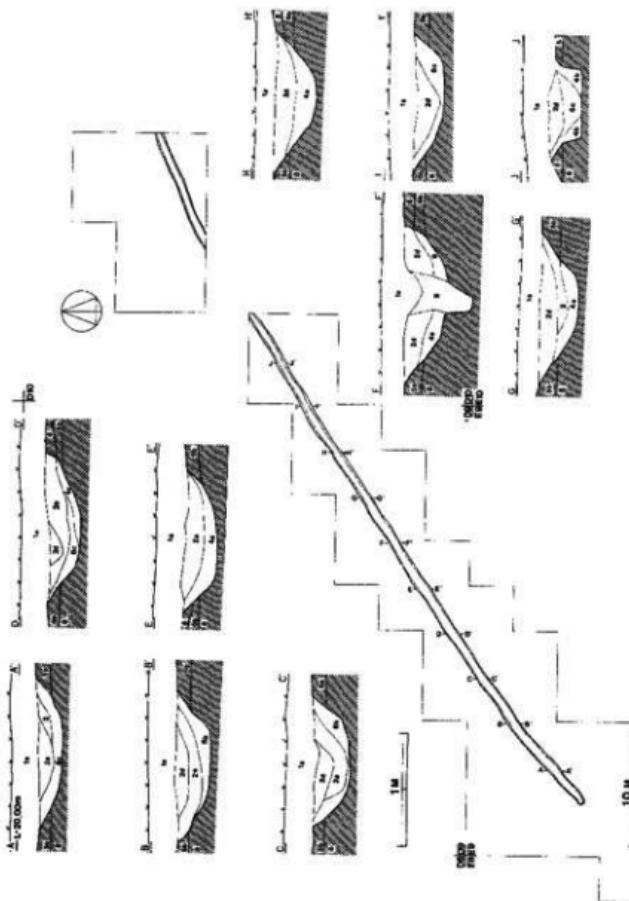


第35図 第1号溝実測図および造構配置図(4)

1上層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1. Hue 7.5YR 5% 棕色土 (表土層) | 3. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む極暗褐色土 |
| 1a Hue 7.5YR 5% 棕色土 (表土層) | 3a Hue 7.5YR 5% 烧土粒子を含む極暗褐色土 |
| 2. Hue 7.5YR 5% 黒褐色土 | 4. Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土 |
| 2a Hue 7.5YR 5% ローム粒子を含む黒褐色土 | 4a Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土 |
| 2b Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む黒褐色土 | 4b Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土 |
| 2c Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む黒褐色土 | 4c Hue 7.5YR 5% ローム粒子を多量含む褐色土 |
| 2d Hue 7.5YR 5% 黑褐色土 | |
| 2e Hue 7.5YR 5% 黑褐色土 | |

5. Hue 7.5YR 1/4 褐色土(ローム漸移層)
 5a Hue 7.5YR 1/4 ローム粒子を含む褐色土
 5b Hue 7.5YR 1/4 褐色土(ローム漸移層)
 6. Hue 7.5YR 1/4 暗褐色土
 6a Hue 7.5YR 1/4 暗褐色土(ローム漸移層)
 6b Hue 7.5YR 1/4 ローム粒子を多量含む暗褐色土
 6c Hue 7.5YR 1/4 ローム粒子を多量含む暗褐色土
7. Hue 5YR 3/4 暗赤褐色土(ローム粒子を含む
 烧土層)
 7a Hue 7.5YR 3/4 烧土粒子を含む暗褐色土
 8. Hue 7.5YR 3/4 明褐色土(ローム)
 8a Hue 7.5YR 3/4 明褐色土(ロームブロック)
 9. Hue 7.5YR 3/4 暗暗褐色土(擾乱)



第36図 第2号溝実測図

~40cmほどである。

溝は第Ⅰ層の表土を除去すると、不明確ながら黒褐色土の落ちこみが確認され、掘りこみ面は第Ⅱ層である。壁はいずれも底からゆるやかに開いて立ちあがっている。底はロームであり、ほとんどが皿状をなし、それほど硬いものではない。

覆土はいずれも自然堆積の状態を示し、上層には黒褐色土を基層とする土層がみられ、下層には褐色土・暗褐色土の堆積がみられる。D-D'部には西側から焼土層の堆積がみられ、さらにO-O'部には上層に焼土粒子を含む黒褐色土の堆積がみられる。

E 8 から H 7 にかけて確認された第1号溝は南側で傾斜部を掘りこんでいるため底面のレベルが異なる。A-A'では19.75mほどで、O-O'で19.13m、さらにR-R'で18.25mであり、A-A'とR-R'の高低差は1.5mほどであり、いずれも北から南へむかって傾斜を示している。

溝内からの遺物の出土例はほとんどなく、H7b8内に確認された溝底面から手捏ね土器(第58図)が出土しているのみである。

第2号溝（第36図）

本溝は大調査区E 9・D 9・D 10で確認され、遺跡の北東地区にあり、北東方面へのびて調査区域外へものびている。

E 9 における溝の始まり部の主軸方面はN-49°-Eで、15~20mほどのD 9においてはN-57°-E、さらに東部のD 10においてはN-67°-Eの主軸を示し、溝はゆるやかな弧状をなしている。

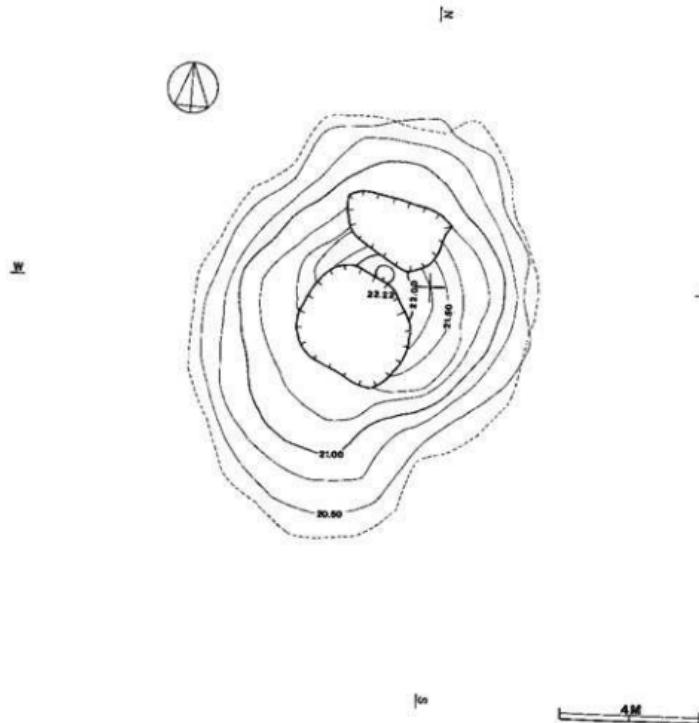
造構は第Ⅰ層の表土層を除去すると不明確であるが黒褐色土の落ちこみが確認され、第Ⅱ層が掘りこみ面である。溝の上幅はほとんどが1.0mほどであり、E 9 の始まり部がやや細く0.7mほどの幅を有している。掘りこみ面から底までの深さは30~35cmほどで、断面形は両壁ともゆるやかな立ちあがりを示している。底はロームであり、ほとんどが皿状をなし、ほぼ平坦地にあるため底のレベル差もほとんどなく、最大差で約15cmほどである。

覆土はいずれも自然堆積の状態を示し、上層には黒褐色土を基層とする層がみられ、下層には褐色土および暗褐色土の堆積がみられる。

溝内からの遺物の出土例はほとんどない。

4 塚

塚は本遺跡内に4基が確認され、いざれも調査を実施したが、第1号塚は調査前には松葉古墳（県1557）として周知されていたもので、調査対象も古墳1基と記載されていた。しかし、調査



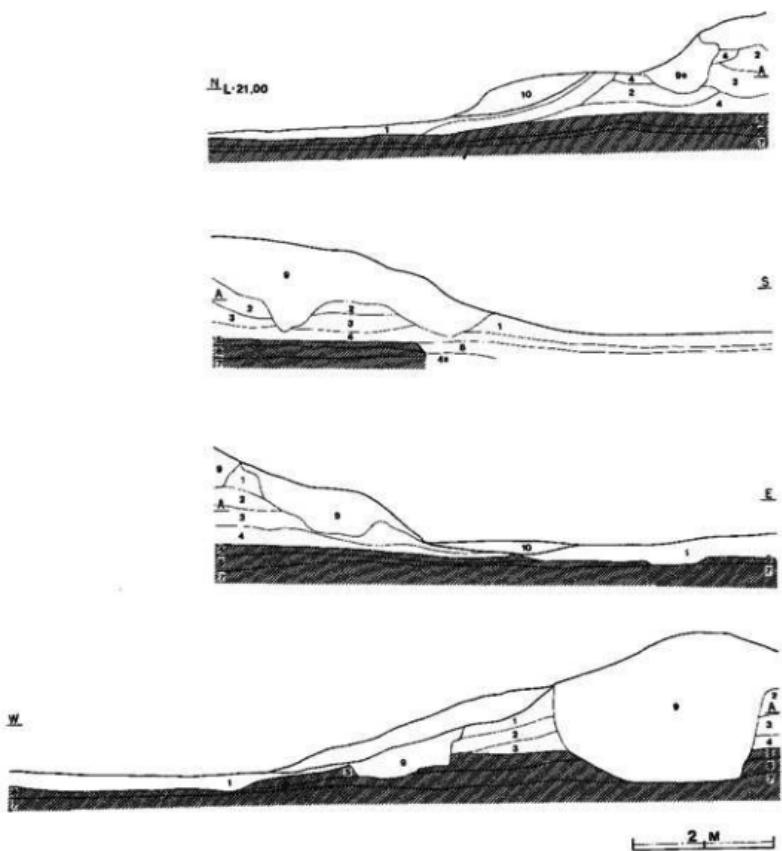
第37図 第1号塚平面図

地域は前述のように山林であり、伐開作業に伴って第2号塚～第4号塚が確認され、新たに調査対象となった。

第1号塚（第37・38図）

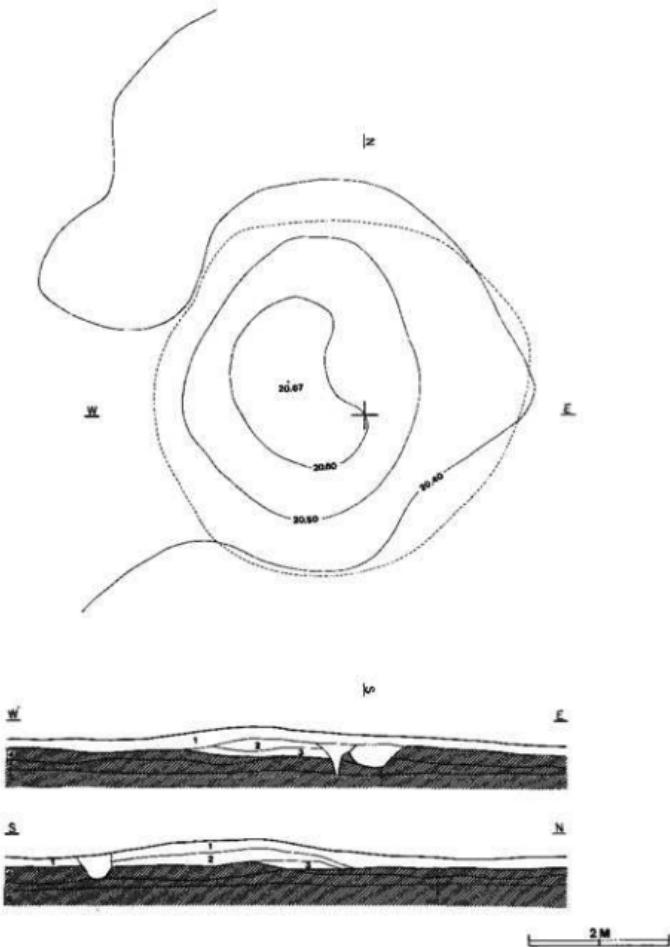
本址は調査地域の西部地区のD6区を中心として位置し、塚中央部には2ヶ所の大きな盗掘坑がみられ、形状も現丘をかろうじて保っている状態である。

現丘は長径12.5m・短径9.5mほどで、北々東に長径を有する橢円形の平面形を呈している。前述のように中央部には大きな盗掘坑がみられ、その中央部のほとんどが擾乱をうけている。頂部高は22.22mで、地表面との比高は1.2mほどで、盗掘坑の堆土のため平面形状は変えられ、南西裾部が大きくなっている。



第38図 第1号堺断面図

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. Hue 7.5YR Ⅳ | 褐色土(表土層) |
| 2. Hue 7.5YR Ⅳ | ロームブロックを含む暗褐色土 |
| 3. Hue 7.5YR Ⅳ | ロームブロックを含む暗褐色土 |
| 4. Hue 7.5YR Ⅳ | ロームブロックを含む暗褐色土 |
| 4a. Hue 7.5YR Ⅳ | ローム粒子を含む暗褐色土 |
| 5. Hue 7.5YR Ⅳ | ローム粒子を含む暗褐色土 |
| 6. Hue 7.5YR Ⅳ | 黒褐色土 |
| 7. Hue 7.5YR Ⅳ | ローム漸移層 |
| 8. Hue 7.5YR Ⅳ | 黒色土 |
| 9. 摂乱 | 9a. 木株 |
| 10. 二次盛土 | |



第39図 第2号煤実測図

1. Hue 7.5YR 5% 喷褐色土 (表土層)
2. Hue 7.5YR 5% 極噴褐色土
3. Hue 7.5YR 5% 黑褐色土
4. Hue 7.5YR 5% 黑褐色土
5. Hue 7.5YR 5% 喷褐色土 (ローム漸移層)
6. Hue 7.5YR 5% 極褐色土 (ローム)

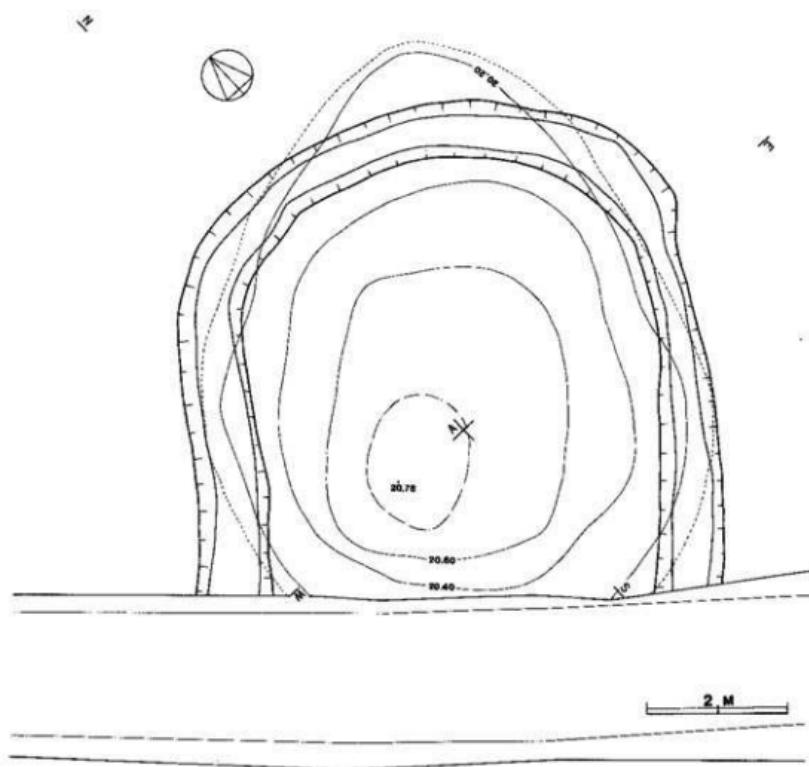
土盛りは地表面に積まれたもので、ほとんどがロームブロックを含む土層で、ほぼ平坦に積まれているが硬く踏み固められたものではない。旧地表面から頂部までの盛土の高さは約1.7mほどである。

塚内からの遺物の出土はほとんどみられず、前述の集落に伴う土師式土器の破片が若干出土したにすぎない。塚に伴う遺物は、盗掘坑のために散在したとも考えられる。

第2号塚（第39図）

本址は第1号塚の東側に位置し、伐開作業の際に新たに発見されたものである。

長径5.3m・短径4.9mほどの橢円形の平面形を呈し、東側にややゆるやかな傾斜を示し、北西部



第40図 第3号塚平面図

周辺にはやや浅い溝状のくぼみがみられる。ほとんど地表面との比高がみられず、頂部高は20.67mで比高は27cmほどである。

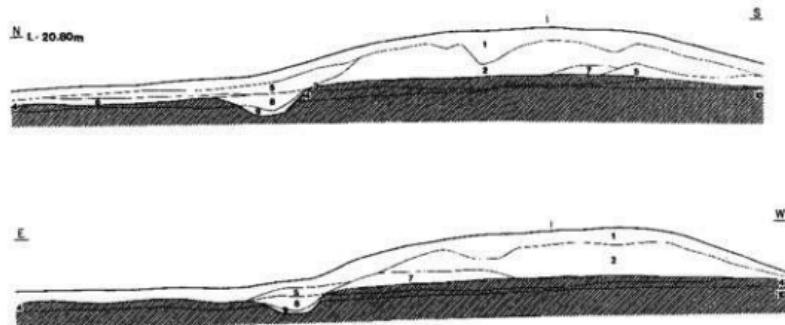
土盛りは旧地表面に35cmほどの高さに積まれたもので、盛土もロームブロックなどを含まないもので周辺部の地表面の土を積んだものと考えられ、軟弱な盛土である。

塚に伴う遺物の出土は全くみられない

第3号塚（第40・41図）

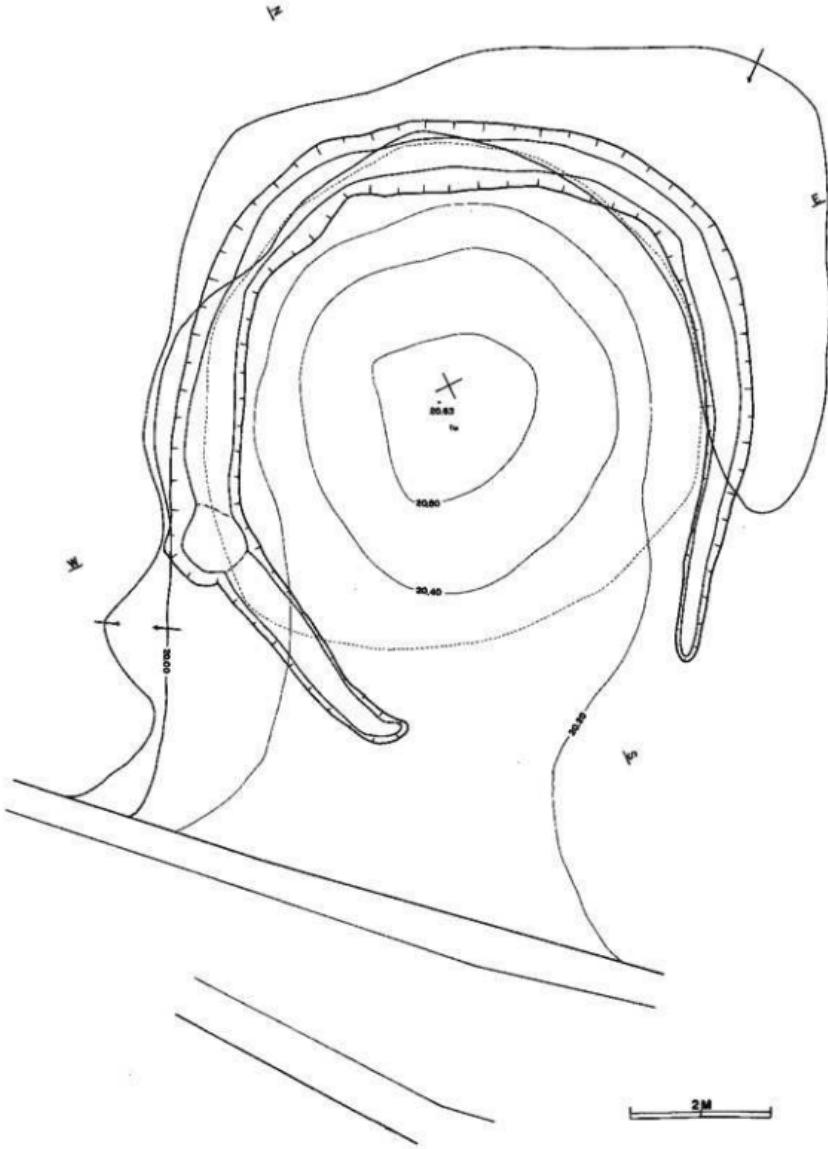
本址は発掘調査地域のほぼ中央部にあり、第4号塚の西側に位置している。

塚の南西裾部に道路があるため一部削平されているが、長径約8.0m・短径7.2mほどの長方形の平面形を呈し、上軸方向はN-45°-Eである。頂部高は20.78mで、地表面との比高は75cmほど

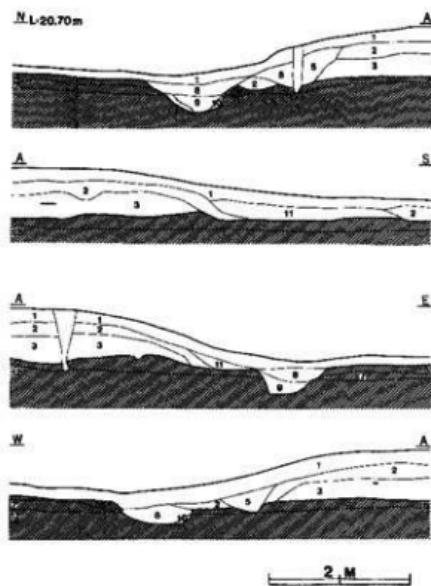


第41図 第3号塚断面図

1. Hue 7.5YR 4/ 棕色土（表土層）
2. Hue 7.5YR 3/ ローム粒子を含む黒褐色土
3. Hue 7.5YR 3/ 黒色土（旧表土層）
4. Hue 7.5YR 3/ 暗褐色土（ローム漸移層）
5. Hue 7.5YR 3/ ローム粒子を多く含む暗褐色土
6. Hue 7.5YR 3/ 黑褐色土
7. Hue 7.5YR 5/ 棕色土（ロームブロック）
8. Hue 7.5YR 5/ 暗褐色土（軟質）
9. Hue 7.5YR 5/ ローム粒子を含む褐色土（軟質）
10. Hue 7.5YR 5/ 褐色土（ローム）



第42図 第4号塚平面図



第43図 第4号塚断面図

- 1. Hue 7.5YR 5/4 暗褐色土(表土層)
- 2. Hue 7.5YR 6/6 ロームブロックを多く含む暗褐色土
- 3. Hue 7.5YR 5/6 暗褐色土
- 4. Hue 7.5YR 5/6 黑褐色土
- 5. Hue 7.5YR 5/6 黑褐色土(搅乱層)
- 6. Hue 7.5YR 5/6 暗褐色土
- 7. Hue 7.5YR 5/6 暗褐色土
- 8. Hue 7.5YR 5/6 ローム粒子を多く含む褐色土(軟質)
- 9. Hue 7.5YR 5/6 黑褐色土(軟質)
- 10. Hue 7.5YR 5/6 ローム粒子を多く含む褐色土
- 11. Hue 7.5YR 5/6 暗褐色土(軟質)
- 12. Hue 7.5YR 5/6 暗褐色土(ローム)

であり、盛土は中心部より北東に流れたような状態がみられる。

塚の裾部には幅0.75～1.0mほどの溝が検出され、隅丸長方形状の平面形を呈している。南西溝部は道路等のため調査ができなかった。溝は第Ⅱ層を掘りこみ面とし、底までの深さは20～30cmほどで、内辺部壁にくらべて外辺部壁がゆるやかな立ちあがりを示している。溝内の覆土は湿気をあまり有さないサラサラとした柔らかい土質のもので、暗褐色土およびローム粒子を含む

褐色土の堆積がみられる。溝の外辺部径は長径7.0m以上・短径7.5m、内辺部径は長径6.2m以上・短径5.8mほどの長方形の平面形を呈している。

封土は地表面にロームブロックおよびローム粒子を含む黒褐色土等を積んだもので、それほど硬いものではない。

塚に伴う遺物の出土はほとんどみられないが、南東溝部の上面に鉄滓が1個出土している。

第4号塚（第42～44図）

本址は前述の第3号塚の東に位置している。

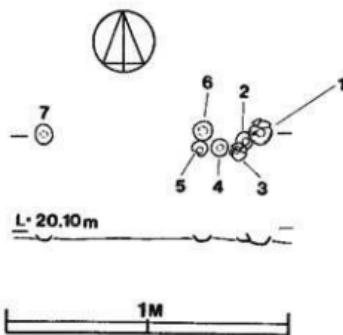
規模は直径7.1mほどの円形の平面形を呈し、南側部以外の裾部は溝状にややくぼんだ状態を示している。頂部高は20.63mで、地表面との比高は60cmほどである。

第3号塚と同様に塚裾部には溝が検出され、幅は0.8～1.0mほどで南側で細くなって立ちあがり、ブリッヂ部を有している。溝の平面形は椿円形状でN-16°-Eに主軸を有している。溝は第Ⅱ層から掘りこまれ、底までの深さは40cmほどである。内辺部壁に対し、外辺部壁がゆるやかな立ちあがりを示している。溝内の覆土は軟弱なサラサラした土質で、第3号塚の溝の覆土と類似している。溝の外辺部径は直径8.5mほどで、内辺部径は6.8mほどの円形の平面形を呈している。

封土は地表面を整形して積まれ、盛土の高さは70cmほどであり、土盛の際に硬く踏み固められたものではない。

塚中央部の第Ⅰ盛土層の上部に土師質土器（かわらけ）が7個ほど出土し、1～6は集中し、

いずれも口縁部を上にして置き並べられた状態で検出され、7は西に50cmほどはなれて出土した。検出されたレベルはほぼ同一であり、6個が検出された面には若干のカルシウムが検出された。



第44図 第4号塚遺物出土状態

2 遺 物

1. 住居址出土の遺物

第1号住居址

本址からの遺物の出土はそれほど多くはなく、覆土の上層から出土した砾石のほかはすべて土師式土器である。

土 器 (第45図1~4)

1は本址の北西コーナー部にある貯蔵穴の北に出土した広口壺形土器である。口縁部は垂直ぎみに立ちあがり、最大径は胴部下位にある。口縁部にはひずみのための亀裂がみられる。口径14.3cm・器高18.5cm・底径6.0cmほどで最大径は18.9cmほどの完型品である。

器外面は口辺部に横位の刷毛目整形後なで整形がなされ、部分的に刷毛目が残っている。胴部は上部に斜位の刷毛目整形がなされ、下部には縦位あるいは斜位のなで整形がなされている。最下端は横に逸げた形、底部は窪んでがなされている。

器内面は口辺部に横位の刷毛目整形がなされ、頸部は棱をなしている。胴部はじめ下部を斜位に刷毛目整形がなされ、その後頸部下を横位に刷毛目整形している。下部は工具の片方の整形痕が深く、底はなで整形がなされている。

色調は器外面上部が明茶褐色、下部は明赤褐色をなし、器内面は黒褐色を呈している。胎土中に砂粒等を含み、焼成は良好である。

2は貯蔵穴の底面から出土した16ほどとの壺形土器の口縁部片であり、口縁部は頸部から「く」の字状に大きく外反している。口径23.8cm・現高5.1cmほどで、器厚は約0.4cmほどである。

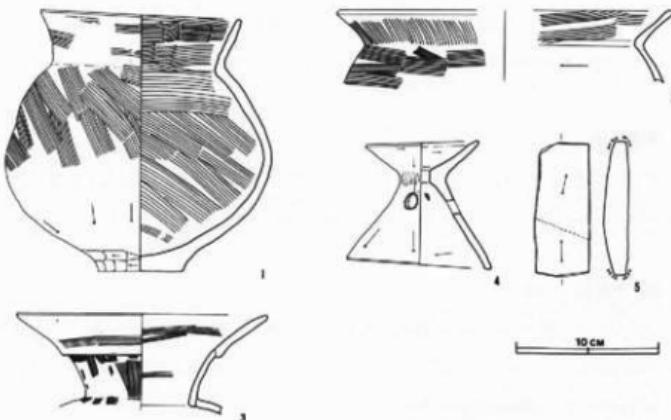
器外面は口辺部が横位整形後、縦位の刷毛目整形がなされ、頸部から肩部にかけて横位の細かい刷毛目痕がみられる。口辺部には煤が付着している。

器内面は口辺部にやや弧状をなした横位の刷毛目整形がみられ、頸部から肩部にかけては横なで整形がなされている。

色調は黒褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア・石英等を含み、焼成は堅緻にて良好である。

3は北西コーナー部の貯蔵穴の北に1と並んで出土した壺形土器の口縁部である。口縁部は頸部から大きく外反し、胴部は球状をなすものであろう。また、口縁部は有段口縁であり、口辺部が貼付されたもので、口径17.8cm・現高7.3cmで器厚は0.4~0.7cmほどである。

器外面は口辺部に横位の刷毛目整形がなされた後、横なで整形がなされている。頸部には縦位の細かい刷毛目痕がみられ、頸部から肩部にかけても部分的に同様の整形痕がみられる。



第45図 第1号住居址出土遺物

器内面は口辺部に横位の刷毛目整形後、横位の範磨きがなされ、部分的に刷毛目痕が認められる。

色調は全体的に黒褐色を呈し、部分的に赤茶褐色をなしている。胎土中に砂粒・石英等が含み焼成は普通で、二次的に火気をうけている。

4はP 2の西側に床よりやや浮いて出土したほぼ完型品の器台形土器である。器形は頸部から器受部が大きく開き、脚部は直線的に開いているが、ややひずみを有している。口径8.0cm・器高9.0cm・脚部径10.3cmほどで、中央孔は直径0.8cmほどをなし、脚部には3孔があり、直径は1.1cmである。

器外面は口辺部に横で整形がみられ、頸部にかけて縦位の範磨きがなされている。脚部には下方向への縦位の範磨きがみられる。脚部孔は外面部から穿ったものである。

器内面は器受部に横で整形がなされ、中央孔は直径0.8cmほどで貫孔し、脚部は部分的に刷毛目痕がみられるがなで整形がなされ、下部は斜位のなで整形痕がみられる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

石製品（第45図5）

5は北東部の礫土上層から出土した砥石で、長さ9.4cm・幅約3.5cm・厚さ0.9～1.8cmほどの長方形状をなしている。

表面は中央部から両頂部への擦痕がみられ、中央部は継をなしている。左側より右側がややへりが多い。両側面および両頂部にも擦痕が認められ、整形したものであろう。表面で研ぐ場合は置いて研ぎ、他の面を使用する場合は手に持つて使用したものと考えられる。

第2号住居址

本址からの遺物の出土は多くはなく、すべてが土師式土器であり、ほとんどが東コーナー部の床面から出土している。

土 器 (第46図1～5)

1は前述のように東コーナー部の床面から出土した變形土器の口縁部である。現存部は約 $\frac{1}{2}$ で口縁部は頸部から「く」の字状に開いて立ちあがり、胴部下半部以下が欠損している。口径16.6cm・現高9.7cmほどで器壁は薄手である。

器外向は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は斜位のなで整形がなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部は継をなし、肩部から縱・横位のなでが胴部にかけてみられ、一部輪積痕が認められる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

2は1と同様に東コーナー部付近の床面から出土し、 $\frac{1}{4}$ ほどの變形土器の口縁部片である。口縁部は頸部から大きく外反して開き、口縁部の器厚は胴部よりも厚く、口径17.2cm・現高5.7cmほどである。

器外向は口辺部に横なで後、縱位のなで整形がなされ、頸部から肩部にかけて縱位あるいは斜位のなで整形がなされている。全体的に煤が付着している。

器内面は口辺部に横なで整形がなされ、頸部はやや丸味をおびた継をなし、肩部は縱位あるいは横位のなで整形がなされている。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は良好である。

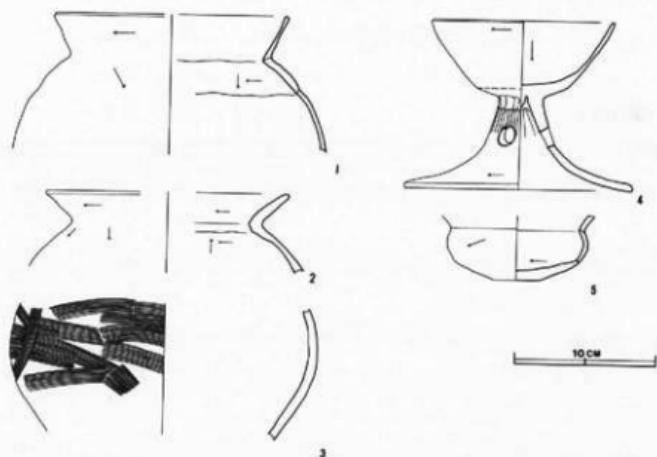
3は東コーナー部の床に出土した $\frac{1}{4}$ ほどの變形土器の胴部片である。現高は9.4cmほどで、最大径は21.8cmで胴部中段にある。

器外向は胴部に横位の細かい刷毛目整形がみられ、部分的に縱位の刷毛目痕も認められる。下部の整形痕は不鮮明で、煤の付着が認められる。

器内面は竪なでがなされている。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

4は東コーナー部の貯蔵穴の北東部の床に出土した完型の高環形土器である。口径13cm・器高12cm・脚部径16.2cmほどで、环部は内彎ぎみに開いて立ちあがり、脚部幅部は大きく開いている。



第46図 第2号住居址出土遺物

脚部には直径1.2cmほどの孔が三ヶ所に穿たれている。

器外面は壺部の口辺部に横なで整形がみられ、下部は施磨きがなされているが器面全体が磨耗しているため方向は不明である。下端部はかすかな稜をなして接合部となる。接合部は窓の横なで整形がみられ、脚上半部は縦位の施磨き、裾部は横位の施磨きがみられる。

器内面は壺部に縦位の細かい施磨きがみられるが、かなり磨耗している。脚部も施磨きがみられるが、器壁の磨耗と剥落がはげしい。

色調は暗灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。壺部と脚部の接合は、壺部の底を尖底状にして脚部にはめこんでいる。

5は東コーナー部付近のP3周辺に浮いて出土した塊形土器で口縁部を欠いている。現高4.7cm・底径3.2cmほどで、胴部は扁平な楕円形を呈し、口縁部は大きく聞く器形をなすものであろう。

器外面は頸部付近に横なで整形がみられ、頸部には輪積痕が認められる。胴部は斜位のなで整形がなされている。

器内面は全体的になで整形がなされている。

色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

第3号住居址

本址からの遺物の出土状態はほとんどが中央部および東壁よりに浮いた状態で出土し、破片で出土したものが多く、ほとんど土師式土器である。

土器（第47図1～5）

1は東壁よりのP2とP3の間の覆土から出土した壺形土器で、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどで胴下部を欠いている。口径19.5cm・現高16.3cmで最大径は23.8cmほどで、口縁部は頸部から外反して立ちあがっている。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は施状工具による横なで整形がみられる。器面の全体に煤の付着が認められる。

器内面は器外面と同様に口辺部は横なで、胴部は窓の横なで整形がみられる。

色調は外面が暗褐色、内面は黒褐色を呈している。胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

2は住居址中央部の覆土上層から出土した壺形土器の口縁部で、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。口径10.8cm・現高7.8cmで、胴部は球状を呈するもので、口縁部は頸部から外反して立ちあがっている。

器外面は頸部から口辺部にかけて縦位の刷毛目痕がみられ、その整形後、部分的に横なで整形がなされている。頸部から胴部にかけては斜位の刷毛目整形がなされ、刷毛目状工具は二種類以上であろう。

器内面は口辺部に横位の刷毛目整形がみられ、胴部にかけては横なで整形がみられる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

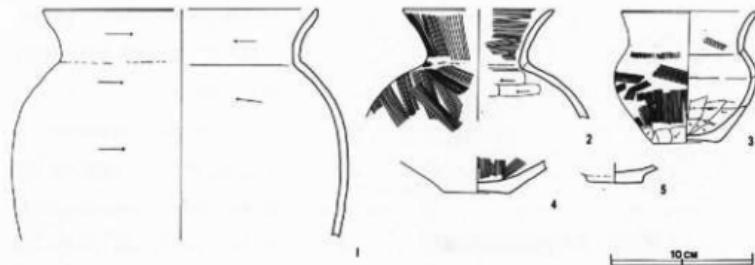
3は2と同様に住居址中央部の覆土から出土した小型壺形土器で、ほぼ完型である。口径9.6cm・器高9.5cm・底径4.8cmで、口縁部は頸部から外反して立ちあがり、最大径は10.2cmほどである。底部は中央部がややくぼんでいる。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部には縦位の刷毛目痕がみられる。胴上部は横あるいは斜位の窓なで刷毛目整形がなされ、下部は縦位の刷毛目整形がなされている。胴下端部は窓削りによって整形されている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられるが、器壁が剥落している。頸部は稜をなし、輪横痕がみられ、胴上部には横なで整形がなされている。底部は前述のようにややくぼみ、窓削り痕がみられる。

色調は暗茶褐色を呈し、一部黒色をなしている。胎土中に砂粒・石英を含み、焼成は良好である。

4は前述の土器と同地点から出土した底部で、底径4.7cm・現高2.3cmほどで、底部は中央部がや



第47図 第3号住居址出土遺物

やくばんでいる。

器外面には下端部に篦なでがみられ、器内面は刷毛目整形がなされ、剥落がみられる。

色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

5は貯藏穴周辺から出土した底部で、底径4.0cm・現高1.4cmであり、下端部は段をなしてい る。

器内面には篦なで整形がみられる。

色調は明褐色を呈し、一部黒色をなしている。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

土製品（第64図1）

住居址中央部の覆土から $\frac{1}{2}$ の土玉が出土している。長さ3.0cm・径3.0cm、中央孔は直径0.8cmほどで重量は129である。器面には部分的に指頭痕がみられる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英を含み、焼成は良好である。

第4号住居址

本址から出土した遺物はすべて土師式土器で、いずれも破碎している。

土器（第48図1～4）

1は炉址の西側の床面に出土した壺形土器の口縁部で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ ほどである。口径17.1cm・現高3.5cmで、口辺部は外反して立ちあがっている。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、煤が付着している。器内面は篦状工具による横なで整



第48図 第4号住居址出土遺物

形がなされている。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

2は住居址中央部の覆土から出土した壺形土器の口縁部で、現存部は約1/2ほどである。現高は3.0cmほどで、有段口縁の段部と頸部片で、段部は明瞭な稜をなしている。

器外面は口辺部に窓の横なで整形がみられ、器内面も同様な整形がなされている。

色調は灰茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

3は住居址中央部の西よりの床面に出土した壺形土器の口縁部で、現存部は1/4ほどである。口径9.0cm・現高2.7cmで、口縁部は開いて立ちあがり、器壁は薄く0.2～0.3cmほどである。

器面はいずれも磨耗し、横なで整形がなされている。

色調は外面明茶褐色を呈し、内面は黒褐色をなしている。胎土中に砂粒を多く含み、焼成は良好である。

4は3と同地点で出土した器台形土器の脚部で、現存部は1/3ほどである。現高4.6cm・脚部径12.0cmで、器受部との接合部から脚部は直線的に開いている。脚部には直径1.5cmほどの孔が3つほど認められる。

器外面は縦位の細かい窓磨きがなされ、器内面はなで整形がなされている。孔は内部から外部にもむかって穿たれている。

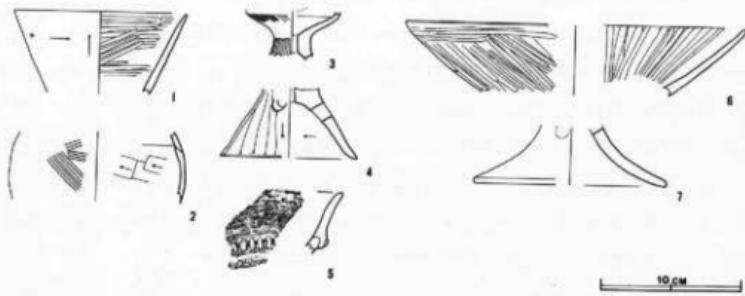
色調は赤茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英を含み、焼成は良好である。

第5号住居址

本址からの遺物の出土状態は、東コーナー部の貯蔵穴周辺部に集中し、ほとんどが土師式土器で、破片で出土しているものが多い。また、壺形土器・壺形土器はほとんど器形を示すものがみられない。そのほか、土玉の出土がみられる。

土器（第49図1～7）

1は東コーナー部の貯蔵穴の上面に出土した壺形土器の口縁部で、現存部は1/3ほどである。口径12.3cm・現高5.8cmで、口縁部は頸部から直線的に開いて立ちあがっている。



第49図 第5号住居址出土遺物

器外面は口唇部に磨滅痕がみられ、口辺部は縦位の刷毛目整形後、横なで整形がなされている。部分的に刷毛目痕が認められる。

器内面は横位あるいは斜位の細かい箝磨きがなされている。

色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

2は1と同地点から出土した胴部で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ ほどであり、1の胴部の可能性があるが、接合することはできなかった。現高4.7cmほどで、最大径は12.5cmほどのやや球状を呈している。

器外面は斜位の刷毛整形後、部分的に箝削りがなされている。器内面には輪積痕が認められ、斜位の箝なで整形がなされている。

色調は暗赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

3は覆土上層から出土した器台の接合部で、口唇部および脚下部を欠いている。現高は3.5cmほどで、口辺部はやや稜をなし、脚部には3つの孔が認められ、中央部の貫孔は直径0.8cmほどである。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、器受部から接合部にかけて刷毛目整形後、箝磨きがなされ、脚部は縦位の箝磨きがなされている。器内面は器受部に箝磨きが認められる。

色調は明灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み焼成は堅緻にて良好である。

4はやはり貯蔵穴の上面に出土したもので、現存部 $\frac{1}{3}$ ほどの器台形土器の脚部である。現高5.0cm・脚部径9.7cmで、脚は短かく、やや内擣ぎみに開いている。

器外面は脚部に縦位の箝なで整形がみられ、器内面には横なで整形がなされている。

全体的にかなりの火気をうけており、色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

5は有段口縁を有する壺形土器の口縁部片の拓影で、貯蔵穴の上面から出土している。

器外面は稜部に蓖状土具による圧痕がみられ、口辺部には横位の刷毛目整形がなされ、赤色塗料が塗付されている。頸部は縦位の刷毛目整形がなされている。

器内面は横なで整形がみられ、口辺部には赤色塗料の塗付が認められる。

色調は灰褐色を呈し、口辺部は塗料によってやや暗赤褐色をなしている。胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通であるが、器壁は剥落している。

6は東コーナー部北の壁よりの床から出土した高壺形土器の壺部で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ ほどである。

口径24.3cm・現高5.0cmで、壺部は大きく内脛ぎみに開いている。

器外面は横位の細かい箝磨き後、口辺部以外を斜位の細かい箝磨きしている。器内面は横なで整形後、縦位の細かい箝磨きがなされている。

色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英を含み、焼成は堅緻にて良好である。

7は貯蔵穴周辺から出土した高壺形土器の脚部で、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどであり、6と同一個体の可能性が考えられる。現高4.2cm・脚部径13.6cmほどで、脚裾部にむかって外反している。脚部の孔は3孔と思われる。

器内外面とも器壁が摩耗しているため、整形痕は不鮮明である。

色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

土製品（第64図2・3）

いずれも土玉であり、2は $\frac{1}{2}$ ほどで、東コーナー部の床から出土し、長さ3.4cm・径3.5cm・重量19gである。中央孔は直径0.8cmほどで、器面には部分的ななでと指頭痕が認められる。

色調は黒褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

3は貯蔵穴の北側の床から出土し、長さ3.0cm・径3.3cm・重量30gほどで、中央孔は直径0.7cmである。両頂部は整形がなされず、器面には指頭痕が認められる。

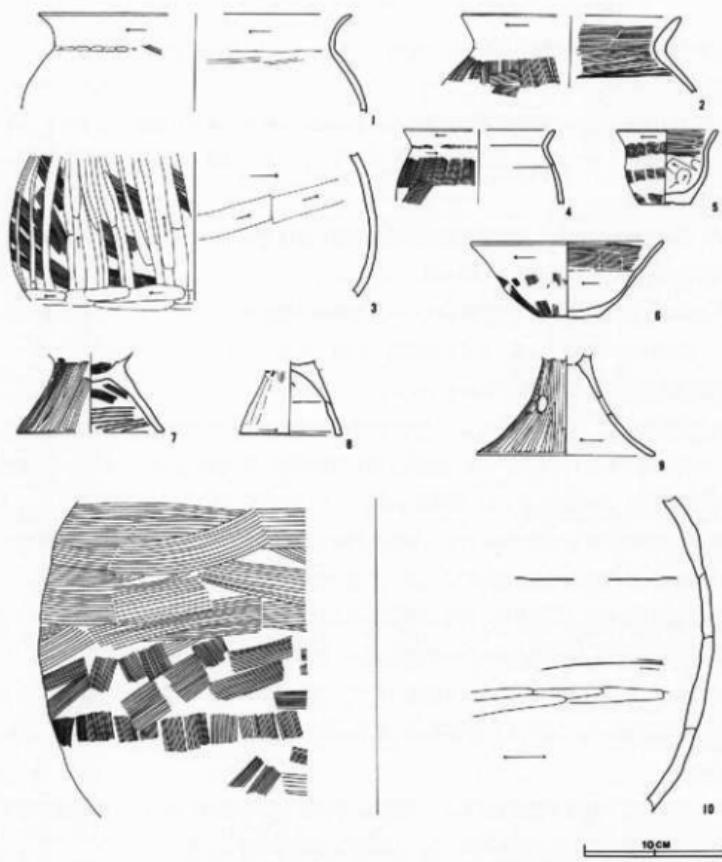
色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

第6号住居址

本址からの遺物出土状態は東壁よりの炉址周辺部に出土したものが多く、すべてが土師式土器である。

土器（第50図1～10）

1は東壁よりの炉址とP3の間に浮いた状態で出土した壺形土器の口縁部で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ ほどである。口径22.3cm・現高7.0cmで、口縁部は頸部から外反して立ちあがっている。



第 50 図 第 6 号 住居址 出土 遺物

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部には指による押圧痕がみられ、胴部は器面が磨耗しているため不鮮明であるが、刷毛目痕が部分的に認められる。

器内面は口辺部および胴部にわざ整形がみられ、頸部は明瞭な棱をなさず、曲線的に整形されている。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

2は東壁よりの覆土から出土した變形土器の口縁部で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ ほどである。口径15.8cm・現高5.3cmで、口縁部は厚く、頸部から「く」の字状に開いて立ちあがっている。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部から胴部にかけて縦位の刷毛目整形がなされ、煤の付着が認められる。

器内面は口辺部に横位の刷毛目整形がみられ、胴上部にも横位の刷毛目整形がなされている。

色調は外側褐色を呈し、内面は暗褐色をなしている。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

3は2と同じ地点に出土した變形土器の胴部で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ ほどである。現高10.2cmほどで、最大径はやや下位にあり26.1cmほどである。

器外面は地的に斜位の刷毛目整形がみられ、整形後に縦位の範なでをなしている。そのため部分的に刷毛目痕が消えている。下部には横位の窪削りがみられる。

器内面は範整形と横なで整形がなされている。

色調は褐色を呈し、一部黒色をなしている。胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

4は炉址上面の覆土から出土した小型變形土器の口縁部で、現存部は約 $\frac{1}{4}$ ほどである。口径10.8cm・現高5.3cmで、口縁部は小さく、頸部から開いて立ちあがっている。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部には縦位の刷毛目整形がなされている。肩部には横なで、胴部には縦位の刷毛目整形がみられ、下部は横なで整形がなされている。

器内面は口辺部および肩部とともに横なで整形がみられる。

色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は堅密にて良好である。

5は北壁よりの覆土から出土した小形變形土器で、完型品である。口径7.3cm・器高5.3cm・底径3.6cmで、頸部がやくびれて口縁部は外反ぎみに開いて立ちあがり、胴部の最大径は5.9cmほどである。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部から胴部にかけて縦位の細かい刷毛目痕がみられる。下端部には横位の刷毛目整形がみられ、底部は中央部がやくぼんでいる。

器内面は口辺部から頸部にかけて横位の刷毛目整形がみられ、胴部から底部には斜位の範なでと窪削りがみられる。

色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

6は北壁の中央部よりの覆土から出土した完型の环形土器である。口径13.7cm・器高5.3cm・底径4.4cmで、口縁部は底部から大きく開き、中段でやくびれを有している。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部には縦位の刷毛目整形がなされ、刷毛目痕は部分的に磨耗している。底部は刷毛目整形後、範なでがなされ、中央部に刷毛目痕が残っている。器壁は薄く0.3cmほどである。

器内面は口辺部に横位の刷毛目痕がみられ、胸部は横なでがみられる。頸部はかすかな稜をなし、全体的に磨耗している。

色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含み、焼成は普通である。

7は住居址中央部の覆土から出土した台付變形土器の台部で、現存部は約半ほどである。現高5.6cm・台部径10.4cmほどで、接合部から外反して開いている。

器外面は接合部から裾部に斜位の刷毛目整形がみられ、器内面は太い刷毛目痕が横位あるいは斜位にみられる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通であるが火気をうけている。

8は7と同じように台付變形土器の台部で、炉址の南側の覆土から出土している。現高5.3cm・台径7.3cmほどで、接合部からやや内側して開いている。

器外面は肩下端に刷毛目痕がみられ、接合部には刷毛目状工具の圧痕が認められる。台部は縦位の範なで整形後、裾部に横なでがなされている。

器外面は全体的になで整形がなされ、一部輪積痕が認められる。

胴部と台部の接合は、台部をはめこんで接合している。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英を含み、焼成は良好である。

9は北東コーナー部の覆土から出土した器台形土器の脚部で、現高7.1cm・脚径12.8cmほどである。接合部から大きく開き、中央孔は直径1.3cm、脚部の孔は3孔で直径1.3cmほどである。

器外面には縦位の施磨きがみられ、器内面は横なで整形がなされている。

色調は明褐色を呈し、黒斑が認められる。胎土中に砂粒・石英を含み、焼成は良好である。

10は東壁よりに破片で出土した大型の壺形土器の胴部で、現存部は約半ほどである。現高22.5cmで胴部最大径は48cmほどで、器壁は厚く1.1cmほどである。

器外面は上部から最大径部まで幅2.5～3.0cmほどの刷毛目状工具による横位の整形がみられ、下部は上部とは異なる整形具による横位および斜位の刷毛目整形がなされている。さらにその下部には縦位の刷毛目整形がみられ、一部に範削りを残している。

器内面には横位の範削りがみられ、部分的に輪積痕が認められる。

色調は褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・礫等を含み、焼成は堅緻にて良好であるが、器内外面とも凹凸がみられる。

第7号住居址

本址からの遺物の出土量は少なく、すべてが土師式土器でいずれも破片で出土している。

土器（第51図1～3）

1は住居址中央部の床直上から出土した手捏ね土器で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ ほどである。口径2.3cm・現高4.5cm・底径3.0cmで、底部は大きく、口縁部は頸部から直立ぎみに立ちあがる小型の壺形土器である。

器内外面とも手捏ねのため明確な整形痕は認められず、器外面の頸部には指頭痕がみられ、胴部下端部には範削りが認められる。

色調は黒色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

2は南東コーナー部近くの覆土中より出土した底部で、現高2.7cm・底径3.7cmの底部中央部がややくぼんでいる。

器外面は胴下端部にかすかな斜位の刷毛目痕が認められ、器内面は底に横位の刷毛目整形がなされている。

色調は外面黒褐色を呈し、内面は赤褐色をなしている。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

3は2と同様に底部で、北西コーナー部の覆土中から出土し、現高4.8cm・底径6.0cmである。底部中央がややくぼみ、胴部は底から内側して開いている。

器外面は胴下端部に縦位の刷毛目痕が認められ、器内面は一部剥落し、横なで整形がなされている。

色調は灰褐色を呈し、一部に黒斑がみられる。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

第8号住居址

本址からの遺物の出土量は少なく、高壺形土器のほかはほとんどが破碎した土師式土器で、南壁よりに砥石が出土している。

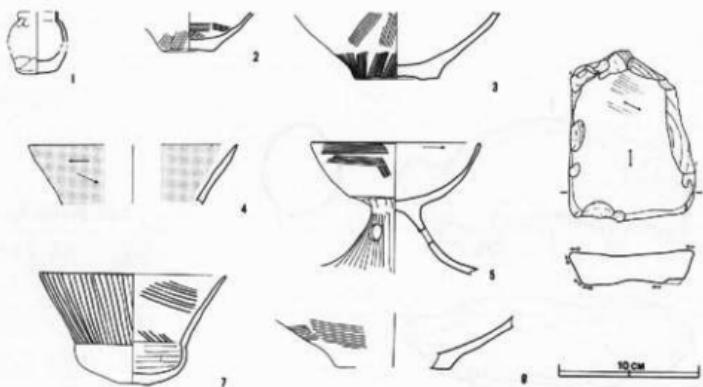
土器（第51図4～5）

4は南コーナー部付近の覆土上層から出土した壺形土器の口縁部で、現存部は約 $\frac{1}{2}$ ほどである。口径14.8cm・現高4.3cmで、頸部から口縁部は大きく外反して立ちあがっている。

器外面は口辺部に横位の細かい刷毛目痕が認められ、赤色塗料が塗付されている。器内面にも横位の刷毛目痕が認められ、器壁が剥落している。また、器外面同様に赤色塗料の塗付が認められる。

色調は暗赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

5は東コーナー部の床から出土した高壺形土器で、脚部を欠損している。口径12.1cm・現高



第51図 第7・8・9号住居址出土遺物

9.3cmで、壺部は内縁して口縁部が立ちあがり、脚部は接合部から大きく開いている。脚部には直径1.2cmほどの孔が3ヶ所にみられる。

器外面は壺部の口辺部に横位の細かい刷毛目痕がみられ、接合部近くに稜をなしている。稜下部から脚部にかけては縦位の範磨きがなされている。

器内面は壺部に横なで整形がみられ、底付近は器壁の剥落が顕著である。脚部も剥落がはげしく、なで整形が認められる。

色調は赤褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

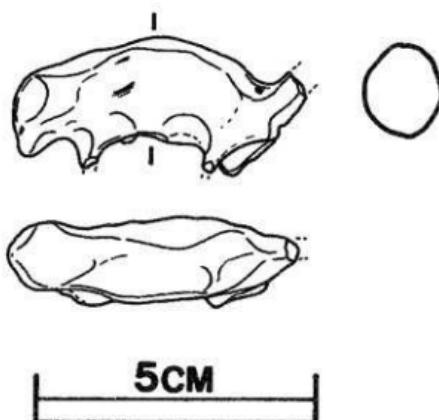
石製品（第51図6）

6は磁石で、南壁よりの中央部の床面から出土している。材質は安山岩で、長さ12.2cm・幅約9.0cm・厚さ1.8～2.3cmほどで、重量は360gである。

表裏面とも中央部がややくぼんでおり、斜位あるいは縦位の擦痕がみられる。頂部および側面の一部は破損し、擦痕は側面にも認められる。

第9号住居址

本址は南西部に墓壙群が複合し、内部からは多くの焼土と炭化材が検出され、火災に遭遇した住居址である。しかし、遺物の出土はきわめて少なく、7の环形土器のほかすべての土師式土



第52図 第9号住居址出土土製品

器は破碎されたものである。特異な遺物として東コーナー部の貯蔵穴上面から動物形土製品が出土している。

土器(第51図7~8)

7は北西壁中央部のやや北コーナー側の壁溝上に出土した完型の壺形土器である。口径13.2cm・器高7.9cm・底径2.0cmで、口縁部は頸部から大きく外反して開き、底部は小さく中央がややくぼんでいる。

器外面は口辺部に縱

位の刷毛目痕がみられ、その整形後に横なで整形がなされている。胴部は横位あるいは斜位の磨きがみられる。

器内面は口辺部に斜位あるいは横位の刷毛目痕がみられ、その整形後に横なで整形がなされている。胴部は横位の磨きがなされている。

色調は黒褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

8は東コーナー部の床から出土した底部で、現存部は $\frac{1}{4}$ ほどである。底径約8.2cm・現高4.0cmで、胴部は底部から大きく開いている。

器外面には横位の刷毛目痕およびなで整形がみられ、やや光沢をおびている。器内面には横なで整形がみられる。

色調は黒色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

土製品(第52図)

動物形土製品は東コーナー部の貯蔵穴上面から出土し、長さ5.3cm・高さ2.4cm・幅1.4cmほどである。

頭部はやや下向きをなし、尾部先端は欠損しているが上向きにある。背はやや丸味を呈し、脚は部分的に欠損しているが4足である。全体的に指によるなで整形がなされ、脚および尾部は貼付されたものである。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は良好である。

この土製品の形状から想定される動物は、「モグラ」・「猪」などであろうか。

第10号住居址

本址からの遺物の出土量は多く、東北壁よりの床面に多くが出土しつつとんどが土師式土器である。土師式土器も完型で出土したものは手捏ね土器だけで、ほかはすべて破碎して出土している。土師式土器のほかに土玉が南コーナー部より出土し、礫器も出土している。

土器（第53図1～10）

1は東北壁中央部のやや東コーナー部によった床面から出土した變形土器でほぼ完型である。口径18.9cm・器高23.2cm・底径6.0cmで、口縁部は頸部から外反して立ちあがり、ゆがんでいて位置によって法量が異なる。胴部はやや球状を呈し、胴部最大径は23.8cmで底部は小さい。

器外面は口唇部が棱をなし、口辺部に縱位の刷毛目整形がなされている。胴部は斜位の刷毛目整形後、間隔をおいた縱位の刷毛目整形を行い、文様的構成をなしている。胴下端部には範なでがみられ、器面全体に煤の付着が認められる。

器内面は口辺部に斜位の刷毛目痕がみられ、頸部は棱をなし、胴部にはなで整形がなされている。また、底には煤が付着している。

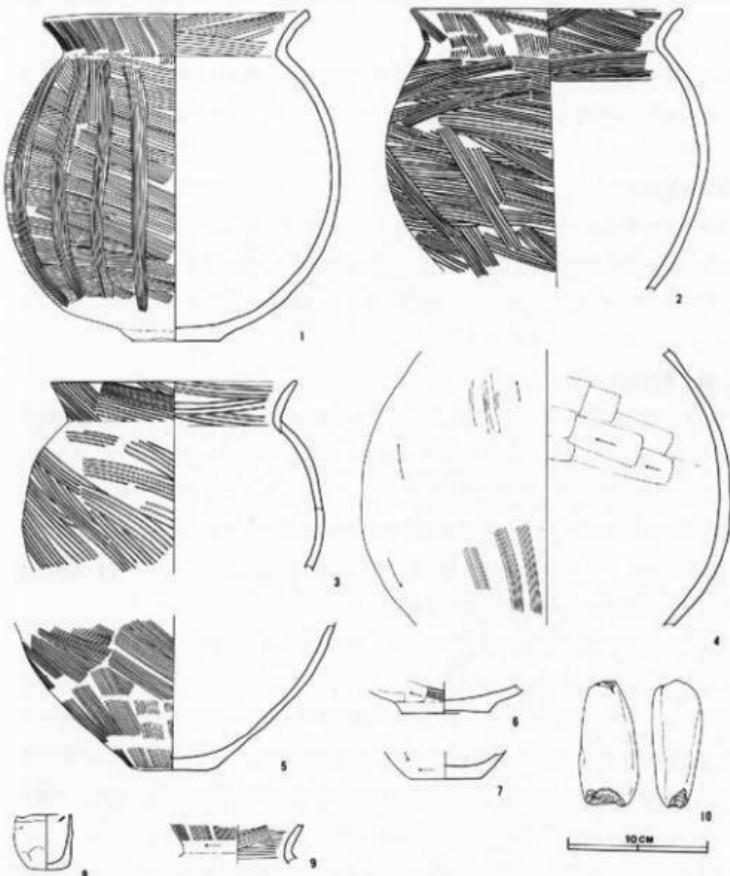
色調は胴部以上は暗褐色を呈し、胴下部は黒褐色をなし、かなりの煤が器面に付着している。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

2は東北壁中央部のやや東コーナー部の床面および東コーナー部の床面に破碎して出土した變形土器で、底部を欠損している。口径19.4cm・現高20cmで、口縁部は頸部から「く」の字状に開いて立ちあがり、頸部から胴部へゆるやかに移っている。胴部の最大径は23.0cmほどである。

器外面は口辺部に縱位の刷毛目痕がみられ、部分的に斜位の刷毛目痕もみられる。肩部には横位の刷毛目整形がなされ、胴部中段より下部は斜位の刷毛目整形がみられる。刷毛目痕は太く粗いものである。

器内面は口辺部に弧状をなす横位の刷毛目痕がみられ、頸部下には横位の刷毛目痕が認められ、胴部はなで整形がなされている。

色調は暗茶褐色を呈し、一部黒斑が認められる。胎土中には砂粒・石英・スコリア等が含まれ、焼成は堅緻にて良好である。



第 53 図 第 10 号 住居址 出土 遺物

3 は東北壁中央部のやや東コーナー部よりの床面から出土した壺形土器で胴部中段以下を欠損し、現存部は約 26 ほどで、胴部最大径は 21.4cm である。

器外面は口辺部に斜位の太い刷毛目痕が認められ、胴部中位にも同様の整形痕が認められる。

器内面は口辺部に横位の太い刷毛目痕が認められ、頭部には輪積痕がみられる。胴部は全体的

になで整形がなされている。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

4は前述の3の變形土器と同地点で出土した變形土器の胴部で、現存部は約1/3ほどである。現高は19.5cmで球状を呈し、最大径は26.3cmほどである。

器外面は胴上部に横位の刷毛目整形がみられ、その後縦位の箆なで整形をしている。下部は部分的に縦位の刷毛目痕が認められ、箆なでも認められる。

器内面は上部に斜位の箆なで整形がなされ、下部には横なで整形が認められる。

色調は暗褐色を呈し、一部赤褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

5は東コーナー部の床面から出土した變形土器の底部で、現存部は約1/3ほどである。底径6.0cm・現高10.6cmで、胴部は底部から内寄ぎみに大きく開いている。

器外面は胴下部に斜位の刷毛目整形がみられ、底部は箆削りがなされている。また、全体的に煤が付着している。器内面はなで整形がなされている。

色調は外面黒褐色を呈し、内面は暗褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

6はが址の東側の床面から出土した底部で、底径6.1cm・現高2.1cmである。

器外面は胴下端が段をなし、横位の刷毛目整形後、箆削りがなされている。底部には刷毛目痕が部分的に認められる。器内面はなで整形がなされている。

色調は外面暗茶褐色をなし、内面は黒褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

7も底部であり、南コーナー部付近の覆土から出土している。底径4.8cm・現高2.0cmほどで、胴下端は底部から内寄ぎみに外反している。

器外面は下部に縦位の箆なで整形がみられ、下端は横なで整形が認められる。底部は箆整形がなされ、器面には煤が付着している。器内面は器壁が剥落し、箆なで痕が認められる。

色調は外面黒褐色を呈し、内面は褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

8は東コーナー部の貯蔵穴内部から出土した手捏ね土器で、完型品である。口径3.8cm・器高3.9cm・底径2.8cmほどで、器形は粗雑である。手捏ねのため指頭痕がみられ、下端部に顕著に認められる。整形はほとんどが指なである。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

9は北東壁中央部の東コーナー部よりの床から出土した變形土器の頭部で、現存部は約1/3ほどである。現高は2.5cmで口唇部および肩部以下を欠損している。

器外面は頸部に横なで整形が認められ、口辺部の縦位の刷毛目痕が消されている。器内面には縦位の刷毛目痕が認められる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

土製品（第64図4）

土玉は南コーナー部の壁よりの床に出土し、長さ2.0cm・径2.4cmほどで重量は14gの小型のものである。中央孔は直径0.6cmほどで、器面は指顎による整形が認められる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

石器（第53図10）

石器としては、北コーナー部の東よりの壁溝上面から出土した礫器がある。材質は安山岩で、長さ9.0cm・幅4.2cm・重量190gで、長楕円形の自然礫の頂部および基部に打撃痕がみられ、基部はやや扁平状を呈している。

第11号住居址

本址からの遺物の出土量は多く、住居址の中央部および東南壁に出土している。完型土器も多く、いずれも土師式土器である。

土器（第54図1～13、第55図14～16）

1は住居址中央部西よりの床直上に出土した器台形土器で、脚部を欠損している。口径6.5cm・現高5.0cmで、器受部はやや内傾して直立ぎみに立ちあがり、中央孔は直径0.7cmほどで長く、脚部は大きく開いている。脚部の孔は3孔であろう。

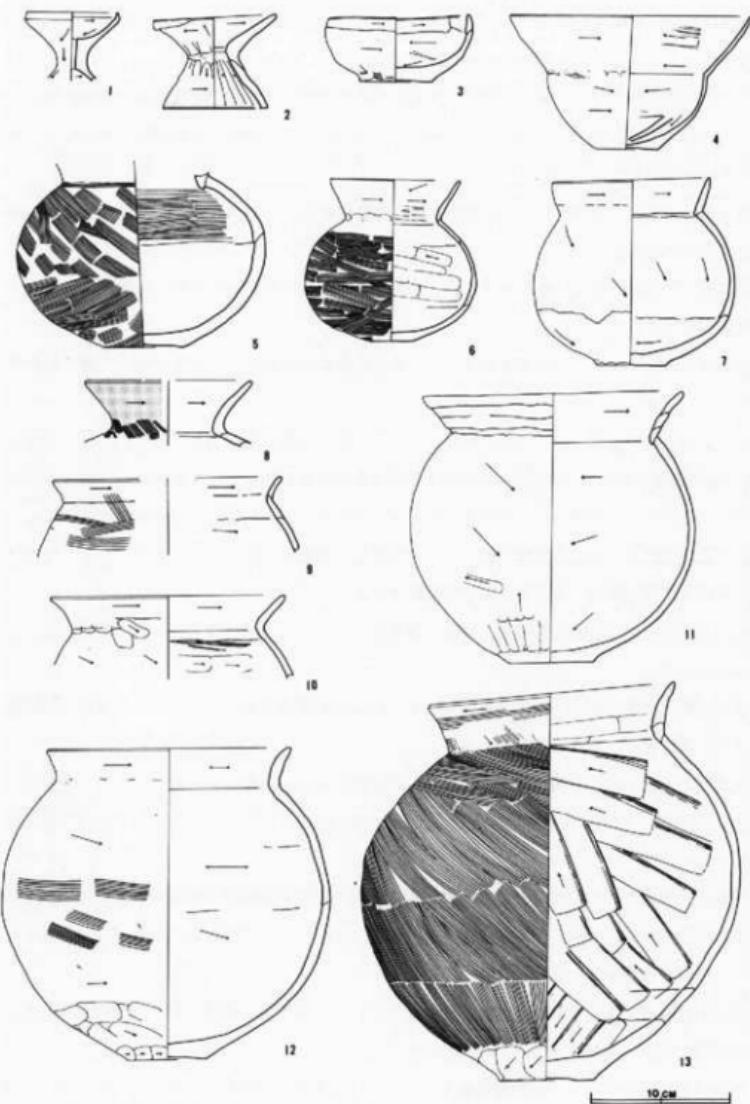
器外面は器受部の口辺部に横なで整形がみられ、器受部から脚部にかけて斜位の窓なで整形がなされている。器内面は器受部の口辺部に横なで整形がみられ、器受部は斜位の窓なで整形が認められる。

色調は茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は堅緻にて良好である。

2は炉址の北部に接した床面より出土したほぼ完型の器台形土器である。口径8.9cm・器高6.7cm・脚部径7.5cmで、器受部および脚部とも同じ様な形状をなし、器受部は大きく開いている。また、口辺部は一部折返し状をなしている。

器外面は口辺部の折返しの部分に横なでがみられ、器受部は窓整後、横なで整形および縦位の窓なで整形がみられる。脚部は縦位の窓なで後に横なで整形がなされている。

器内面は器受部に横なで整形がみられ、脚部には窓状工具による横位の整形がみられる。



第 54 図 第 11 号 住居 址 出土 遺 物 (1)

色調は外面暗茶褐色を呈し、内面黒褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は普通であるが、二次的に火氣をうけている。

3はが址の西側の覆土下層から出土した塊形土器で完型品である。口径10cm・器高4.7cm・底径5.2cmで、口縁部にむかって底部から内側して立ちあがり、口辺部には輪積痕がみられる。底部は中央部がややくぼんでいる。

器外側は輪積痕の凹凸があり、全体的に横なで整形がなされている。底部付近には斜位の刷毛目痕が認められる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、底部にかけてなで整形がなされ、一部箆状工具による整形痕が認められる。

色調は茶褐色を呈し、一部黒色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

4は東壁のやや南東コーナー部の床面に出土したほぼ完型の塊形土器である。口径17.2cm・器高9.9cm・底径4.4cmで、口縁部は頸部から内側に大きく開いて立ちあがり、底部は中央部がややくぼんでいる。器壁はいずれも薄く0.2～0.3cmほどで、全体的に器面は磨耗している。

器外側は口辺部に横位の箆磨きがみられ、頸部には部分的に箆なで痕が認められる。下部は器面の磨耗のため不鮮明であるが、横位の箆磨きである。

器内面は口辺部に横なで整形後、横位の箆磨きがみられ、頸部は接をなし、下部には箆なで整形が認められる。

色調は外面褐色を呈し、一部黒褐色をなし、内面は明茶褐色を呈している。胎土中には砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

5は3の塊形土器の東側の覆土から出土した塊形土器で、口縁部を欠損している。現高13.1cm・底径5.6cmで、胴部は扁平な球状をなし、最大径は中位で17.7cmほどである。底部は中央部がくぼんでいる。

器外側は頸部から口辺部にかけて箆磨きがみられ、頸部には横なで整形がみられる。胴部は肩部から中段まで斜位の刷毛目整形がなされ、下部は上部とは逆の斜位刷毛目整形がなされている。また、底部には箆整形が認められる。

器内面は頸部になで整形がみられ、段をなしている。胴上部は横位の刷毛目整形がなされ、下部は器壁の剥落が顕著である。

色調は暗褐色を呈し、一部明褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

この塊形土器の成形は、口縁部と胴部を別に作製しており、胴部に口縁部をはめこんで作られた形状を示している。

6は住居址中央部のやや南側の覆土から出土した小型壺形土器でほぼ完型をなしている。口径9.3cm・器高11.5cm・底径2.9cmで、口縁部の現存部は約ほどで、頸部から「く」の字状に開いて立ちあがり、胴部は球状をなして底部は小さい。器壁は全体的に薄く、器面は磨耗している。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部には押圧痕が認められる。胴部には横位の刷毛目整形がなされている。

器内面は斜位および横位のなで整形がみられ、一部刷毛目痕が認められる。胴部には部分的に輪積痕がみられ、横位あるいは斜位の範整形がなされている。

色調は暗茶褐色を呈し、一部黒茶褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

7は南東コーナー部の貯蔵穴の上部に出土した完型の広口壺形土器である。口径11.2cm・器高13.5cm・底径4.4cmで、口縁部は頸部から内脛ぎみに直立して立ちあがり、胴部は球状をなし、胴部中位より下に最大径があり、14.0cmほどである。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、一部に整形具の圧痕がみられる。胴部には斜位の範磨きの後になで整形がなされている。底部は窪なでが認められる。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴上部は剥落が顕著であるが縦位のなで整形がみられ、輪積痕が部分的に認められる。

色調は外面暗褐色を呈し、底部は赤褐色をなしている。内面は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は良好である。

8は北東コーナー部付近の覆土から出土した壺形土器の口縁部で、現存部は約ほどである。口径11.8cm・現高7.2cmで、頸部から外反して大きく開いている。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、一部赤色塗料が塗付されている。頸部には斜位の刷毛目整形がみられる。器内面の口辺部には横なで整形がなされている。

色調は暗赤褐色を呈し、胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

9は炉址周辺の覆土から出土した壺形土器の口辺部で、現存部は約ほどである。口径16.1cm・現高5.3cmで、口縁部は頸部から小さく外反して立ちあがるやや薄手の土器である。

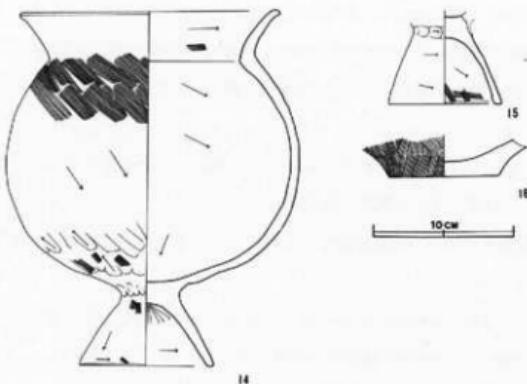
器外面は口辺部に刷毛目整形後に横なで整形がなされ、頸部から肩部にかけても横位の刷毛目整形後に横なで整形がなされている。刷毛目痕は部分的に残り、頸部には輪積痕が認められる。

器内面にも輪積痕が認められ、いずれも横なで整形がなされている。

色調は赤褐色をなし、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は堅緻で良好である。

10は北西コーナー部よりの床面から出土した壺形土器の口縁部で、11との壺形土器と同地点に出土した。口径16.5cm・現高5.9cmで口縁部は頸部から外反して開いている。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、一部輪積痕が認められる。頸部には斜位の範削りがな



第55図 第11号住居址出土遺物(2)

され、肩部は不鮮明であるが一部に斜位の刷毛目痕が認められる。

器内面は口辺部および肩部に横なで整形がなされ、頸部には刷毛目痕が認められる。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

11は北西コーナーよりの床面から10と共に伴したほぼ完型の變形土器で、口径18.5cm・器高19.0cm・底径6.0cmである。口縁部は頸部から外反して開き、胴部はやや球状を呈し、最大径は20.3cmである。口辺部には輪積痕が顯著にみられ、胴部の成形もそれほどなめらかなものではない。

器外面は口辺部に輪積痕が3段ほどみられ、整形は粗雑で横なで整形がなされている。頸部には部分的に範痕が認められる。胴部は全体的に刷毛目整形の後に斜位の範なで整形がなされ、部分的に刷毛目痕が残る。器面の部分には煤の付着が認められ、底部は範なでがなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、外面のように輪積痕は認められない。胴部は横あるいは斜位のなで整形がなされている。

色調は暗褐色を呈し、一部茶褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通で、特に胴下部に火気をうけている。

12は住居址中央部のやや南東部のP 5から出土したほぼ完型の變形土器である。口径16.9cm・器高22.2cm・底径5.6cmで、口縁部は頸部から直立ぎみに外反して立ちあがり、胴部は球状をして最大径は23.2cmである。底部は中央部がやくぼんでいる。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、頸部から肩部にかけて斜位のなで整形がみられる。胴部中位から下部は横位あるいは斜位の刷毛目整形の後に範磨きがなされ、下端部は範削りがなさ

れている。底部には窓なでがみられ、器面全体には煤が付着している。

器内面は口辺部に窓の横なで整形の後に横なで整形がなされ、胴部は全体的になで整形がなされている。底部には煤が付着している。

13はが址の南の床面および覆土から出土したほぼ完型の變形土器で、口径17.7cm・器高28.1cm・底径6.8cmで、全体的にややゆがみがみられる。口縁部は直立ぎみに開いて立ちあがり、胴部は球状をなしている。胴部最大径は27.0cmで、底部は中央部がくぼんでいる。

器外表面は口辺部に横なで整形の後に横位の刷毛目整形がなされ、頸部にかけては斜位の刷毛目整形痕がみられる。肩部から胴下部まで大きく4段の刷毛目痕がみられ、下端は窓削りがなされている。

器内面は口辺部に横なで整形がみられ、胴部は底から上に窓削りがなされている。整形痕の片側に深い沈線状の擦痕が残り、整形具の切断の際に残ったものが深い沈線状の擦痕となつたものであろう。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

14はが址の東側の床に接して出土した完型の台付變形土器である。口径18.1cm・器高25.2cm・台部径9.5cmで、口縁部は頸部から外反して立ちあがり、胴部は球状をなしている。台部は接合部から裾部へやや内彎ぎみに開き、全体の成形は良好である。

器外表面は口辺部に部分的に刷毛目痕が認められ、刷毛目整形の後に横なで整形がなされている。頸部から肩部にかけては斜位の刷毛目整形がなされ、胴部中段にも不鮮明ながら斜位の刷毛目痕が認められる。胴部下端には下から上への窓なで整形がみられ、台部は縦位のなで整形がなされている。器面には全体的に煤の付着が認められる。

器内面は口辺部に横なで整形がなされ、部分的に刷毛目痕が残っている。胴部は全体的になで整形がなされ、台部裾は横なで整形がみられる。

色調は外面黒褐色を呈し、台部は茶褐色をなしている。内面は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

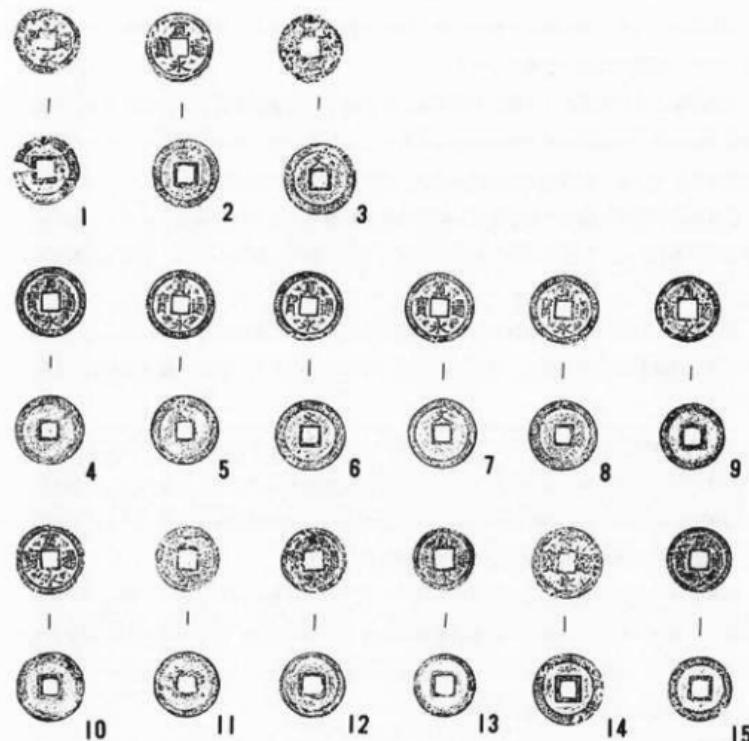
15は北壁中央部のやや西よりの覆土から出土した台付變形土器の台部である。現高6.2cm・台部径8.0cmで、接合部から裾部へやや内彎ぎみに開き、台部をはめこんだものと考えられる。

器外表面は接合部に窓削りがみられ、脚部は横位あるいは斜位のなで整形がなされている。器内面は脚部になで整形がみられ、裾部には刷毛目痕が認められる。

色調は明茶褐色を呈し、胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

16は南東コーナー部の覆土から出土した底部で、現存部は約1/2ほどである。現高2.8cm・底径7.8cmで、底部は大きく、胴部へと開いている。

器外表面の胴下端は縦位の刷毛目痕がみられ、底部は窓削りがなされている。器内部にはなで整



10 CM

第 56 図 土 壤 出 土 遺 物 (1)

がみられる。

色調は外面茶褐色を呈し、内面は黒褐色をなしている。胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は良好である。

2. 土壌出土の遺物

第4号土壌（第56図16）

本址の覆土中から砾石が出土している。長さ6.1cm・幅3.4cm・厚さ1.4cmほどで長方形状を呈している。完型品ではなく、材質は硬質の凝灰岩で重量は44gほどである。

表面の擦痕はそれほど顕著ではなく、側面にも擦痕が認められ、裏面にはのこぎり状のものの切断痕が認められる。

本土壌覆土内からの出土品であるが、第3号住居址に伴う砾石とも考えられる。

第8号土壌（第56図1～3）

本土壌の底面近くから出土した遺物は人骨のほかは貨幣であり、「寛永通宝」が5枚である。1・2はそれぞれ出土し、3は3枚が重なって出土している。

1は直径2.3cmで銘はやや不鮮明であり、裏面は無地である。2は直径2.4cmで銘は鮮明であり、裏面は無地である。3は3枚が重なったもので、上部の銘は不鮮明であり、下部のものの裏面には「文」の銘がみられる。上部の直径2.3cm、下部のものは直径2.5cmほどである。

第9号土壌（第56図4～9）

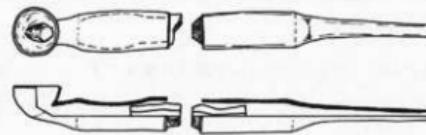
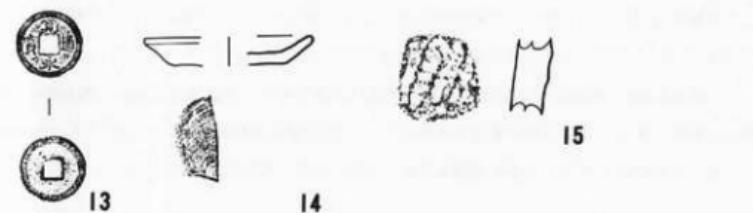
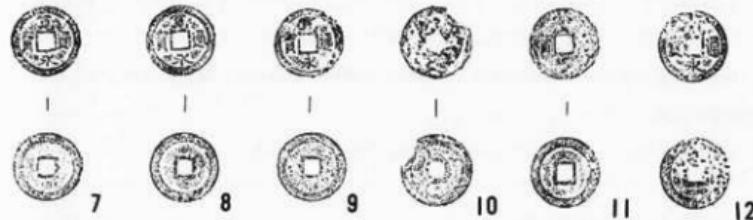
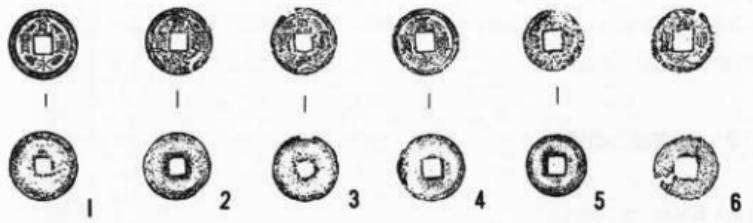
本土壌から出土した遺物も第8号土壌と同様に人骨のほかは貨幣が6枚である。いずれも「寛永通宝」で底部近くから出土したものである。

4は直径2.5cmで裏面は無地であり、5は直径2.4cmで裏面は無文である。6は直径2.4cmで、裏面に「文」銘があり、7は直径2.5cmで6同様に「文」銘がみられる。8は直径2.4cmで裏面は無地であり、9は直径2.3cmで裏面は無地である。これらはいずれも保存度がよく、鏽化はそれほどすんでいない。

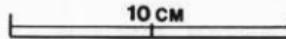
第10号土壌（第56図10～15）

本土壌からの出土遺物も人骨のほかは貨幣で、「寛永通宝」が6枚出土している。10～13は重なって出土し、14・15はやや離れて出土している。

すべて裏面は無地で、直径は10から順に2.4cm・2.25cm・2.2cm・2.5cm・2.3cmである。保存度



16



第 57 図 土 墓 出 土 遺 物 (2)

は普通で、それほど鏽化はすすんでいない。

第11号土壤（第57図1～6・16）

本土壤からの出土遺物は、人骨のほかに貨幣・煙管である。

貨幣は6枚すべて「寛永通宝」で、1～3は重なり、4・5と別に出土し、6も別に出土したものである。いずれも裏面は無地で、直径は2.4cm・2.3cm・2.35cm・2.3cm・2.1cm・2.2cmである。保存度は普通であるが、5の表面の鏽化がややすみ、6は割れている。

16は煙管で先端部の長さ5.3cm・径1.25cmほどをなし、皿部の直径は1.7cmほどである。吸口部との接合は縫によつたもので一部現存している。管の上面は敲打によるへこみを示している。吸口部の長さ8.1cm・直径1.25cmで、最小径は0.4cmほどである。吸口の接合部にも縫が現存している。煙管は黄銅製で、表面には緑鏽が顕著にみられる。

第13号土壤（第57図13・14）

本土壤からの出土遺物は人骨のほか貨幣が6枚と土師質土器片である。

貨幣は13のほかは鉄錢4枚にはさまれた銅錢で図化することはできず、13の直径は2.3cmで裏面は無地である。鉄錢は鏽化がすんでおり、表裏を明確にすることはできない。

14は覆土上層から出土した土師質土器で、現存部は1/4ほどである。口径6.0cm・器高1.0cm・底径3.9cmで、右回転のロクロ整形がみられ、底部には回転糸切り痕が認められる。

色調は明褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

第14号土壤（第57図7～12）

本土壤からの出土遺物は、人骨のほかに貨幣が6枚で、いずれも「寛永通宝」である。裏面は11に「文」銘があるほかすべて無地である。直径は2.3cm・2.3cm・2.35cm・2.5cm・2.4cm・2.5cmである。10の一部が破損し、保存度はそれほど悪いものではない。

第42号土壤（第57図15）

本土壤からは15以外に出土遺物はなく、覆土中から検出されたものである。

地文をR_Lの縄文とした土器片で、色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

3. 溝出土の遺物（第58図）



第58図 溝出土の遺物

溝は1号・2号の2本が調査されているが、

第2号溝からは全く出土遺物が認められず、

H 7 b 8 の第1号溝の底面から出土した手捏

ね土器が唯一のものである。

口径5.3cm・器高4.0cm・底径2.6cmで、底部から口縁部に開いて鉢状をなしている。

器外面は口辺部になじみ形がみられ、下部には指頭痕が認められる。器内面はなじみ形がなされている。

色調は灰褐色を呈し、一部黒褐色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

4. 塚出土の遺物

第4号塚の盛土中から土師質土器が7個ほど出土し（第44図）。1～6は一ヶ所に並び、7はやはりなれて出土した。また、上面から貨幣が1枚出土している。

土師質土器（第59図1～7）

1は6個が並んで出土した中の東から出土し、口径8.3cm・器高2.3cm・底径4.3cmである。これらの土師質土器の中では最大のものである。器面は内外面とも右回転のロクロ整形がなされ、底部には回転糸切り痕が認められる。

色調は暗赤灰褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア・雲母等を含み、焼成は普通である。

2は1と3の間に出土し、口径5.6cm・器高1.4cm・底径3.3cmである。器面は内外面は右回転のロクロ整形がなされ、底部には回転糸切り痕が認められ、内面の一部には油煙の付着が認められる。

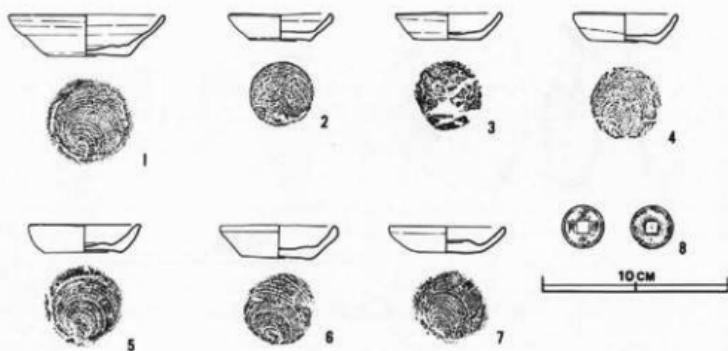
色調は赤灰褐色を呈し、胎土中には砂粒等を含み、焼成は良好である。

3は2の上に一部重なる状態で出土し、口径5.7cm・器高1.4cm・底径3.5cmである。器壁の内外面とも右回転のロクロ整形がなされ、底部には回転糸切り痕が認められる。

色調は赤灰褐色を呈し、胎土中には砂粒等を含み、焼成は普通である。

4は5および3の間に出土し、口径5.6cm・器高1.5cm・底径3.6cmである。器面は内外面とも右回転のロクロ整形がなされ、底部には回転糸切り痕が認められる。

5は6の南に出土し、口径6.0cm・器高1.5cm・底径4.1cmである。器面は内外面とも右回転のロクロ整形がみられる。



第59図 第4号塚出土遺物

色調は灰褐色を呈し、胎土中には砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

6は5の北に出土し、口径6.2cm・器高1.7cm・底径3.8cmである。器面は内外面とも右回転のロクロ整形がなされ、底部には回転糸切り痕が認められる。

7は1～6とは50cmほど西に離れて出土し、口径6.3cm・器高1.4cm・底径3.5cmである。器面は内外面とも右回転のロクロ整形がなされ、底部には回転糸切り痕が認められる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

貨幣（第59図8）

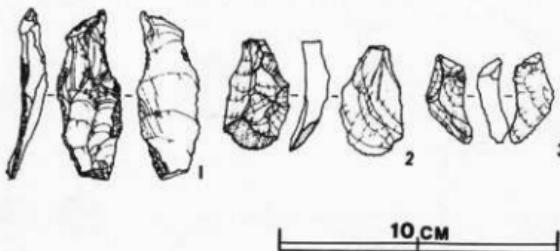
8は第4号塚の頂部のすぐ下に出土した「寛永通宝」で、直径2.3cmほどである。鋳化はそれほどすくんでおらず、裏面は無地である。

5. その他の遺物

(1)先土器時代の遺物（第60図）

刃器様の剥片および剝片で、台地縁辺部の肩部のH 7区から出土している。調査についてはかなり注意して実施したが、3点しか出土がみられず、縄文時代前期の土器が出土する層と同じ層中から出土している。

1は頁岩を用いた刃器様の縦長剝片で、主要剝離面にはプランティングがみられる。剝片の両側面の調整痕から刃部として使用したもので、長さ6.1cm・最大幅2.2cmである。



第60図 各調査区出土遺物(1)

2は安山岩の剥片で自然面を残し、各方面からの剥離面を残し、長さ3.9cm・最大幅2.2cmである。

3は2と同様に安山岩の剥片で長さ3.2cm・最大幅1.3cmほどである。

(2)縄文時代の遺物

縄文式土器（第61図）

本遺跡からの縄文式土器の出土例は少なく、いずれも小片であり15片ほど出土している。これらは文様等から二群に分類することができる。

第1群土器（第61図1～4）

本群は貝殻腹縁によって文様を施された土器で、調査地域の南から北に入りこんだ支谷の東側の台縁辺部にその分布が認められたが、出土量も少なく、遺構等も検出されていない。

これらは前期後半に編年される浮島式系の土器に比定できる。

第2群土器（第61図5～15）

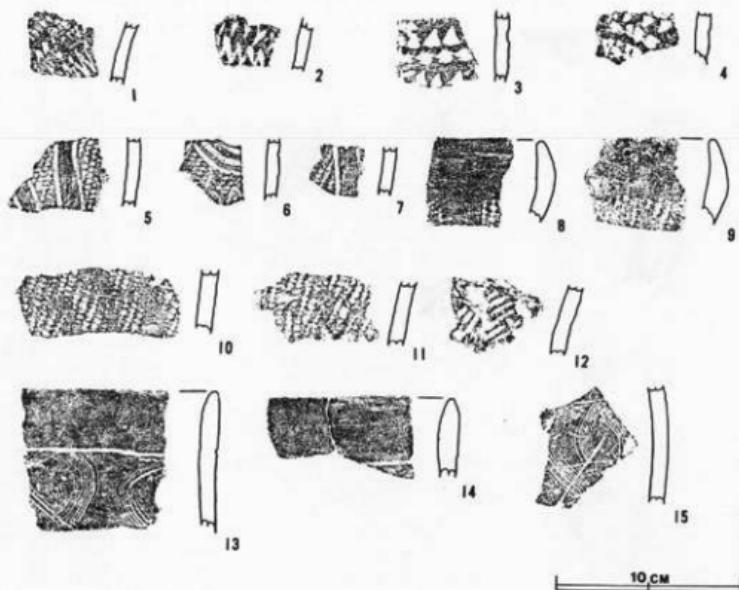
本群は中期末および後期初頭に比定される土器群で5～7と8～15では時間差が認められる。

前者は磨消縄文の手法がみられ、同一個体と考えられる。地文はR | Lで頸部以下の破片であり、焼成は良好である。

後者は8～10も同一個体と考えられ、口縁部は内彎して立ちあがり、口辺部は横位の斂などがなされている。体部にはR | Lの縄文がみられる。

11・12は胸部片で11はL | R・12はR | Lの地文がみられる。

13～15は同地点で出土した同一個体片であり、口縁部は直立して立ちあがり、口辺部に無文帯があり横走する沈線によって文様区を分けている。体部には縦位の櫛目波状文が施文されている。



第61図 各調査区出土遺物(2)

これらは、前者を中期末、後者を後期初頭の土器に比定でき、13～15は第1群土器と同じ地域に分布が認められた。

(3)古墳時代以降の遺物

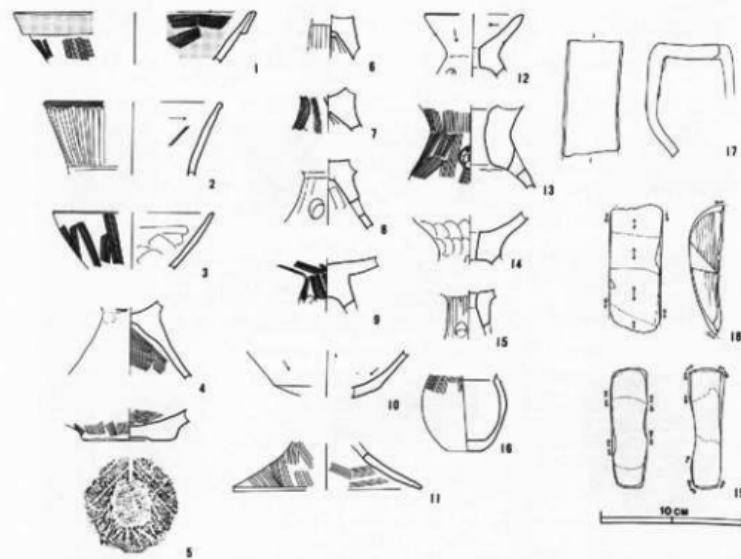
土師式土器 (第62図1～16)

1はD 5 h 0の第II層から出土した鉢型土器の口縁部で、現存部は約 $\frac{1}{3}$ ほどである。口径16.8cm・現高3.7cm、口縁部は複合口縁で内外口辺部に赤色塗料の塗付がみられる。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ、下部には縦位の刷毛目整形がみられる。器内面の口辺部には横なで整形がみられる。

色調は暗褐色を呈し、一部黒色をなしている。胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

2はE 5 b 6の第II層から出土した壺形土器の口縁部で、現存部は $\frac{1}{4}$ ほどである。口径12.3cm



第62図 各調査区出土遺物(3)

・現高5.3cmで、口縁部は頸部から直立ぎみに立ちあがっている。

器外面は口唇部に刷毛目痕がみられ、口辺部には縦位の蒐磨き、頸部には横なで整形がなされている。器内面は全体的に横なで整形がみられる。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は堅緻にて良好である。

3はE 5 d 2の第Ⅱ層から出土した堆形土器の口縁部で、現存部は $\frac{1}{2}$ である。口径11.1cm・現高4.0cmで、口縁部は頸部から内脣して立ちあがっている。

器外面は口辺部に縦位の細かい刷毛目整形がみられ、器内面は粗雑な蒐なで整形がなされている。

色調は茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は堅緻で良好である。

4はC 5 j 7の第Ⅱ層から出土した台付變形土器の台部で、現存部は $\frac{1}{2}$ ほどである。台部径8.5cm以上・現高5.5cmで、接合部から台部の破片である。

器外面は接合部に蒐なで痕がみられ、器内面の台部には斜位の刷毛目整形がなされている。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

5はE 7 a 1の第Ⅱ層から出土した底部で、底径6.4cm・現高2.2cmほどである。底部の中央部はくぼみ、木葉痕がみられる。

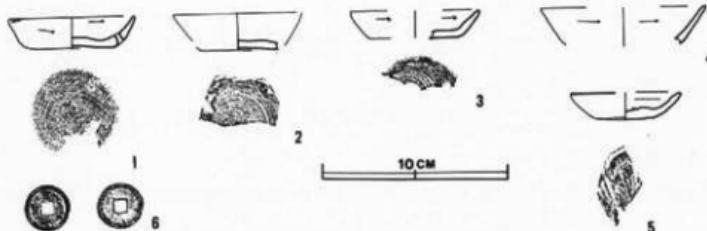
器外面は胴下部に縦位の刷毛目痕がみられ、下端部になで整形がみられる。器内面には横位の螺旋状の刷毛目痕が認められる。

色調は暗赤茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

6~9は高環形土器の接合部で、H 8 a 2・D 6 h 1・F 7 j 7・E 5 a 1の第Ⅱ層から出土している。

器外面に縦位の範磨きがみられるもの(6・8)と刷毛目痕がみられるもの(9)があり、7は刷毛目整形の後に範磨みがなされている。

器内面は範削りのもの(6・8)と刷毛目整形のもの(7)があり、9は環部に範磨きがみら



第63図 各調査区出土遺物(4)

れ、脚部にはなで整形がみられる。

8・9の脚部には孔が3孔みられ、8は直径1.2cmほどのものである。

色調は茶褐色および暗褐色を呈し、胎土中には砂粒・スコリア等を含み、焼成はほとんど良好である。

10はE 5 a 7の第Ⅱ層から出土した高環形土器の環部の破片で、現存部は約1/4ほどである。口辺部を欠損し、環部下端で稜をなして現高は3.5cmである。

器外面は斜位の範磨きがみられ、稜下部は範削り痕が認められる。器内面は器壁の剥落が顕著であるが斜位の範磨きがみられる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は良好である。

11はD 6 g 2の第Ⅱ層から出土した高環形土器の脚部で、現存部は約1/4ほどである。脚部径は13.3cm・現高3.5cmで、裾部は大きく開き、3孔と思われる。

器外面には斜位の刷毛目痕がみられ、器内面には横位の刷毛目痕がみられる。

色調は暗褐色を呈し、胎土中には砂粒を多く含み、焼成は普通である。

12はC 7 f 6の第II層から出土した器台形土器の器受部で、現存部は約半分ほどである。口径 6.9 cm・現高4.5cmで、脚の上部以上である。

器外面は器受部に縦位のなで整形がなされ、脚上部も同様である。中心孔は直径1.0cmほどで、器内面の器受部には横位の範磨きがなされている。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には砂粒・石英等を含み、焼成は普通で二次的な火氣をうけている。

13~15は器台形土器の接合部で、D 6 h 5・D 5 f 1・D 6 b 6の第II層から出土している。

13は現高5.9cmで、中心孔の直径は2.0cmである。脚部の孔は4孔で接合部のすぐ下部にある大型の器台形土器である。

器外面は器受部に縦位の刷毛目痕がみられ、脚部にも同様の整形痕がみられる。器内面の器受部および脚部ともなで整形がみられる。

14も脚部孔が4孔で、現高は3.8cmほどである。器外面には粗雑な範削りがみられ、器内面の器受部はなで整形がなされている。

15は脚部は細く中心孔は1.3cmほどである。器外面は脚部に縦位の細かい範磨きがみられ、孔は3孔で直径約1.0cmほどである。

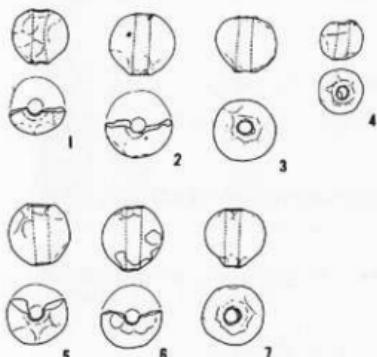
色調は15が褐色、13・14が暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。

16はD 5 f 6の第II層から出土した小型壺形土器で口縁部を欠き、現存部は約半分である。底径

2.3cm・現高5.4cmで、胴部最大径は5.9cmほどである。

器外面は頸部から肩部にかけて縦位の刷毛目整形がなされ、その後に範磨きがなされている。下部には範なで痕が認められる。器内面は全体的になで整形がなされている。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英等を含み、焼成は普通である。



10 CM

第64図 遺構および調査区出土土器

土製品（第64図5～7）

いずれも土玉で、第II層から出土している。

5はD 6 g 3から出土し、長さ3.3cm・直径3.4cmで $\frac{1}{2}$ ほどどの破片である。ほとんどが指で整形され、指頭痕が認められる。中央孔の直径は0.7cmほどで、重量は22gである。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

6はD 6 h 3から出土した $\frac{1}{2}$ ほどどの破片で、長さ3.5cm・直径3.3cmである。部分的に指頭痕がみられ、一部剥落している。中央孔の直径は0.8cmほどで、重量は21gである。

色調は黒褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリア等を含み、焼成は普通である。

7はF 6 b 1から出土した完型品で、長さ3.1cm・直径3.2cmである。一部になで痕がみられがほとんどが指による整形である。中央孔の直径は0.8cmほどで、重量は34gである。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒・スコリアを含み、焼成は良好である。

鉄製品（第62図17）

D 6 i 3から出土したもので、長さ8.2cm・幅3.9cm・厚さ0.7cm～1.0cmほどである。農具類の柄の部分の鉄金具と考えられ、やや中段の下部がはりだし、下でつぼまる形を示している。腐蝕はそれほど進んでいない。

石製品（第62図18・19）

18はG 7 f 0の第II層から出土した砂岩製の砥石で、長さ9.0cm・幅3.6cm・最大厚2.3cmである。研磨面は弧状をなして中央部が高く、側面には切断面を残している。表面および側面は擦痕が認められる。重量は110gほどである。

19はG 7 g 0の第II層から出土した凝灰岩製の砥石で、長さ8.4cm・幅2.5cm・最大厚2.5cmほどである。形状は長方形をなし、中央部がくぼんでいる。各面に擦痕が認められ、重量は80gほどである。

土師質土器（第63図1～5）

1はD 5 c 0から出土したほぼ完型品で、口径6.8cm・器高2.7cm・底径4.5cmで、底は回転糸切り痕がみられる。器内外面とも右回転のロクロによって整形がなされ、器外面の口唇部の一部に油煙が付着している。底近くには直径0.3cmほどの孔が焼成後に穿たれている。

色調は灰褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

2はD 6 h 6から出土した底部片で底径は4.2cmで回転糸切り痕が認められ、やや中央部がくぼんでいる。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

3はG 8 e 2から出土した約ほどの破片で、口径7.0cm・現高1.5cm・底径4.8cmである。右回転のロクロによって整形がなされている。

色調は暗赤茶褐色を呈し、胎土中に雲母片等を含み、焼成は良好である。

4はD 5 a 6から出土した約ほどの破片で、口径8.9・現高2.0cmである。器内外面に右回転のロクロ整形痕がみられ、色調は暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。

5はG 8 g 1から出土した約ほどの破片で、口径5.9cm・器高1.5cm・底径3.0cmである。底部には回転糸切り痕が認められ、器内外面は右回転のロクロ整形がなされている。

色調は暗赤褐色を呈し、胎土中に砂粒等を含み、焼成は普通である。

貨幣（第63図6）

G 7 d 0から出土した「寛永通宝」で直径2.4cmほどで、それほど鋳化は進んでいない。背面は無地である。

第5章 終 章

松葉遺跡において確認された遺構は、前述のように住居址11基・土壙41基・溝2基・塚4基である。発掘対象面積に比較すれば遺構数は多いとはいえないが、緑地保存帯や時間的な制約等から遺跡の全面積を完全に調査することはできなかった。

調査の概要および遺構・遺物等については前章において記述したが、調査によって示された事実と問題点について遺構ごとにまとめ、若干の分析を行い、さらに茨城県内の古墳時代前期における集落跡調査の動向について整理し、松葉遺跡の位置等について検討を試みたい。

住居址群について

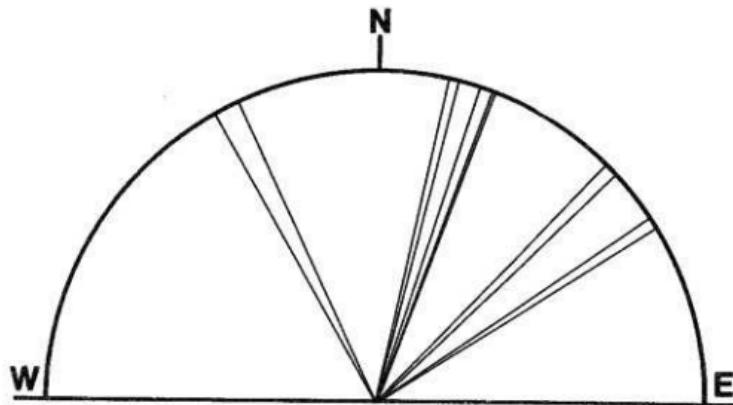
住居址群は南の小支谷をかこむように11基が確認され、南側の沖積地と台地上の平坦地を主な生活基盤として展開された集落跡であるといえる。

住居址群の構成を平面的にみれば、遺跡中史部の西側に第3・4・5・8・11号住居址、その北には第2・9・10号住居址、さらに南の台地縁辺部には第6・7号住居址がみられ、第1号住居址は中央部に検出された。また、主軸方向からみると第1・3・6・7・11号住居址、第2・5・8・9号住居址、第4・10号住居址の三群がそれぞれ類似性を示している。第一群の住居址群は小支谷をかこむように配列し、第2群および第3群は谷頭部の平坦地にその配列がみられる。平面形状の規模からみれば、第1群はやや小形の住居址を主とし、第2群はやや大形の住居址群、第3群は大形のものと小形のものがみられる。

平面規模が最大のものは第9号住居址で、長径7.3cm・短径6.2mで隅丸長方形を呈し、最小のものは第4号住居址の長径3.1m・2.93mである。このように、双方とも平面形状は隅丸方形形状を呈し、中央部に炉址がみられる。また、貯蔵穴がコーナー部にみられ、遺物の出土も貯蔵穴周辺から出土例が多い。主柱穴については、大形のものは四柱穴が明確であるのに対し、小形のものは不明で床面上に柱穴が存在していない可能性も考えられる。

これらの住居址のうち火災に遭遇した痕跡を残すものは、第1・2・5・6・7・9・11号住居址の7基で、各住居址とも各壁よりに焼土が検出され、第9号住居址の焼土量はかなり多いものであった。

遺物についてみれば、土師式土器は古墳時代前期に編年され、第11号住居址から多くの遺物の出土がみられ、次に第6号住居址があげられる。主なものとしては壺形土器で、そのほかの器種として台付壺形土器・壺形土器・杯形土器・高杯形土器・器台形土器等があげられる。特殊な遺



第 65 図 住居址主軸方向表

物としては第 9 号住居址から出土した動物形土製品があげられる。五領期の住居址内からの動物形土製品の出土例はほとんどなく、猪・モグラ・馬などを模したものであろうか。

そのほか、第 1・8 号住居址から砥石が出土し、調査区内からの出土もみられ、砥石の存在から鉄製農具類の常備も考えられ、南の沖積地や台地平坦部が水田や畠地として利用されたと考えられる。

このような調査結果から松葉遺跡は古墳時代前期の五領期の中頃に展開された集落跡で、一世代あるいは二世代以上を越えない期間の居住地であったといえる。この台地上を居住地として利用し、前述の南面低湿地に土木工事を施し、低い農業技術で水田經營されたと推定される。水田經營の經營単位としては世帯共同体が小規模な集落構成の基本単位であり、松葉遺跡で検出された住居址群等がその小規模な住居群の単位と考えられる。その中にも小規模な単位集団の分立的な段階が考えられよう。

松葉遺跡の集落はその居住期間が短かく、集落が廃絶された理由としては、単位集団の分立や火災の遭遇等による他地域への移住が考えられるのではないだろうか。

土壤群について

土壤は全体で 41 基が調査され、第 8~14 号土壤の近世墓壙以外は類似点など認められず、性格

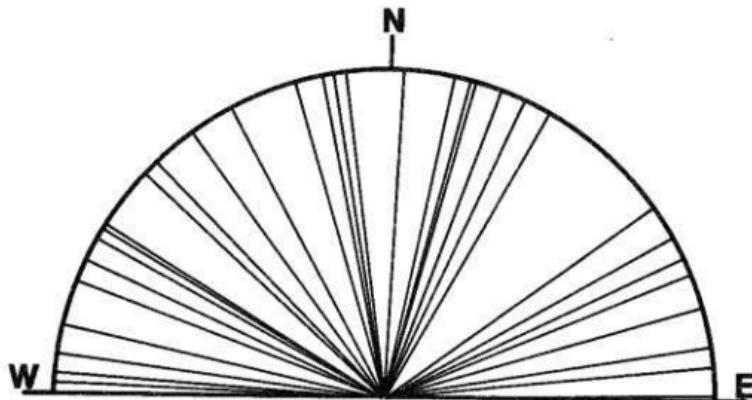
や時期等を明確にすることはできなかった。

各土壙についてみれば、平面形状が楕円形・不定楕円形のものが多く、近世の墓壙群のように円形で円筒状の断面形を呈するものはほとんどみられない。造構検出面から底面までの深さは30cm内外の浅いものが多く、1m以上深さを有するものは近世墓壙以外に第4・16・41号土壙等があげられる。

覆土内からの出土遺物はほとんどみられず、第4号土壙から出土した砥石片（第56図16）も第3号住居址内にあったものが、土壙が掘られた段階で覆土に混入したものと考えられる。

第9号住居址の南西壁部を切って複合している第8～14号土壙はいずれも近世墓壙で、底付近からそれぞれ人骨が検出されている。それらの伴出遺物は「寛永通宝」で、第11号土壙からは「煙管」も出土している。独立して確認された第8号土壙以外はそれぞれ複合し、第9・10号土壙の複合関係は第9号土壙が第10号土壙を切りこんでいる。第11～14号土壙の複合関係については第11号土壙が第14号土壙を切りこみ、第12号土壙は第13・14号土壙を切りこんでいる。したがって、第11～14号土壙のうちでは第14号土壙が最も古く、 $14 < \frac{11}{13} < 12$ の順位が考えられる。

これら近世墓壙内から出土した「寛永通宝」はほとんど6枚で、三途の川の渡し貨としての六文銭で、「煙管」は生前に使用していたものを副葬したのであろう。人骨の検出状態からみた埋葬法は、座葬と考えられ、一方の壁によった形で検出されたものが多い。地元の口伝によれば、この墓壙のあった場所を通称「クラベラント」と呼び、「クラベ」氏の墓地であったと考えられる。



第66図 土壙主軸方向表

第41号土壙は第9号住居址の床面下に検出された土壙である。前述のように長径3.11m、短径1.61mの長楕円形の平面形を呈し、深さは2.4mほどで、その短径の断面形は篆研状をなしている。覆土中からは縄文時代中期末頃に編年される土器の小片が出土し、この土器片から時期を決定することはできないが、古墳時代前期より以前に構築されたもので、地表面から底面までの深さは3m内外のものである。このほかに松葉遺跡内から同様の形状を示す土壙の検出は認められないが、特徴のための「おとし穴」として報告されている例に類似している。東京都霧ヶ丘遺跡（注1）から多数確認されている土壙群のE類との類似が認められ、最近北海道・東北地方から多くの類例が報告されている。しかし、北海道中野A遺跡（注2）等で報告されているようなT-Pitとは形状的には異なる。各遺跡の報告例はかなり群をなすものであるが、第41号土壙のように単独で確認されるものは少なく、未調査区域に確認される可能性を多く含んでいる。「おとし穴」説以外には牧などに関係する遺構であろうとする研究者もあり、いずれも決定的ではない（注3）。

このほかに確認されている土壙群のうち第4・16・42号土壙等は覆土の状態等から古い時期に掘りこまれたものではなく、樹木を掘りこんだものであろうという地元の人達の意見もある。また、ほとんどの土壙はその用途が不明であるとしなければならない。

溝について

溝は遺跡中央部を中心に南台地縁辺部に向う第1号溝と北東に第2号溝が確認されている。いずれの溝も時期を決定する資料の出土はみられないが、第1号溝の台地縁辺部の底から手捏ね土器（第58図）が出土したのみである。この手捏ね土器は五領期に編年されるものであるが、溝を五領期のものと時期決定することは早計と思われ、第1・2号溝ともその形状の類似性からほぼ同一時期とすることが可能である。第1号溝の底面の高低差は約1.5mほどで台地縁辺部に傾斜を示し、第2号溝は15cm内外の差しか認められない。

両溝の機能として排水溝・区画溝・根切溝等が考えられるが、個々の機能をそれぞれ含んでいるととも考えられ、ある領域を区画して排水溝として利用された溝であろうか。遺跡の中央部を東西に走る道路の存在も溝と何らかの関係があるのではないかと考えられる。

塚について

塚群は4基の調査が実施されたが、その構築理由等を明確に把握するまでにはいたっていない。しかし、古墳等のように埋葬施設としての機能を有したものではなく、単なる信仰上の対象物と

したものでもない。その点で第4号塚から出土した土師質土器の意義は大きいと考えられる。

形状も第1号塚のように円墳状のやや大形のものや、第3・4号塚のように径7m内外の中規模のもの、また、第2号塚のように地表面観察からも検出が困難な小形のものなどがある。第1・2・4号塚は円形の形狀を呈しているが、第3号塚は方形状をなしている。また、第3・4号塚の裾部に検出された周溝状の遺構など不明な点が多い。

鈴木道之助氏は、千葉県東寺山戸張作遺跡の報告の中で塚についてまとめ、台地先端部等には存在せずに道路沿に位置し、寺院との関係を示唆している（注4）。松葉遺跡においても塚群の位置は台地の平坦部で道路沿に構築されている。盛土についても旧表土上に2～3層を積みあげ、盛土は硬く踏み固められたものではなく、戸張作遺跡においても同様の結果が報告されている。

鈴木氏の指摘された点を松葉遺跡にあてはめてみると、大羽谷津から若柴に通じる道格が中央にあり、金竜寺が若柴町の宿にあってかなりの共通性がみられる。

第4号塚から出土している土師質土器はその器種から燈明皿として利用されたものであろうか一部に油煙の付着が認められる。

茨城県内においてこのような塚群の調査例はほとんどみられず、美野里町花野井遺跡が知られるだけである（注5）。しかし、第4号塚のように土師質土器の出土は認められない。この塚群の意義は一般に供養のものなど信仰の対象とされているが、現段階では松葉遺跡においても同様な解釈をし、資料の増加を持ちたい。今後の塚の調査にあたっては遺物の存在する可能性も充分に考えられ、道路（古道）等の検討も必要である。

松葉遺跡の塚群の時間、時間的幅をもたせて中世末から近世の間に構築されたものと解釈したい。

その他の遺構・遺物について

調査が実施された住居址・土塙等の遺構のほかに、G 7 f 9 およびH 7 c 8 に径50cmほどの焼土塊が検出されたが、住居址における炉址とは考えられず、単なる焼土塊として把握している。また、先土器時代の石器についても明確なユニットの確認がなされていないため、明確な時期等については把握されていない。ただし、縄文式土器の出土する層位と同一層内から検出されている点は今後検討を要する点であると考えられる。

茨城県における五領期集落の調査動向と松葉遺跡

土師式土器の変遷について型式的に整理をしたのは周知のように杉原莊介氏がはじめてといえる。杉原式は南関東の資料を中心として、「和泉期」・「鬼高窓」・「真高窓」・「圓分窓」の四期の編年区分を昭和21年に発表している(注6)。その編年区分は、他の土師式土器研究者の編年区分とも内容的に類似したもので、その後の土師式土器編年の基本となった。

昭和32年から昭和37年にかけて、埼玉県東松山市五領遺跡の調査が五次にわたって実施され、和泉期以前に「五領期」が存在することが明らかとなった(注7)。このように、埼玉県内をはじめとして各地に和泉期以前の土師式土器の存在が明らかになり、基本的な編年区分が確立したといえる。

茨城県においては、昭和27年に東茨城郡茨城町長岡遺跡が長岡中学校の新設工事に伴って実施され、数基の住居址の調査によって出土した土師式土器に五領期の土器が含まれていたのが、県内における五領式土器の初見ともいえる(注8)。しかし、内容等の公表がなされず不明な点が多い。

昭和32年3月、茨城県立竜ヶ崎第一高等学校の体育館設置工事に伴って住居址1基の調査が下津谷達男氏によって実施され、その報告がなされている(注9)。

昭和35年12月、那珂湊市富士ノ上遺跡の一部が警察署宿舎の新設工事のため調査され、S字状口縁を有する台付變形土器等が出土している(注10)。

昭和42年2月、竜ヶ崎市駒馬町成沢遺跡において住居址1基の調査が竜ヶ崎第二高等学校を中心実施され(注11)、同年8月には、西宮一男氏によって新治郡千代山村市川遺跡の調査が行われた。市川遺跡も住居址1基の調査で、壺・甕・台付甕・壇・高壠・器台等の土器が出土している(注12)。

以上のように、昭和30年代から昭和40年代のはじめは五領期研究の初期的段階であり、集落の調査は住居址1基を単位とした部分的な調査に終っている。

昭和42年から昭和43年にかけて茨城考古学会が中心となり、県内の土師式土器の集成を実施している(注13)。しかし、遺跡からの採集品あるいは耕作などによって出土したものなどを多く集成しているため、五領期の土器にかぎらず伴出関係が不明で、報告者の明確な時期決定もなされていない。内容は資料紹介にとどまっているが、県内の土師式土器を始めて網羅したもので、その価値は高いといえる。

昭和42年4月から6月にかけて、茨城考古学会を中心として、日立市久慈町曲松遺跡の調査が宅地造成に伴って実施され、引き続いて同年11月から昭和43年3月にかけて曲松遺跡に隣接した金井戸遺跡の調査も実施された。両遺跡から五領期の住居址が数基調査され、金井戸遺跡では、方形同溝墓の調査も行われている(注14)。特に古墳時代の集落址研究に大きな期待をよせながら調査内容等については公表されず、遺物等は現在日立市郷土博物館に保管されている。

昭和45年3月から4月には、石岡市所在の常陸國府跡の調査が石岡小学校の改築工事に伴って実施され、歴史時代の遺構に擾乱されていたが、調査区中央部に五領期の住居址が1基検出された(注15)。

昭和40年代後半になると、県南部および水戸市周辺地区において大規模開発に伴う発掘調査が実施され、五領期の集落址の調査も実施された。

昭和47年7月から8月にかけて、茨城県住宅供給公社の土浦市烏山住宅団地造成に伴う烏山遺跡のA・B・C地点の発掘調査が国士館大学考古学研究室を中心として実施され、約250基に及ぶ住居址が調査されている。A地点においては、五領期の住居址5基が調査され、そのうち7期が玉造の工房址らしく、勾玉・管玉と未製品が多数出土している。五領期の玉造集団として貴重な内容を含んでいるが、中間報告が公表されただけで詳細については未発表である(注16)。

烏山団地の造成工事に伴う発掘調査は、その後も実施され、昭和49年3月に第二次調査、同年7月から12月にかけて第三次調査が茨城県教育委員会によって実施されている。

昭和48年4月から5月には、東茨城郡大洗町長峯遺跡の調査が県立大洗高校の新設工事に伴って実施され、弥生時代後期の住居址17基と古墳時代以降の住居址18基が調査されている。そのうち五領期に編年される住居址は2基である(注17)。

同年4月から9月には、水戸市向井原遺跡が宅地造成工事に伴って調査された。向井原遺跡は桜川の支流の沖積地に西南する標高45～47mほどの台地で、水田との比高は4～5mほどである。集落は台地西縁辺部に検出され、47基の住居址が調査され、五領期の住居址は33基で、ほかは縄文中期が1基、弥生中期および後期のものが8基で、不明のもの2基である。集落の東側には南北方向に走る幅2～3mほどの大溝が検出され、五領期の集落との関係が示唆される。また、本集落の最大の住居址の規模は9mほどの方形をなし、最小のものは3mほどの方形を呈している。住居址群のほか4基の方形同溝墓と1基の円形周溝墓が調査されている。しかし、報告書が未刊であるためその内容は公表されていない。

昭和49年3月～4月には勝田市三反田小学校遺跡（後三反田遺跡）の第一次調査が行われ、3基の五領期の住居址が調査された(注18)。三反田遺跡の遺物等については、以前に井上義安氏らの手によって紹介がなされているが(注19)、それらは発掘調査による資料ではない。また、昭和52年および昭和53年に第二・三次の発掘調査が実施されている。

昭和49年3月には茨城県教育委員会が中心となって土浦市烏山遺跡の第二次調査がD・E地点を中心として実施された。両地区から計75基の住居址が確認され、五領期に編年されるものはE地区に4基だけである(注20)。その報告については不明な点が指摘できる(注21)。

同じく7月から12月にかけては烏山遺跡群の第三次調査が茨城県教育委員会を中心として実施された。調査された遺構は住居址36基・土塙10基・溝状遺構1基・古墳9基・貝塚2地点である。

古墳時代前期の住居址として24基があげられているが、五領期および和泉期を前期とし、その各々の時期については記載されていない(注22)。

昭和50年から昭和53年にかけて東茨城郡大洗町鷺釜遺跡の発掘調査が実施された。鷺釜遺跡は国鉄鹿島線大洗駅建設に伴う区画整理事業と、鹿島線建設に伴う路線内の調査である。全体の内容については公表されていないが、中間報告等でその内容の一部を把握することができる(注23)。当遺跡においては、弥生時代後期から平安時代に及ぶ住居址群が検出された複合遺跡で、五領期の住居址のほかに方形周溝墓の調査も実施されている(注24)。

昭和51年7月から8月には那珂郡東海村小沢野遺跡の調査が茂木雅博氏を中心に行われ、住居址が47基ほど調査された。そのうち、五領期に編年されるものは9~10基ほどで、複合が著しく土器を作りものは2基であり、新旧二期の分類がなされている(注25)。

昭和40年代後半から昭和53年にかけては五領期の集落を含む古墳時代の集落跡の調査例が多く茨城県における五領期集落研究の重要な時期といえる。

昭和52年7月から8月にかけて勝田市三反田遺跡の第二次調査が、継続調査として実施された。内容は五領期の住居址2基の調査であるが、多くの遺物が出土している。特筆すべきことは、南関東系の弥生式土器の作出がみられ、今後の資料が待たれる(注26)。三反田遺跡の第三次調査は、昭和53年3月に実施され、五領期の住居址2基が調査されている(注27)。

昭和52年7月から昭和53年3月には、竜ヶ崎ニュータウン建設に伴う松葉遺跡と外八代遺跡が調査され、松葉遺跡については前章で記述した。外八代遺跡についてはほとんど遺構内の調査は実施されていないが、五領期に編年される土器が検出されている(注28)。

昭和52年10月から昭和53年3月には、鹿島郡鹿島町木滝台遺跡が調査され、稻荷台遺跡から五領期の住居址25基と大溝が確認されている。特に大溝からは多くの五領期の土器が出土し、単なる排水溝等の施設ではなく、祭祀の場に利用されたものであろうとしている(注29)。

昭和53年2月から3月は、那珂郡東海村部原遺跡の調査が実施され、五領期の住居址が検出されている(注30)。

昭和53年度内の県内における五領期集落の調査については明確に把握していないが、当教育財團の実施した調査において、竜ヶ崎市沖餅遺跡・新治郡千代田村下志筑遺跡・同村西原遺跡・同郡桜村下広岡遺跡等から住居址の検出が知られている。

このように昭和27年から昭和54年初めまでの茨城県内における五領期の集落調査の動向を記述したが、大略すると部分的な調査例から大形開発に伴う集落跡全体の調査へと移向し、その調査例も増加した。集落跡全体の調査例の増加の時期に、遺跡を分割して年度ごとに部分的な調査を実施する動きもあり、今後の調査研究に期待されるものである。

五領期の集落址の内容を平面的に分類すると、住居址の分布密度の高い集落跡とそうでない集落跡に分類される。密度の高いものとしては向井原遺跡・烏山遺跡（三次）・稻荷台遺跡と部分的ではあるが三反田遺跡等があげられる。これらの遺跡は三反田遺跡のように部分的な調査例を除けば集落跡全城の調査例であるといえる。稻荷台遺跡についてみれば、削平された部分もあるが、その分布密度は非常に高いものといえる。また、向井原遺跡についてみれば、五領期集落跡調査の好例ということができる。しかし、平面的な分類にしても各住居址の時期を明確に把握しなければ、その集落跡の構成単位の分類にも大きな誤りを犯すことになる。

向井原遺跡調査の私見によれば、五領期の住居址は少なくとも二期に分類することが可能で、五領期における住居址間の複合関係はみられない。しかし、方形周溝墓の一部が住居址を切りこんでいる事実から、方形周溝墓にも時期差が認められ、二期のうちのいずれかよりも後出することができる。後日、向井原遺跡の報告も公表されることと考えられるので、その内容の分析については報告書刊行時に発表したいと考えている。

向井原遺跡の東側には南北に走る大溝がみられ、集落跡を区画していると思われる。このような大溝は、稻荷台遺跡にもみられ、集落を区画する溝であろう。大溝等の遺構については今後の資料の増加を待ちたい。

茂木雅博氏は、小沢野遺跡の調査報告書の中で、五領期に二期の集落跡の存在を示し、その時期を五領Ⅱ式・五領Ⅲ式としている。

松葉遺跡出土の土器群を、他の遺跡の土器群と比較した場合に、小沢野遺跡における五領Ⅱ式と比定された土器群や稻荷台遺跡の一部の土器群、三反田遺跡の土器群等に類似性が認められ、五領Ⅱ式の土器群と時期決定することができる。しかし、稻荷台遺跡・三反田遺跡は松葉遺跡から出土していない土器群を含んでいる。稻荷台遺跡にはかなり多くの器種がみられる。高環形土器は大形のものが多くみられる。また、壺形土器においても南関東系弥生式土器の伴出がみられる。三反田遺跡の土器群は、松葉遺跡出土の土器群と類似したもの以外に南関東系弥生式土器群の伴出例が多くみられ、第4号住居址出土の壺形土器は南関東弥生式土器の系譜を示したもので、搬入された可能性が強い。また、S字状口縁を有する台付変形土器の出土もみられる。

以上のような土器群は松葉遺跡においてはほとんどみられず、有段口縁の端部に押圧痕のある壺形土器の破片がみられるだけである。

茨城県における五領期の集落および土器群についての研究は、前述の動向にもかかわらずほとんどなされておらず、川崎純徳氏によって古墳文化成立の問題について論ぜられたものがある（注31）。

川崎氏によれば、茨城県における弥生文化の終末から古墳前期の文化への変遷は、少数の五領



△発掘調査集落址 *方形周溝墓
○土器出土遺跡 *発生期古墳

第 67 図 茨城県内五種類期遺跡地図

期の侵入者が在来の弥生人の収奪上にまず霞ヶ浦周辺の開拓を実施し、全県下に波及していくとしている。それは、弥生時代後期において空白地帯に近い状態であった霞ヶ浦周辺および県南地方に、五領期の侵入者が溝地造成の農業土木技術をもって侵入した時期と、さらに、既成の労働力を再編成することによって広大な沖積地の開拓を行う時期に二分され、この結果が県南地方を中心に五領期の遺跡が多い背景として理解されるとしている。大塚初重氏はこの二時期の土器群を、「前段階の弥生式土器終末の特徴をなお残しつつも、一部に先進文化の波及をみせる新式の土器群」と「西方畿内・東海地方からの文化の波及によって初めて出現する。いわば畿内の特色をもつ土器群」と二分している。つまり、前者が五領Ⅰ式土器、後者が五領Ⅱ式土器である（注32）。

両氏の土器細分には若干の差異も認められるが、「北関東最終末の弥生式土器である十王台式土器から最古の上師式土器への変化は、極めて激しい動きとしてとらえられる。」と大塚氏は述べ、川崎氏と同様な見解を示している。

五領Ⅰ式土器を出土する明確な集落跡として注出される遺跡は不明な点が多いが、松葉遺跡のように五領Ⅱ期の集落跡は広大な沖積地の開拓を行う時期の集落跡であるといえる。竜ヶ崎市内を概略的にみた場合にも、松葉遺跡と同時期の遺跡数は多く、規模としてはそれほど大形の遺跡ではないが、農耕地の開拓者集団として分散した単位集団の集落跡であったといえる。

この時期は、一河川の流域や湖沼周辺の湿原地帯の小さな分布圏を有するばかりではなく、広い分布圏を示し、各地において政治的な性格を備えた支配者階級の出現へと発達していく時期でもある。そして、茨城県における古式古墳と呼ばれる発生期の支配者階級の墳墓を出現させ、さらに、大和朝廷の権力等の浸透によって大形の古墳築造期へと展開していく。

茂木雅博氏は小沢野遺跡の調査結果の中で小沢野Ⅰ期（五領期）の集落跡は、五領Ⅱ期を5～6棟を中心とした2単位集団の構成とし、計算上は約50人ほどの人口を有した集落であり、五領Ⅲ期は人口の減少がみられ、和泉期にはさらに減少する傾向があるとしている。

五領Ⅱ期においては、人口の増加とも関連して血縁的な単位集団が独立分散して耕作地の開拓を実施し、その時期の一集落が松葉遺跡等にみられるような住居址の構成を有したもので、広い分布圏を示しながら、各地に政治的な支配者階級の出現へと発展していくものであろう。

五領期には古墳の発生の問題や方形周溝墓の存在等多くの問題を有し、簡単にはいいつくせないが、発生期の古墳と方形周溝墓との併行時期に関する解明されなければならない問題点もそのひとつとしてあげられる。

これらの問題点については今後の研究課題としたが、松葉遺跡の時期は前述のように分布圏の拡大の時期にあたり、その居住期間は一世代あるいは二世代を越えない期間で、沖積地等の開拓に従事した集落として把握することができる。

引用文献

- 注1 薩ヶ丘遺跡調査団 「薩ヶ丘」 昭和48年10月
- 注2 千代兼他 「函館空港第4地点 中野A遺跡」 函館市教育委員会 昭和52年3月
- 注3 石岡憲雄氏の御教示による。
- 注4 鈴木道之助他 「京葉II 千葉市東寺山戸張作遺跡」 千葉県文化財センター 昭和52年3月
- 注5 能島清光 「花野井遺跡調査報告書」 美野里町教育委員会 昭和52年3月
- 注6 杉原莊介 「原始学序論」 昭和21年
- 注7 大塚初重 「埼玉県五領遺跡の調査について」 「日本考古学協会第21回総会研究発表要旨」 日本考古学協会 昭和35年
杉原莊介・大塚初重 「埼玉県五領遺跡第三次調査について」 「日本考古学協会第27回総会研究発表要旨」 日本考古学協会 昭和36年
- 大塚初重 「埼玉県東松山市柏崎五領遺跡の土器」 「弥生式土器集成」 昭和46年12月
- 杉原莊介・大塚初重・和島誠…・金井塚良一 「埼玉県五領遺跡第四次調査について」 「日本考古学協会昭和37年度大会研究発表要旨」 日本考古学協会 昭和37年
- 金井塚良一 「五領遺跡B区・発掘調査中間報告」 「台地研究」 1・台地研究会 昭和38年
- 大塚初重 「埼玉県東松山市五領遺跡」 「日本考古学年報」 10 日本考古学協会 昭和38年
- 大塚初重 「埼玉県東松山市五領遺跡」 「日本考古学年報」 12 日本考古学協会 昭和39年
- 大塚初重 「埼玉県東松山市五領遺跡」 「日本考古学年報」 13 日本考古学協会 昭和40年
- 大塚初重 「埼玉県東松山市五領遺跡」 「日本考古学年報」 15 日本考古学協会 昭和42年
- 注8 伊東重敏 「常陸国東茨城郡長岡遺跡略報」 常北考古学研究所学報9輯 昭和27年7月
- 大森信英 「古墳文化と那珂国造」 「水戸市史」 上 水戸市 昭和38年10月
- 井上義安・大内幹男 「東茨城郡茨城町長岡中学校校庭の土師器」 「茨城県の土師器集成」 1 茨城考古学会 昭和42年3月
- 神永義彦 「東茨城郡茨城町長岡の土師器」 「茨城県の土師器集成」 1 茨城考古学会 昭和42年3月
- 川崎純徳 「長岡遺跡出土の土器」 「土師式土器集成」 I 昭和46年12月
- 注9 下津谷達男 「茨城県奄ヶ崎市県立第一高等学校内遺跡」 「上代文化」 37 国学院大学考古学研究会 昭和42年10月
- 西宮一男 「奄ヶ崎第一高等学校内遺跡」 「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」 茨城県 昭和

49年2月

- 注10 井上 義 「那珂湊市富士ノ上警察署敷地の土師器」『茨城県の土師器集成』1 茨城考古学会 昭和42年3月
- 上川名昭 「常陸富士ノ上遺跡」『日本大学第三高校研究年報』12 昭和43年
- 井上義安 「富士ノ上遺跡出土の土器」『土師式土器集成』I 昭和46年12月
- 注11 岡田 猛 「茨城県竜ヶ崎市駒馬町成沢遺跡調査報告」 昭和43年
- 西宮一男 「成沢遺跡」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県 昭和49年2月
- 注12 西宮一男 「新治郡千代田村市川の土師器」『茨城県の土師器集成』2 茨城考古学会 昭和43年3月
- 西宮一男 「市川遺跡・根崎古墳・清水並木経塚」 千代田村埋蔵文化財調査報告 I 千代田村教育委員会 昭和44年2月
- 西宮一男・滝田源三郎・鈴木幹男 「茨城県新治郡千代田村の遺跡調査」『茨城考古学』2 茨城考古学会 昭和44年3月
- 西宮一男 「市川遺跡出土の土器」『土師式土器集成』I 昭和46年2月
- 西宮一男 「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」 茨城県 昭和49年2月
- 注13 茨城考古学会 「茨城県の土師器集成」1・2 昭和42年・昭和43年
- 注14 佐谷光男 「日立市曲松遺跡調査概報」『史学部報』17 日立第一高等学校史学部 昭和43年
- 佐藤次男 「曲松集落遺跡」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県 昭和49年2月
- 佐藤次男 「金井戸集落遺跡」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県 昭和49年2月
- 岡村和子 「d千葉県 g茨城県(東関東地方)」「原始墓制研究」5一方形周溝墓研究その5「研究史編」東日本一原始墓制研究会 昭和52年6月によれば、方形周溝墓の検出された遺跡は金井戸遺跡ではなく、佐藤政則氏の御教示として曲松遺跡から検出されたとしている。しかし、方形周溝墓の検出されたのは金井戸遺跡の台地の東縁辺部である。
- 注15 豊崎 卓 「常陸國府址発掘調査報告書」 石岡市教育委員会 昭和48年12月
- 注16 大川清・戸田有二 「烏山集落遺跡」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県 昭和49年2月
大川、清 「茨城県土浦市烏山遺跡発掘調査中間報告」 国立館大学考古学研究室 昭和49年
- 注17 井上義安・藤井裕紀枝他 「茨城県大洗町長峯遺跡」大洗町文化財調査報告書4集 大洗町教育委員会 昭和48年12月
- 注18 川崎純徳・鶴志田篤二 「三反田遺跡」勝田市教育委員会 昭和52年3月
川崎純徳 「三反田遺跡」『日本古考古年報』27 日本考古学協会 昭和51年5月
- 注19 井上義安 「勝田市三反田小学校敷地の土師器」『茨城県の土師器集成』1 茨城考古学会 昭和42年3月

- 井上義安 「三反田遺跡出土の土器」『土師式土器集成』I 昭和46年2月
- 注20 西宮一男 「鳥山遺跡」『日本考古学年報』25 日本考古学協会 昭和50年3月
西宮一男・大森信英・高根信和・小室勉他 「土浦市鳥山遺跡群一土浦市鳥山住宅用地内埋蔵文化財2・3次調査報告書一」茨城県住宅供給公社 昭和50年3月
- 注21 川崎純徳 「土浦市鳥山遺跡の検討」『常総台地』7 昭和51年5月
- 注22 注20同
- 注23 ひいがま遺跡発掘調査団 「ひいがま」I 昭和50年8月
ひいがま遺跡発掘調査団 「ひいがま」II 昭和50年11月
ひいがま遺跡発掘調査団 「ひいがま」III 昭和51年3月
ひいがま遺跡発掘調査団 「ひいがま」IV 昭和52年4月
- 注24 宮田毅 「鉢釜遺跡」『日本考古学年報』28 日本考古学協会 昭和52年4月
菊田徹 「鉢釜遺跡出土土器について」『ひいがま』II ひいがま遺跡発掘調査団 昭和50年11月
- 注25 茂木雅博 「茨城県東海村小沢野遺跡調査概報」 小沢野遺跡調査団 昭和52年3月
茂木雅博 「小沢野遺跡」『日本考古学年報』29 日本考古学協会 昭和53年3月
茂木雅博他 「小沢野」 東海村教育委員会 昭和53年4月
- 注26 川崎純徳・鴨志田篤二・住谷光男 「茨城県勝田市三反田遺跡群調査報告書」 勝田市教育委員会 昭和53年3月
- 注27 鴨志田篤二・住谷光男・川崎純徳・山崎悠紀子 「勝田市三反田遺跡」『第2回茨城県考古学研究発表会要旨』 茨城県考古学協会 昭和53年10月
- 注28 財團法人茨城県教育財團 「竜ヶ崎ニュータウン埋蔵文化財調査報告I—昭和52年度外八代遺跡・松葉遺跡一」 昭和43年3月
- 注29 鹿島町木滝台遺跡調査会・日本文化財研究所 「木滝台遺跡群（稻荷台遺跡・桜山古墳）埋蔵文化財調査概報」 昭和53年3月
田中崇 「鹿島町木滝台遺跡」『第2回茨城県考古学研究発表会要旨』 茨城県考古学協会 昭和53年10月
- 注30 茂木雅博 「茨城県東海村部原遺跡調査報告書」 東海村教育委員会 昭和53年3月
- 注31 川崎純徳 「古墳以前一常総地方における古墳成立基盤について考えるー」『常総台地』6 昭和47年12月
- 注32 大塚初重 「集落と祭祀遺跡・生産関係遺跡」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 昭和49年2月
大塚初重 「弥生式土器から土師式土器へ」『古代の地方史5 坂東編』 昭和52年10月

図 版



P L 5 松 菜 遺 跡 (林地区)



P L 6 松 菜 遺 跡 遠 景



P L 7 松葉遺跡遠景



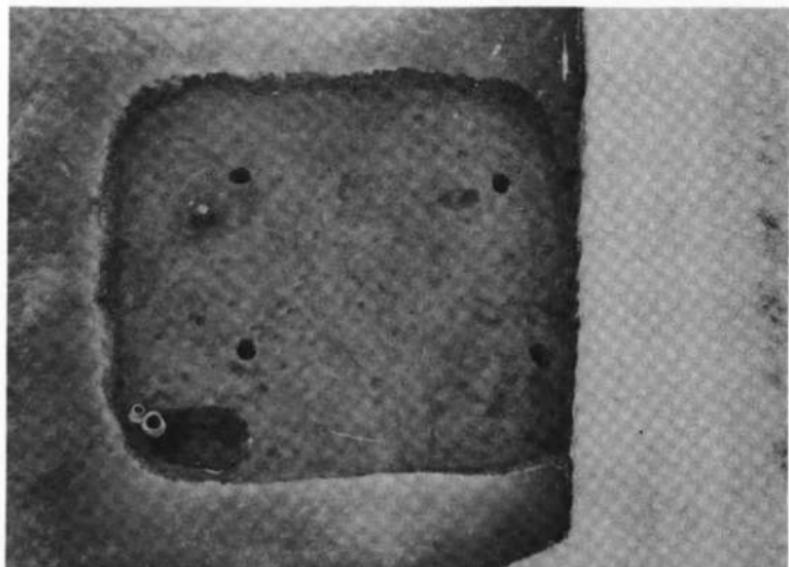
P L 8 松葉遺跡遠景



P L 9 松葉遺跡全景



P L 10 松葉遺跡全景



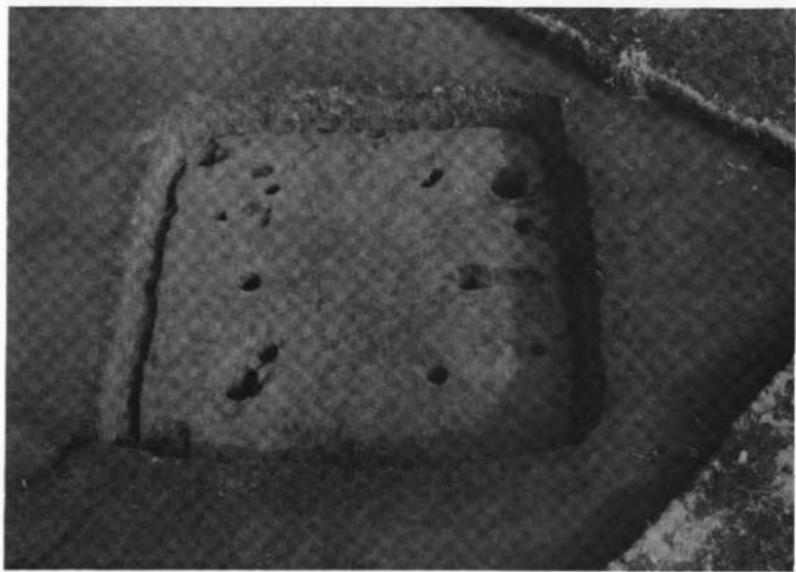
P L II 第 I 号 住 居 址



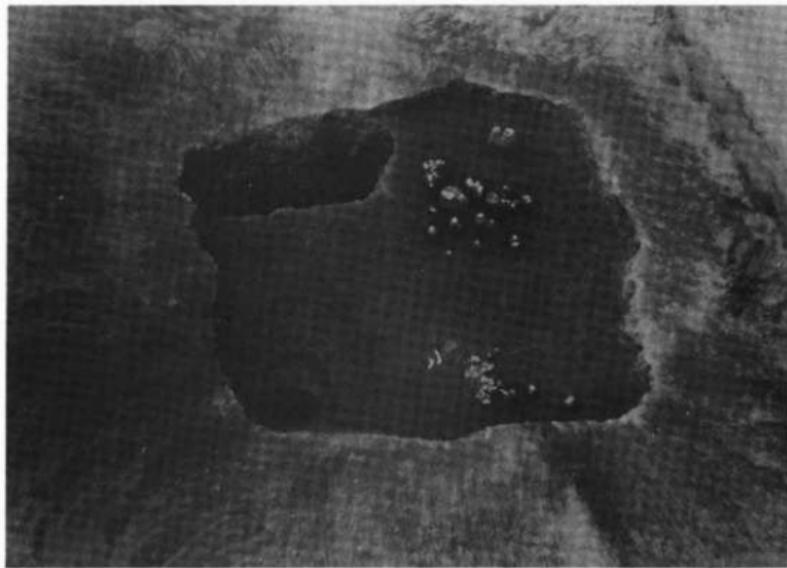
P L 12 第 I 号 住 居 址 遗 物 出 土 状 态



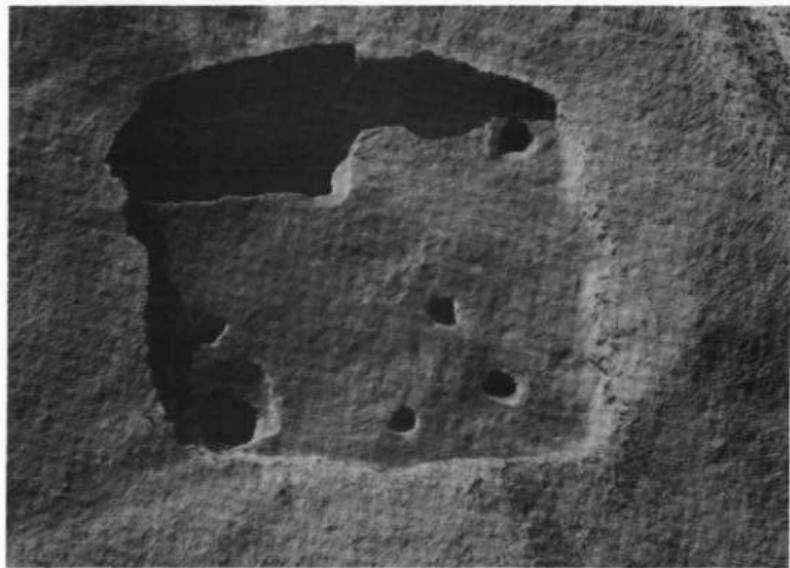
P L 13 第 2 号 住 居 址 遗 物 出 土 状 态



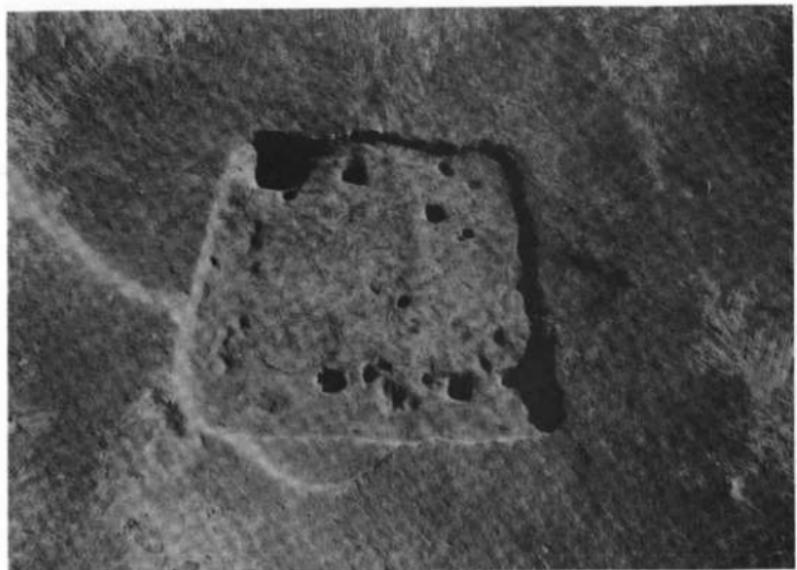
P L 14 第 2 号 住 居 址



P L 15 第 3 号 住 居 址 遗 物 出 土 状 態



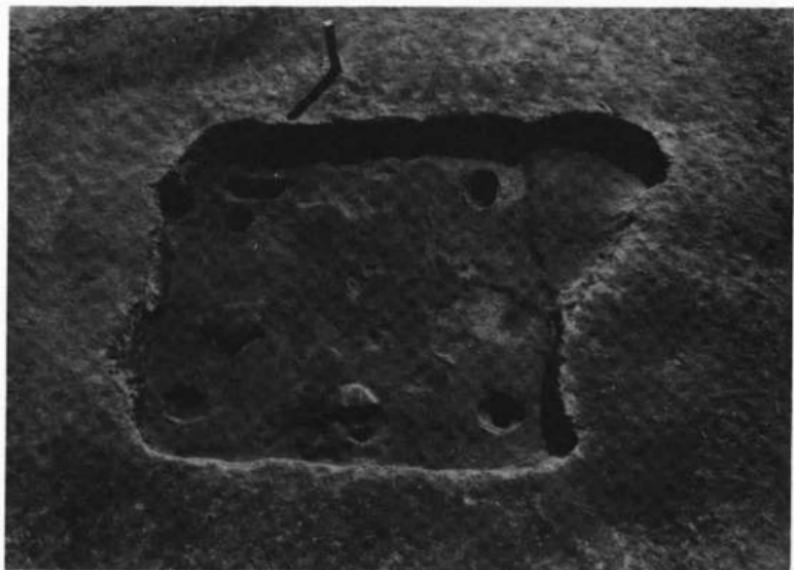
P L 16 第 3 号 住 居 址



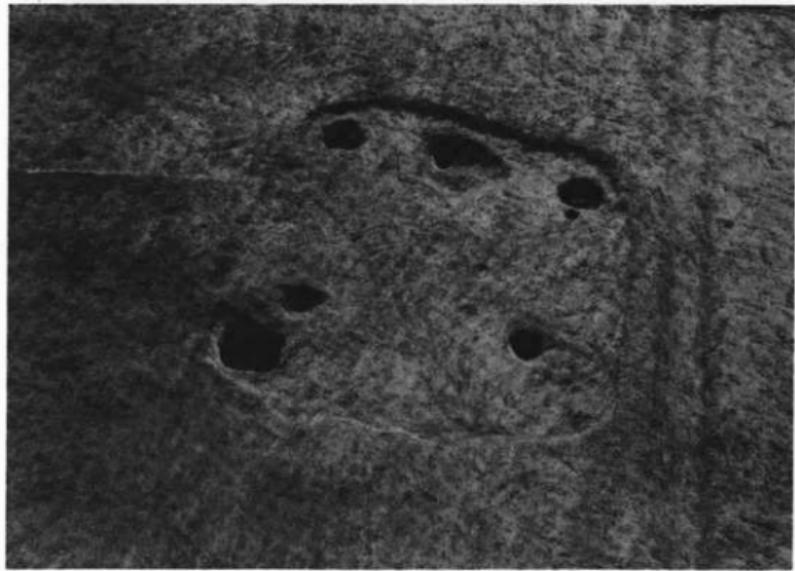
P L 17 第 4 号 住 居 址



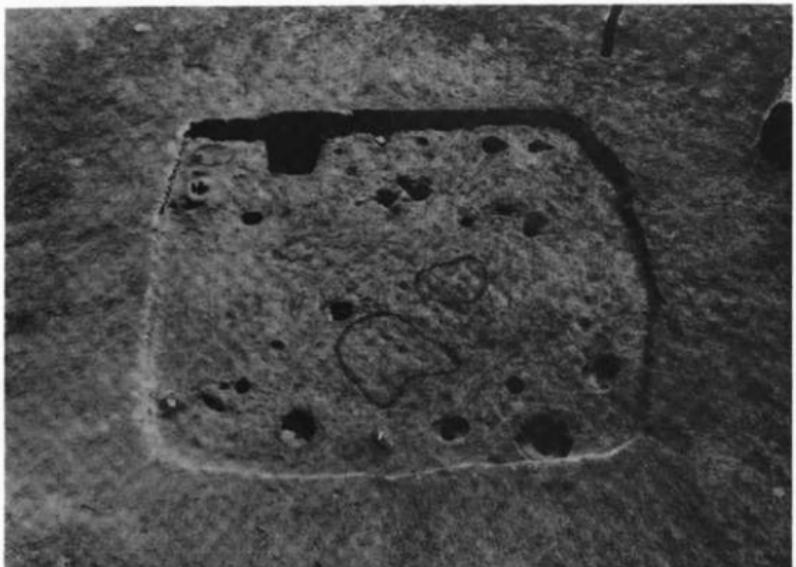
P L 18 第 5 号 住 居 址



P L 19 第 6 号 住 址



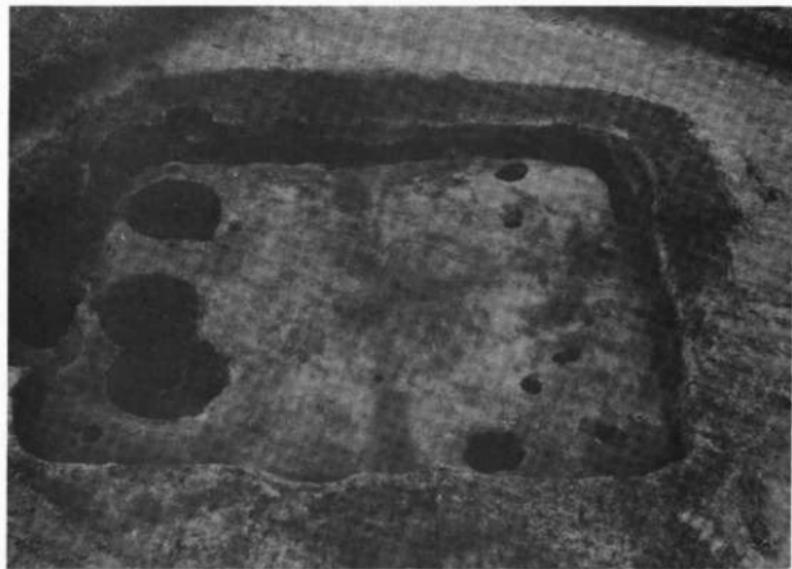
P L 20 第 7 号 住 址



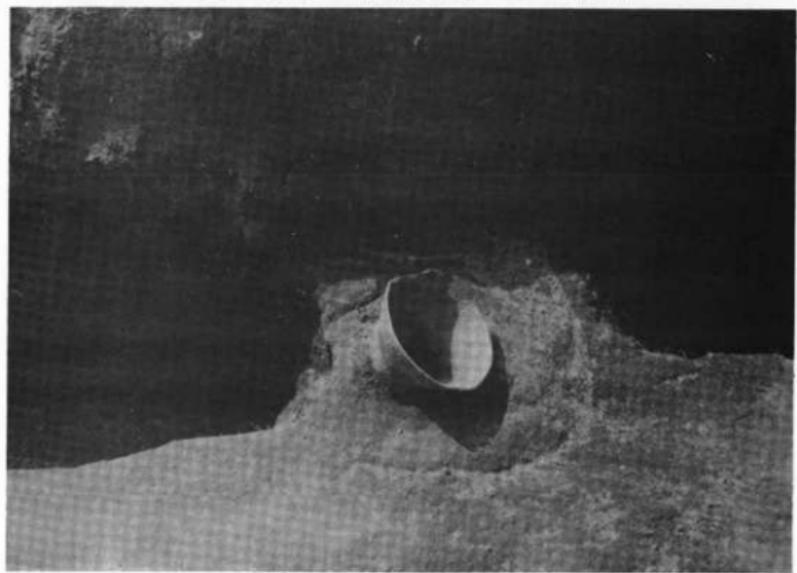
P L 21 第 8 号 住 居 址



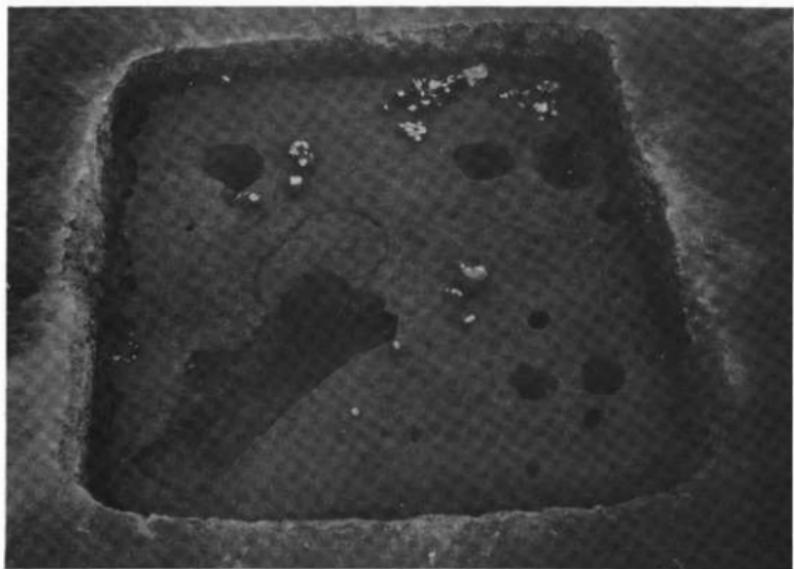
P L 22 第 8 号 住 居 址 遗 物 出 土 状 態



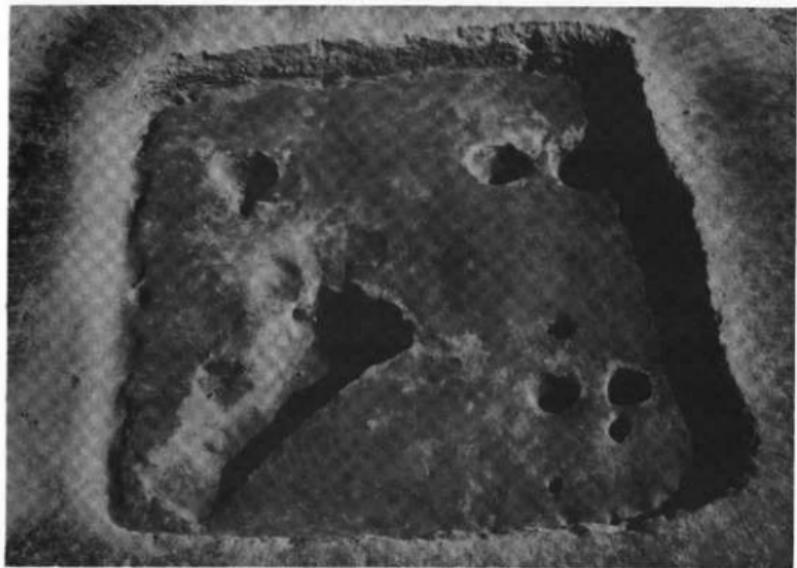
P L 23 第 9 号 住居 址 お よ び 墓 塚 群



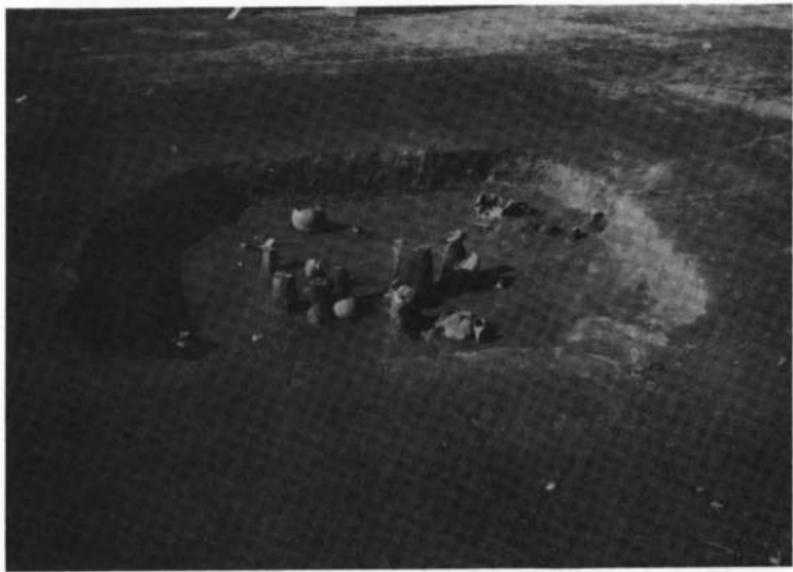
P L 24 第 9 号 住居 址 遺 物 出 土 状 態



P L 25 第 10 号 住 址 遗 物 出 土 状 態



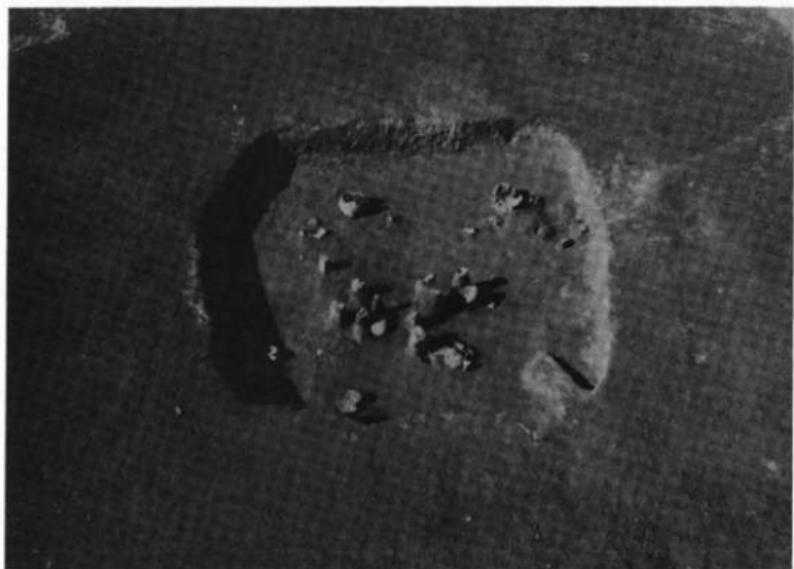
P L 26 第 10 号 住 址



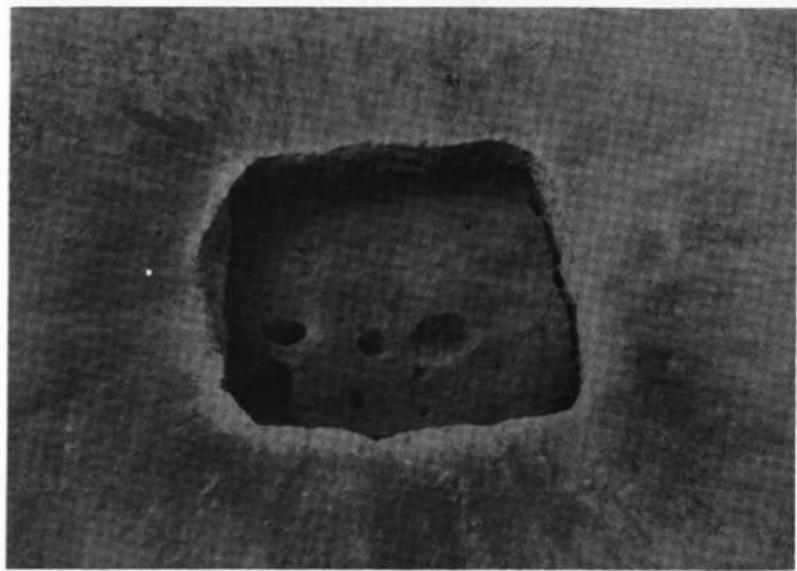
P L 27 第 II 号住居址遺物出土状態



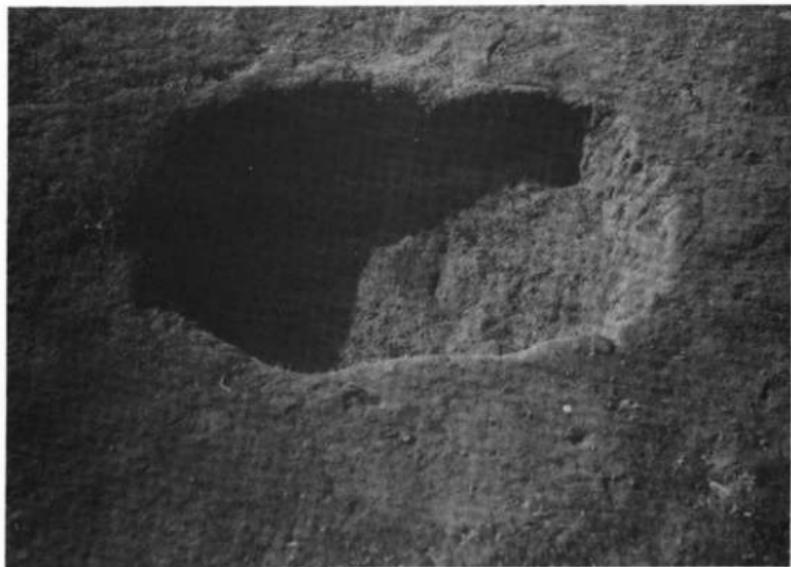
P L 28 第 II 号住居址遺物出土状態 (部分)



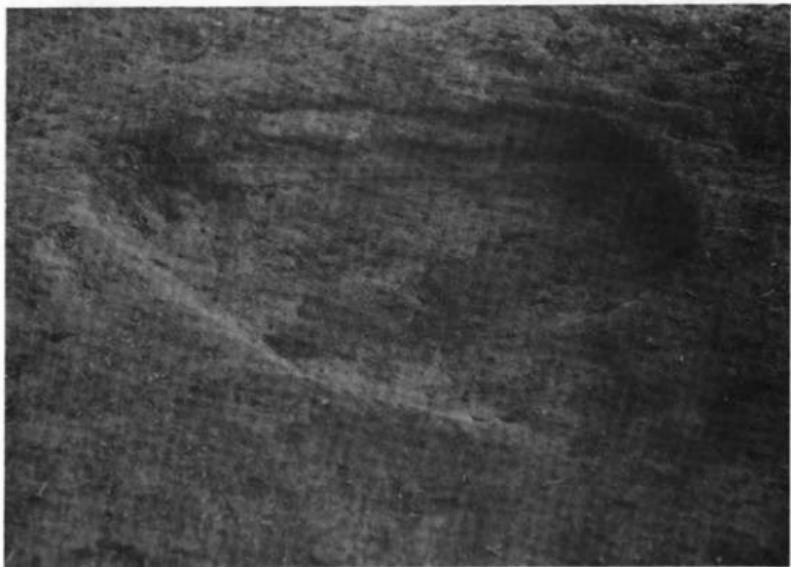
P L 29 第 II 号 住 居 址 遗 物 出 土 状 態



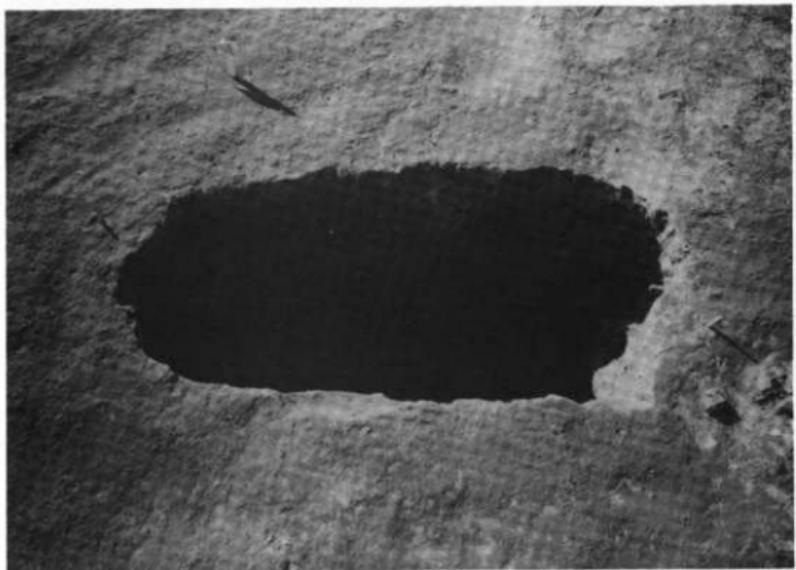
P L 30 第 II 号 住 居 址



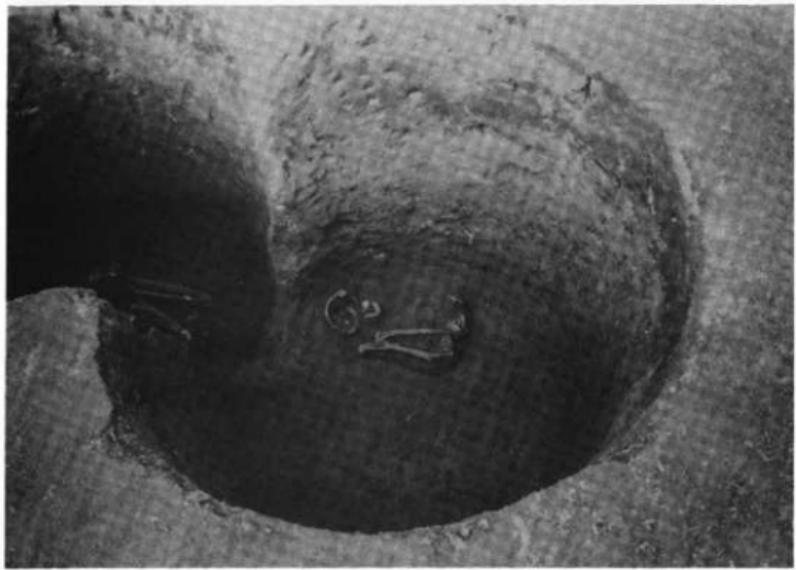
P L 31 第 1 号 土 壤



P L 32 第 2 号 土 壤



P L 33 第 4 号 土 壤



P L 34 第 10 号 土 壤



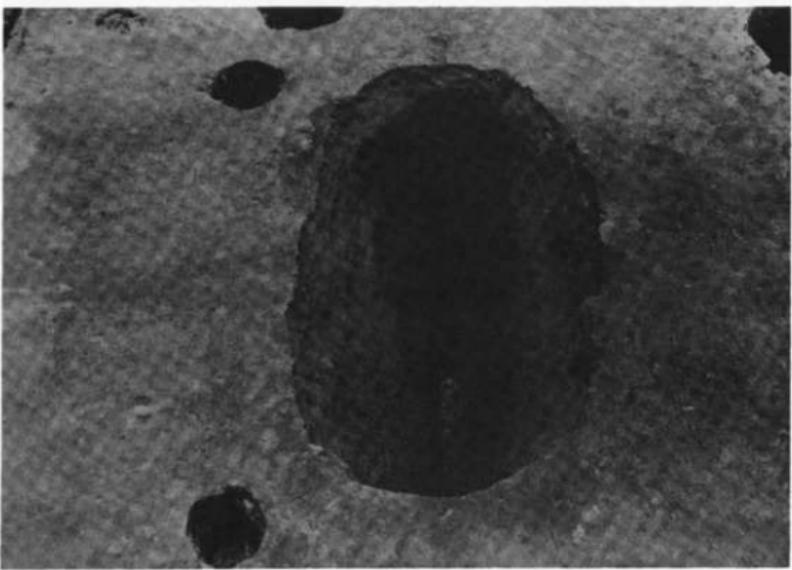
P L 35 第 12 号 土 壤



P L 36 第 13 号 土 壤



P L 37 第 16 号 土 壤



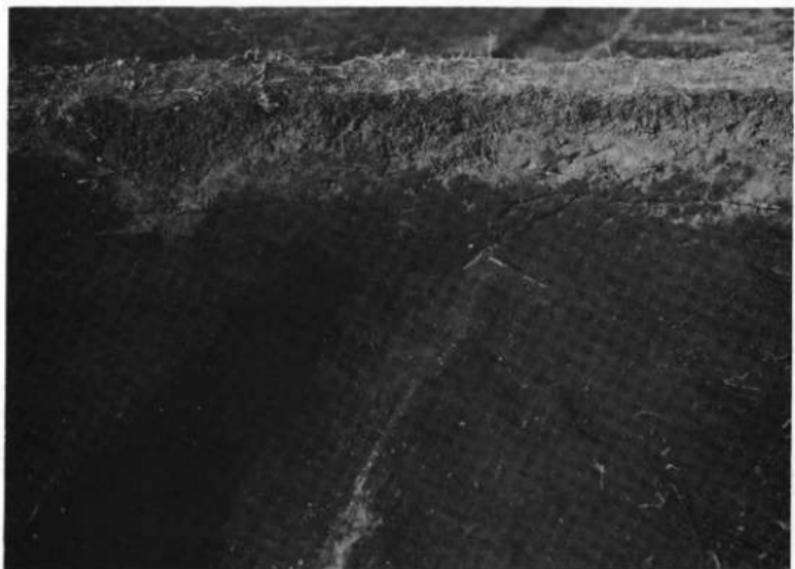
P L 38 第 42 号 土 壤



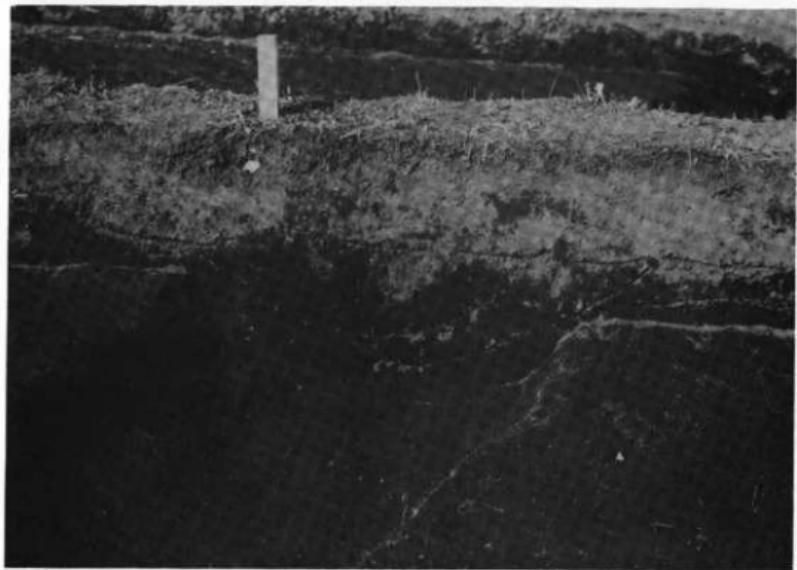
P L 39 第 I 号 溝 調 査 風 景



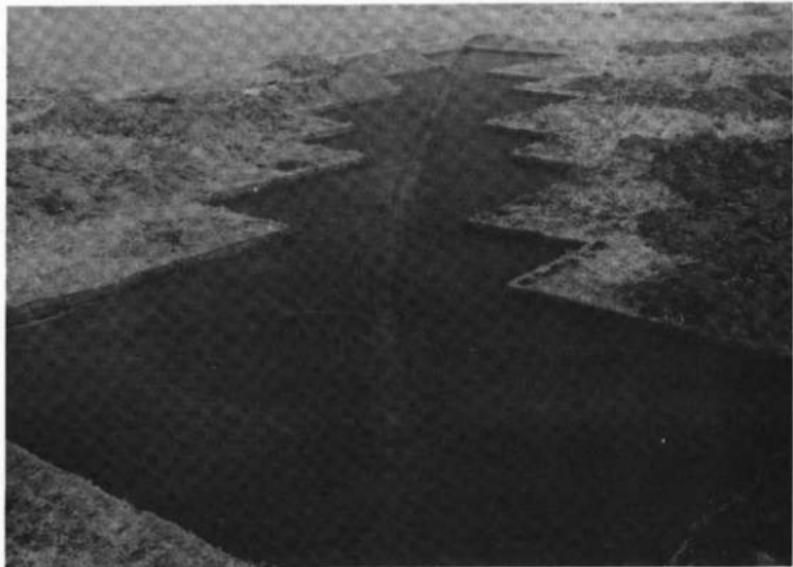
P L 40 第 I 号 溝



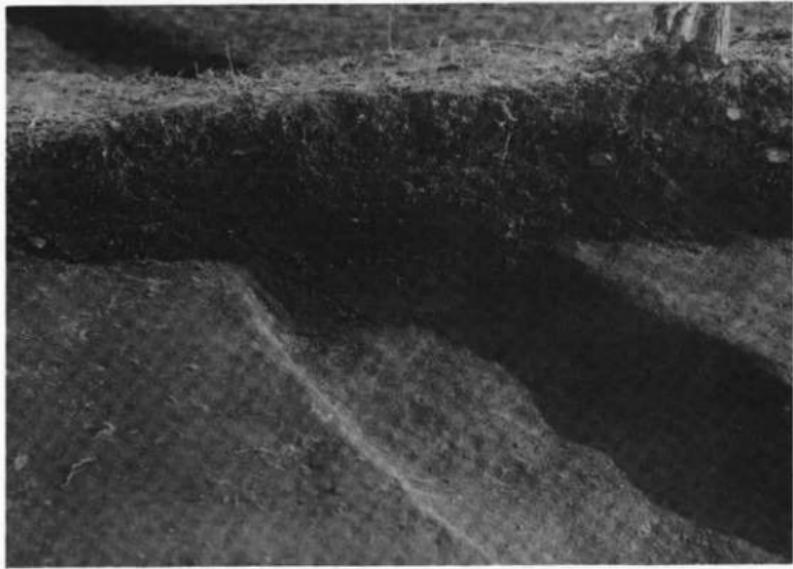
P L 41 第 I 号 溝 断 面 (1)



P L 42 第 I 号 溝 断 面 (2)



P L 43 第 2 号 溝



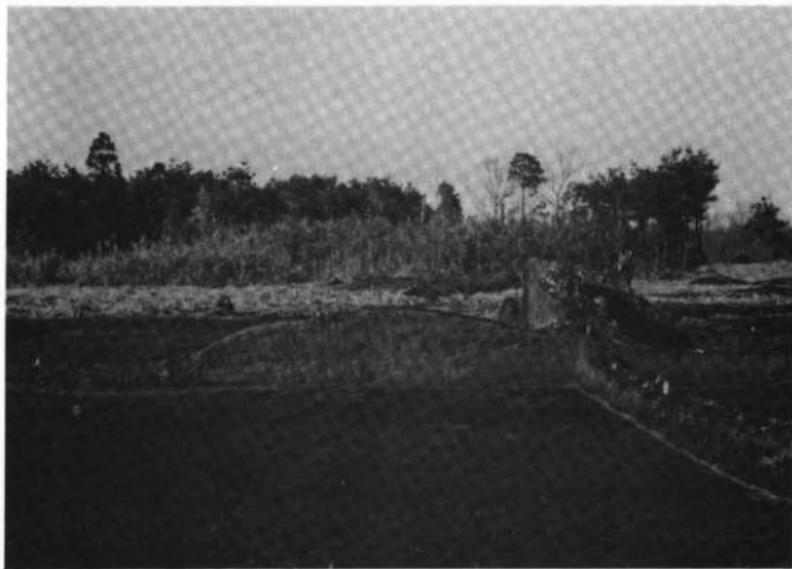
P L 44 第 2 号 溝 断 面



P L 45 第 I 号 塚



P L 46 第 I 号 塚 調 査 風 景



P L 47 第 1 号 塚 断 面



P L 48 第 2 号 塚



P L 49 第 3 号 塚



P L 50 第 4 号 塚



P L 51 第 3 · 4 号 塚



P L 52 第 3 号 塚



P L 53 第 4 号 塚



P L 54 第 4 号 塚 遺 物 出 土 状 態



P L 55 調査区出土先土器時代遺物



P L 56 第Ⅰ号住居址出土遺物 1~3 (縮尺不同)



1



2



3



5



4



6



7

P L 57 第2(1)·3(2)·6号住居址(3~7)出土遺物(縮尺不同)



1



2



3

P L 58 第 8 (I) · 9 号住居址 (2 ~ 3) 出土遺物 (縮尺不同)



1



2

P L 59 第10号住居址(1·2)出土遺物(縮尺不同)



1



2



3



4

P L 60 第10(1·2)·11号住居址(3·4)出土遺物(縮尺不同)



1



3



4



2



5



6

P L 61 第II号住居址(1~6)出土遺物(縮尺不同)



1



2



3



4 A



4 B

P L 62 第11号住居址(1~3)出土遺物および調査区出土砥石(4)(縮尺不同)



A



B

P L 63 各 住 居 址 出 土 石 器



1

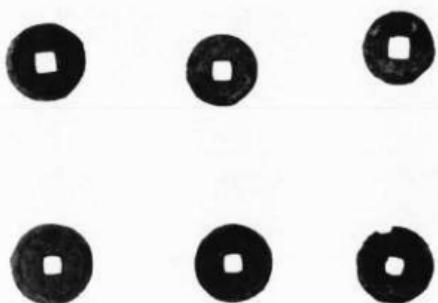


2



3

P L 64 第 8 (1) · 9 (2) · 10 号 土 壤 (3) 出 土 货 钱



1



2

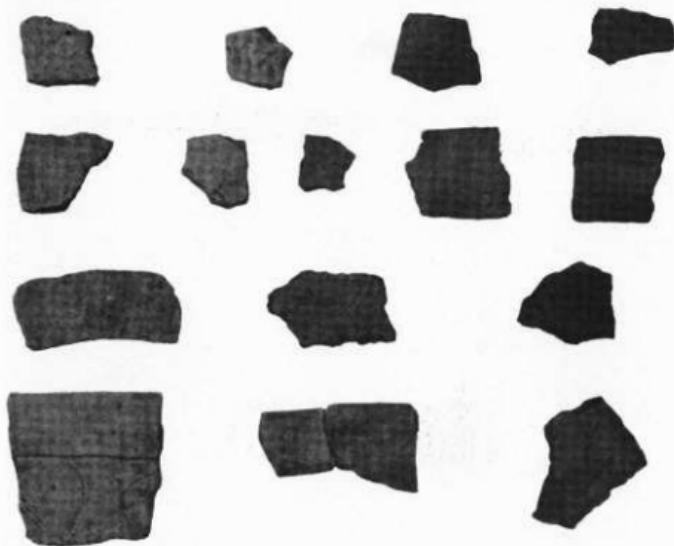


3

P L 65 第 II (1·2) · 13 号 土 壤 出 土 遗 物



P L 66 第 14 号 土 壤 出 土 货 纸



P L 67 调 查 区 出 土 绳 文 式 土 器



1



2



3



4



5



6

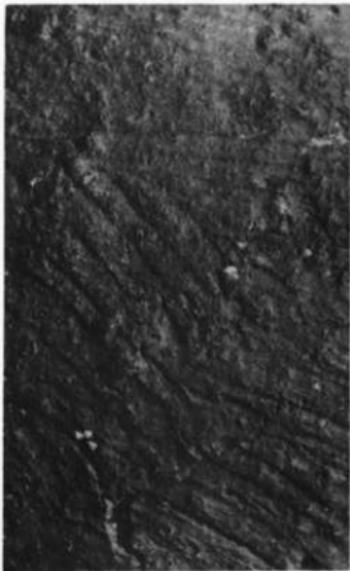


7

P L 68 第 4 号 塚 出 土 土 师 質 土 器 (1~7)



1



2



3 A



3 B

P L 69 刷 毛 目 整 形 痕 各 種 (1 - 3)
— 160 —

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告Ⅰ

—松葉遺跡—

昭和54年3月27日印刷

昭和54年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3-4-57

印刷 株式会社 高野高速印刷